

國立臺灣大學文學院日本語文學系



碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master's Thesis

日本中世説話集における『莊子』の受容と変容
——『宇治拾遺物語』『十訓抄』を中心に——

The Acceptance and Transformation in “Zhuangzi” in the Japanese
setsuwa collections of medieval period: focus on “Uji Shūi Monogatari”
and “Jikken-shō”

黃琮軒

Tzung-shiuan Huang

指導教授：曹景惠 博士

Advisor: Jing-huei Tsau, Ph.D.

中華民國 111 年 8 月

August 2022

誌謝



時光荏苒，一轉眼又是四個春秋過去。回想起當初自己在職場身心俱疲、爾後又逢日本留學考試失利，是臺大日文所接納了如此狼狽不堪的我，這份恩情永遠不會忘記。

首先必須先感謝申請碩士推甄時，替我撰寫推薦信的清華大學師長 鍋島亞朱華副教授、楊佳嫻副教授。即使學生已畢業數年，師長們仍不吝撥冗相助的心意令人銘感五內。亦必須感謝研究所生涯四年中，裨益學生最多的指導老師 曹景惠副教授，曹老師為人嚴謹，凡事但求盡善盡美，一路上看著老師的身影學習、受到老師的鞭策及鼓勵，才能令學生亦以高標準要求自身，最終完成眾人認可的研究內容。同時也感謝口試委員：輔仁大學 楊錦昌教授、淡江大學 蔡佩青副教授，於提案審查和口試時皆用心給予學生眾多寶貴意見，致使本論文能夠精益求精。

同時也感謝一直以來都很支持我生涯規劃的家人，以及從男友變成配偶的先生，謝謝你總是溫柔堅定地陪伴我走過許多輾轉的路途。在回歸學生身份後，也有幸再次感受到同儕情誼的美好，因此也感謝一同待在研究室從白天奮鬥到黑夜，互相切磋砥礪、互相給予幫助的同學、學長姐、學弟妹們，謝謝你們替我的研究所生活增添許多美好回憶。

另外也要感謝四年間分別提供獎學金的似鳥集團、中華扶輪獎學金、日本台灣交流協會，沒有您們的實質援助，便無法完成此項研究和敝人的學業，再次鄭重感謝。

最後其實也想謝謝我自己，人生在世總會碰到許多痛苦難捱的時刻，謝謝自己撐過一切，沒有給深愛自己的家人朋友帶來難過的回憶。未來也期許自己能夠維持快樂富足的心靈，並且能夠發揮所長，讓自己有餘力幫助更多人度過生命的困難時刻。



摘要

《莊子》為中國道家思想巨擘莊周的著作，其內容多為闡述莊周本身思想，並善用譬喻及寓言呈現其內容。又與《老子》並稱「老莊」，其影響力之深，於日本中世文學中亦可見一斑。日本中世文學一大特色的「說話文學」裡也多可見到引自《莊子》的典故、寓言。因此，本論文以「日本中世說話集中的《莊子》」作為著眼點，透過文本分析及比對，探討日本中世說話集《宇治拾遺物語》及《十訓抄》兩部作品中所收錄的《莊子》相關內容之受容及變容情形。

本論文共三個章節。第一章探討《宇治拾遺物語》中的《莊子》，針對《宇治拾遺物語》中收錄的三則《莊子》說話——第九〇話、第一九六話、第一九七話進行文本考察，並與原典文本進行比對分析。第二章則探討《十訓抄》中的《莊子》，針對《十訓抄》中收錄的兩則《莊子》說話以及四則《莊子》詩文——〈二之一〉、〈三之十二〉、〈六之一〉、〈六之三十一〉、〈十之五十四〉、〈十之六十七〉等，進行文本考察，以及與原典文本進行比對分析。第三章則列舉其他說話集中所收，與上述說話為同話或類話者，針對文本內容，互相進行比對分析。

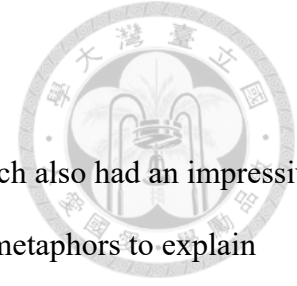
本論文研究結論如下：（一）於《宇治拾遺物語》蒐錄的《莊子》說話多有內容上的改編，且改編方向主要為使整體說話內容更為簡潔流暢、以及使主旨聚焦在說話中主要的論述部分。而改編程度較為顯著的第九〇話和第一九七話，則可視為《宇治拾遺物語》中《莊子》說話發生變容的部分。（二）《十訓抄》引用的《莊子》相關內容，多具有以《十訓抄》原有教訓內容為主，《莊子》相關內容為輔之傾向。且《十訓抄》中所引用之《莊子》相關內容，多為透過其他典籍引用，與原典《莊子》並無直接相關，因此所引的內容也較為片段、簡略。但經過文本的考察及分析，仍可判斷出《十訓抄》掌握了《莊子》原典中的精神，並受到其影響。（三）比較分析《宇治拾遺物語》和《十訓抄》中所收錄之《莊子》說話後可推知，兩書所收錄之《莊子》說話不同，主要肇因於兩書的編纂意識並不相同。《宇治拾遺物語》之編纂者秉持以讀者本位的方針進行說話的收錄、改編和編纂作業；而《十訓抄》之編纂者則以十項教訓條目為主軸，再行收錄符合條目主旨的說話故事，並進行改編和

編纂，因而造成了兩書於說話選擇上的差異。（四）從《宇治拾遺物語》和《十訓抄》中所收錄之《莊子》說話可看出，其出處多為《莊子》外篇或雜篇之內容，由此或可一觀日本中世文學中《莊子》流傳之情形。



關鍵字：莊子、說話集、日本中世文學、莊子寓言、受容、變容、中世說話集

Abstract



Zhuangzi is a masterpiece of Chinese philosopher Zhuangzhou, which also had an impressive influence on Medieval Japanese literature. *Zhuangzi* uses many tales and metaphors to explain Zhuangzhou's philosophy, and some of those were being used in the representative medieval Japanese literature genre, setsuwa collections. Therefore, this study focuses on the contents of *Zhuangzi* which were being used in the two setsuwa collections *Uji shui monogatari* and *Jikken sho*. The aim of this study is to observe how *Zhuangzi* contents were mentioned in those setsuwa collections, and to discuss transformation of the related contents of *Zhuangzi* quoted in *Uji shui monogatari* and *Jikken sho*.

The procedures of this study can be divided into three steps. Firstly, chapter one focuses on the *Zhuangzi* tales which were contained in *Uji shui monogatari*. By comparing the texts in *Uji shui monogatari* and *Zhuangzi*, chapter one considers the difference between the two setsuwa collections, and also analyzes the reason for this. Secondly, chapter two focuses on the *Zhuangzi* contents which were contained in *Jikken sho* with the same method adopted in chapter one. Thirdly, chapter three compares the similar *Zhuangzi* tales among *Uji shui monogatari* and other setsuwa collections. Similar *Zhuangzi* tales among *Jikken sho* and other setsuwa collections are also compared in chapter three.

The results of the analysis above can be summarized into four points. Firstly, in *Uji shui monogatari*, the *Zhuangzi* contents have been revised for the purpose of making the tales more succinct and to the point. Secondly, in *Jikken sho*, the *Zhuangzi* contents were added to supplement the original stories of *Jikken sho*, where the main moralization was retained. Thirdly, by analyzing the *Zhuangzi* contents in *Uji shui monogatari* and *Jikken sho*, we can infer that the difference is due to different compiling purposes. Finally, by analyzing the *Zhuangzi* contents in *Uji shui monogatari* and *Jikken sho* that are almost taken from *Zhuangzi*'s outer chapters and miscellaneous chapters, we can understand how *Zhuangzi* was known and spread in the medieval Japan literature.



Keywords: *Zhuangzi*, Setsuwa collection, Medieval Japanese literature, *Zhuangzi's Tales*,
Acceptance, Transformation



要旨

『莊子』は中国思想家である莊周の著作であり、古くから日本に招来し、上代から日本の様々な文献に『莊子』関連の記述が残されている。『莊子』の中に主張された思想は道家思想と見なされ、『老子』と共に「老莊思想」とも呼ばれ、日本中世の文人が多く引き寄せられると指摘された。本論では説話集『宇治拾遺物語』と『十訓抄』における『莊子』の関連説話に注目し、原拠『莊子』の内容と対照・比較をすることによって、日本中世説話集における『莊子』受容の一側面を明らかにしたい。

本論では三章から構成されている。まず研究対象『宇治拾遺物語』と『十訓抄』それぞれの編纂目的・説話の採録意識を考察し、説話集編者の考え方を把握した上でテキストの考察に臨む。次に説話集における『莊子』関連内容を取り上げ、原拠『莊子』の内容と対照・比較をする。次に『宇治拾遺物語』と『十訓抄』それぞれの『莊子』関連説話を取り上げ、他の説話集における共通説話と比較・分析をする。更に取り上げられた『莊子』関連説話が、それぞれの説話集に受容されたか、変容されたのかを考える。

本論の研究成果は四点にまとめられる。(一)『宇治拾遺物語』における第九〇話、第一九六話、第一九七話に行われた改変は、全体の説話内容をより簡潔かつ流暢的に見せ、またそれぞれの説話における主な論述部分に焦点を当てるなどの役割を果たすという、説話を読みやすいように改変したと考えられる。(二)『十訓抄』における<二ノ二>・<三ノ十二>・<六ノ一>・<六ノ三十一>・<十ノ五十四>・<十ノ六十七>などに見られる『莊子』の受容は、『十訓抄』本来の教訓(条目)を主体とし、『莊子』関連内容をあくまで例証や名言として扱う傾向が見られる。また、他の典籍を介在して引用する場合が多いにもかかわらず、『十訓抄』は要約化された説話と名言を通して、原拠『莊子』の精神を変容して受け容れたと考える。(三)『宇治拾遺物語』と『十訓抄』における採録話に食い違いが見られるのは、主に説話集編者の説話に対する採録意識が相違するからだと考えられる。(四)『宇治拾遺物語』と『十訓抄』が収録した『莊子』関連内容は殆ど外・

雑篇に集中するところから、中世説話集に見られる『莊子』そのものへの関心のあり方を垣間見ることができるのではないかと思われる。



キーワード：莊子、説話集、日本中世文学、莊子説話、受容、変容、中世説話集

目次



誌謝	i
摘要	ii
Abstract	iv
要旨	vi
序論	1
第一節、研究動機と目的	1
第二節、研究対象	3
第三節、先行研究	4
一、『莊子』における「寓話」に関する論述	5
二、『宇治拾遺物語』『十訓抄』の関連研究	7
三、『今昔物語集』における『莊子』関連説話の研究	12
第四節、研究方法	15
第一章、『宇治拾遺物語』における『莊子』の受容と変容	19
はじめに	19
第一節、『宇治拾遺物語』の編纂意図について	20
第二節、『宇治拾遺物語』第九〇話	25
第三節、『宇治拾遺物語』第一九六話	34
第四節、『宇治拾遺物語』第一九七話	38
まとめ	51
第二章、『十訓抄』における『莊子』の受容と変容	53
はじめに	53
第一節、『十訓抄』の編纂意図について	55
第二節、『十訓抄』〈二ノ二〉	59
第三節、『十訓抄』〈六ノ一〉	70
第四節、『十訓抄』における『莊子』関連内容の考察	78
まとめ	88



第三章、『宇治拾遺物語集』『十訓抄』における『莊子』関連説話の同話・類話	90
はじめに	90
第一節、『宇治拾遺物語』における『莊子』関連説話の同話・類話	91
第二節、『十訓抄』における『莊子』関連説話の同話・類話	104
まとめ	112
結論	115
参考文献	123

序論



第一節、研究動機と目的

『莊子』は中国思想家である莊周の著作であり、古くから日本に招来し、上代から日本の様々な文献に『莊子』関連の記述が残されている。周知の通り、聖徳太子が作した十七条憲法には『莊子』の文句が使われることもあった¹。また藤原佐世『日本国見在書目録』に道家部門の書物が全四五八巻と記され²、その中でも約三百巻は老莊関連のものである³。文献上の記録だけではなく、様々な古典名著の中で『莊子』の文句を使用した痕跡が見られる。『源氏物語』第二十四帖「胡蝶」に「恋の山には孔子の仆れまねびつべき気色にうれへたるも」⁴という文で、『莊子』「盗跖」篇から出典した諺「孔子の仆れ」を引用し⁵、また『徒然草』七段の「夏の蟬の春秋を知らぬ」⁶は『莊子』「逍遙遊」の文句「螻蛄は春秋を知らず」⁷に基づいたものであると見なされる。武内義雄氏は『枕草子』と『徒然草』を例とし、「平安の末期から鎌倉にかけて引きつづく世の動乱に人生をあじきなく思う人々の間には自ら老莊が嗜読されるように

¹ 「推古天皇の御代に聖徳太子の御製作遊ばされ三経義疏の中に明らかに老子が徴引せられ、また十七条憲法の中に莊子の文句が使われている」武内義雄(1978)「日本における老莊学」『武内義雄全集第六巻諸子篇一』、角川書店、p. 228

² 小長谷恵吉(1956)『日本国見在書目録解説稿』、小宮山出版、p. 29

³ 王迪(2001)「『日本国見在書目録』の老莊関係書物」『日本における老莊思想の受容』、国書刊行会、p. 102

⁴ 阿部秋生、秋山 虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳(1998)「胡蝶」『新編日本古典文学全集[25] 源氏物語 3』、小学館、p. 177

⁵ 市川安司、遠藤哲夫校注・訳(1967)「盗跖第二十九」『新釈漢文大系第 8 巻 莊子下』、明治書院、pp. 738-750

⁶ 永積安明校注・訳(1995)「徒然草」『新編日本古典文学全集[44] 方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』、小学館、p. 86

⁷ 阿部吉雄、市川安司、山本敏夫、遠藤哲夫校注・訳(1966)「逍遙遊第一」『新釈漢文大系第 7 巻 老子莊子上』、明治書院、p. 139

なったことも止むを得ないことであろう」⁸と、日本中世の文人が老荘の世界に引き寄せられた原因を指摘した。

『莊子』という書物は三十三篇からなり、一般的に内篇、外篇と雑篇に分かれたが、外篇と雑篇は主に内篇で述べられたことを更に強調し、または寓話に思想を託すことが多いと言われる⁹。その特徴を踏まえ、説話集の黄金時代とも言われる日本の中世に¹⁰、『莊子』関連説話を収録した説話集を通して、『莊子』の思想がより伝播されやすいことが想像できよう。

説話集の頂点とも言える『今昔物語集』での『莊子』関連説話が約六話あり、そして既に一定な研究成果を達したと見られる¹¹。しかし『今昔物語集』以外の説話集に収録された『莊子』関連説話が、管見の限りまだそれほど検討されていなかったと見られる。果たして日本中世という時代に、様々な説話集に記録され、または語り継がれてきた『莊子』関連説話がどのように読まれたのであろうか。各々の説話集の編者によって、いかなる改変が施されたのか、更に改変を行う際に説話集は原拠『莊子』の精神を受け容れたのかなど、数々の疑問点に興味深く感じる。本論では、説話集における『莊子』の関連説話及び内容の考察と分析を中心にし、原拠『莊子』における内容と対照・比較をする。一連の考察結果を通して、日本中世説話集における『莊子』受容の一側面を明らかにしたい。

⁸ 前掲注 1、pp. 230-231

⁹ 福永光司(1966)「解説」『莊子 内篇』、朝日新聞社、p. 5

¹⁰ 池上洵一(1993)「中世の説話と説話集」『説話の講座第五巻 説話集の世界 II—中世—』、勉誠社、p. 9

¹¹ 後述に「『今昔物語集』における『莊子』関連説話の研究」という項目に参照。

第二節、研究対象

先述した通り、『今昔物語集』における『莊子』関連説話が六話もあり、早いうちから学者先達に注目され、既に一定な研究成果が出されたと見られるが、管見の限り『今昔物語集』以外の説話集における『莊子』関連説話がまだ深く検討されていない。本論では、『莊子』思想が広く流布されたと思われる日本中世に注目し、また宗教に拘らず幅広い伝承から説話を取り入れた世俗説話集『宇治拾遺物語』『十訓抄』を研究対象とする。

(1) 『宇治拾遺物語』

『宇治拾遺物語』は197話の説話を有し、源隆国編著の『宇治大納言物語』を後継した作品として見なされる。『今昔物語集』と同じく三大説話集に属し、「より多くの説話を容する『今昔物語集』『古今著聞集』などに比べて、網羅性においてはそれらに及ばないが、古今東西各階層の雅俗両面にわたる話が自在に選ばれており、変化の妙が、読み進める者を飽きさせない」¹²と言われ、個性的な説話集として認められる。

所収する『莊子』関連説話はわずか3話のみだが、説話ごとの収録のため、全体の内容を『莊子』と対比して考察する余地があると考えられる。

(2) 『十訓抄』

『十訓抄』は十箇条の教訓に基づいて、「何らかの啓蒙教化を目的とし、「日常での生き方を平易に説く実用的教養的性格を濃厚にもつ、典型的な中世の教訓説話集である」¹³と評される教訓性の強い説話集である。所収している内容は和漢説話を含めおよそ294話以上、また各段の教訓に合わせて先頭に小

¹² 三木紀人(1984)「宇治拾遺物語」『研究資料日本古典文学③説話文学』、明治書院、p. 159

¹³ 小峯和明(1984)「十訓抄」『研究資料日本古典文学③説話文学』、明治書院、p. 219

序が置かれ、連想や読み替えなどの方法で複数の説話を繋げて語るという書き方が特徴的だと言われる¹⁴。三大説話集である『古今著聞集』と成立期が近く¹⁵、また『古今著聞集』に書承された説話が多く見られる。



所収する『莊子』関連説話は2話のみだが、他に『莊子』関連する詩文は4例あり、考察に値すると考える。

『宇治拾遺物語』と『十訓抄』それぞれ収録した『莊子』関連内容は、全く重複しないものである。『宇治拾遺物語』は鎌倉前期に成立した説話集で、一方『十訓抄』は鎌倉中期に成立したと見做され、両説話集が異なった説話を採録するところから、両作品の考察を通して、鎌倉期における『莊子』関連説話の受容状況やあり方の変化なども考えてみたい。

第三節、先行研究

本論では『宇治拾遺物語』と『十訓抄』の両作品を主な研究対象とするが、また『莊子』関連内容を六話も収録し、既に豊かな研究成果を持つ『今昔物語集』の関連研究をも、研究方法の参考対象として先行研究をまとめてみる。

本節ではまず、

- 一、『莊子』における「寓話」に関する論述（本論のテーマと関連するもの）
- 二、『宇治拾遺物語』『十訓抄』の関連研究（本論のテーマと関連するもの）
- 三、『今昔物語集』における『莊子』関連説話の研究

などの三方面から、先行研究をまとめる。

¹⁴ 本論の先行研究で紹介した竹村信治氏の論文に参照する。

¹⁵ 本論が用いるテキストにおける解説によると、『十訓抄』は建長四年(1252)成立で、『古今著聞集』が建長六年(1254)に成立した。

一、『莊子』における「寓話」に関する論述

本論のテーマとした説話集における『莊子』関連説話は、本来ならば『莊子』で「寓話」として呼ばれるものだと見做される。『日本国語大辞典』によると、「寓話」は「教訓的な内容を、他の事物、主として動物にかこつけて表わした、たとえ話。寓言。」¹⁶と言われ、一方「説話」は「口をきくこと。話すこと。ものがたること。また、その話。物語。」とあり、「現代では「今昔物語集」などの説話集の類を構成する一話一話を指してもいうようになる」¹⁷という広い意味を指す用語だと言われる。以下ではもとを辿って、『莊子』における「寓話」に関する論述を中心に考察したい。

『莊子』雑篇「天下」篇では、「以_レ天下_レ為_レ沈濁不_レ可_レ與莊語_レ、以_レ卮言_レ為_レ曼衍_レ、以_レ重言_レ為_レ真、以_レ寓言_レ為_レ廣」¹⁸とあるように、世の中では停滞して濁っていて、莊子の論述が言い広めない。そのため、卮言、いわゆる臨機応変の言葉¹⁹を用いて無窮なる世間に順応し、重言、つまり身分のある長者が言った言葉を真実として信じ、また寓言を用いて広めて語るべしだと言われる²⁰。同じ「卮言」「重言」「寓言」を並行して用いたのは『莊子』雑篇の「寓言」篇にあり、「寓言十九、重言十七、卮言日出、和以天倪」と述べられ、莊子自身の言葉の中に十のうち九が寓言であり、十のうち七が重言、日々語る

¹⁶ JapanKnowledge ジャパンナレッジ Lib、2022. 07. 14 閲覧

¹⁷ 前掲注 16

¹⁸ 市川安司、遠藤哲夫校注・訳(1967)「雑篇 天下第三十三」『新釈漢文大系第 8 巻 莊子下』、明治書院、p. 818

¹⁹ 「卮」：まるいさかずきで、入れる酒の量によって傾きが変わるようにその時の条件でどうにでもなる意。「卮言」：対象に応じて自由に化する表現。臨機応変の言。調子のよいことば、前掲注 16、2022. 06. 30 閲覧

²⁰ 「通釈」前掲注 16

涂光社(2003)「採用“寓言”的目的在于有利读者接受，如其所比方(略)所谓“重言”指德高望重的长者有权威的言论，其论断有分量，可以制止争论。」「心“论的范畴系列”『庄子范畴心解』、中国社会科学出版社、p. 314

のは卮言と言われる²¹。「天下」篇と「寓言」篇における以上の論述について、武内義雄博士は「莊周は真理を言語で説明し得ないものと考えて寓話によって出放題のごとくに説き、その中に聞く人をして自然に了悟せしめるようにしたものである」²²と言い、『莊子』における寓話の役割を強調した。

また、前野直彬氏は「道家の説く「大道」は、言語を媒介としては認識できない地点に存在するものであった」²³と述べ、『莊子』にとって寓話を用いるのは「当然の手段として、彼は対象の核心を直接に提示しようとはせず、そこに至る具体的な手続きを教えるのでもなく、核心の周囲に富む譬喩と絢爛たる寓話とによって、幾重にも包んで見せた」²⁴、「莊子にとっての譬喩・寓話は、彼の思想をパラフレイズするよりも、思想の核とほとんど癒着した形で、その周囲を包むものであった」²⁵と主張した。また前野氏は『莊子』で用いられた寓話の巧拙について、「莊子に限らず、道家の思想全体が意外性を基盤にしていると見ることもできよう。弱が強に勝つとか、寿夭はひとしいとか、死生は一つであるとかいうテーゼは、世間の常識を裏切って見せたところに、強烈な印象をあたえる迫力を持つ。それを敷衍する譬喩や寓話が、もしも意外性に乏しいものであれば、全体の論調は気がぬけたようになってしまうであろう。譬喩・寓話の技巧は、したがって、道家では思想そのものに関わるほどの重要性を持っていたのである」²⁶と指摘した。要するに、道家思想の特徴と譬喩・寓話の特性と相性が良いため、その思想がより伝播されやすいと思われる。

²¹ 「通釈」前掲注 16、p. 704

²² 前掲注 1、p. 102

²³ 前野直彬(1967)「道家思想と文学」『講座東洋思想 第3巻 中国思想 II』、東京大学出版会、p. 189

²⁴ 前掲注 23、p. 191

²⁵ 前掲注 23、p. 194

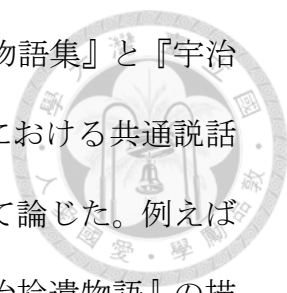
²⁶ 前掲注 23、p. 192

二、『宇治拾遺物語』『十訓抄』の関連研究

(一)『宇治拾遺物語』に関する研究

鶴見充展氏は『宇治拾遺物語』における『莊子』関連説話に注目し、他の説話集との共通説話、また説話の原拠である『莊子』に載せられた内容を対照して比較した。鶴見氏はまず九〇話「帽子叟与孔子問答事」と一九七話「盜跖与孔子問答事」を取り上げ、『今昔物語集』における共通説話とともに『莊子』の内容と照り合わせて検討した。説話の内容をいくつかの場面に分け、説話集の両書と『莊子』の異同について論じた。そこで『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』の表現の違いも見られるが、基本的に「孔子の儒家の長たる地位を認めたと上で、その地位から孔子を引きずり降ろすという方法をとる。この方法からは、孔子批判と共にそこから生ずる笑いが存在する」といい、一方、『莊子』では「孔子批判は単に批判にとどまらず、孔子——儒家——否定という立場をとる」²⁷という目的に基づいて論じたと見られる。そこから説話集の『宇治拾遺物語』・『今昔物語集』と『莊子』が持つ目的と方法の違いが伺えると鶴見氏が主張する。また鶴見氏は『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』における孔子関連説話を考察し、孔子に対して『宇治拾遺物語』はより批判的な態度が強く見られると指摘した。しかしながら、『宇治拾遺物語』の孔子批判の態度は、果たして『莊子』の影響を受けてのことかどうかについて、鶴見氏は明言しなかった。ただし説話集における『莊子』関連説話の分析手法の視点から見ると、鶴見氏の論文が本論に多大な啓発を与えた。

²⁷ 鶴見充展(1981)「宇治拾遺物語における漢籍について—莊子関連説話を中心に—」『中世近世文学研究』14、中世近世文学研究会、p. 28



小峯和明氏は著作『宇治拾遺物語の表現時空』で、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』、また『古事談』『十訓抄』と『宇治拾遺物語』における共通説話を軸にして、『宇治拾遺物語』における説話の表現性について論じた。例えば固有名詞について、登場人物を紹介する文言などでは、『宇治拾遺物語』の描写が『今昔物語集』より簡略だと見られる。一方『今昔物語集』では「実にきめ細かく紹介し、不明の場合は空格にしてまで固有名詞の記載にこだわっている」²⁸と述べた。このような固有名詞が剥落している原因として、「伝承の契機をえやすいように構想や形象がたくみにしくまれ、必然的に出来事の展開に力点がおかれる結果」²⁹だと言い、つまり説話の面白さや全体の趣旨を収束するため、必要でない情報が編者の判断により削減されたと見られる。他には口語りの影響により語彙や語句の転倒関係が違いを生じさせたなどの点が指摘された。また、小峯氏が『古事談』と『十訓抄』を取り上げ、『宇治拾遺物語』との共通説話を比較した。『古事談』はよく『宇治拾遺物語』の一つの典拠として見られるが、小峯氏が両者の類話である「道命阿闍梨於和泉式部之許読経五条道祖神聴聞事」(一)³⁰や「賀茂祭帰サ武正・兼行御覧事」(一八八)などの説話を取り上げ、説話集の表現面から論じた。その結果、細部の描写における違いだけではなく、説話全体の指向を左右する冒頭話から既に異なっていることが判明した。「同類話とか共通話とか類似の説話をたばねてとらえるのが説話研究では一般的だが、同じ話として十把一からげにするのではなく、細かい違いにこだわり続け、語りのありようを読み比べるのもまた、重要かつ興

²⁸ 小峯和明(1999)「今昔物語集—共通話をめぐって—」『宇治拾遺物語の表現時空』、若草書房、p. 146

²⁹ 前掲注 28

³⁰ 説話のタイトルは本論が用いるテキストによる、『宇治拾遺物語』の説話について言及する場合タイトルの後ろに丸括弧で話数を示す。

味深い方法であろう」³¹と小峯氏が述べた。そして同じく院政期の伝承圏に属された『十訓抄』との共通話である「土佐判官代通清、人違^{シテ}関白殿^ニ奉合事」(一九〇)を取り上げて比較すると、たとえ同源の説話であるにもかかわらず、『宇治拾遺物語』と『十訓抄』が切り取った段落が異なる事実が分かった。「連続する話の一方だけ取り出す例はほかに第九五、一四六、一五一などにかがえる(逆に別途の話を一話につなげる例もあるが)」³²と小峯氏が判明した。他には表現面や語りの違いが列挙され、「『十訓抄』はほとんど口語りの面は消えて、書くことに収束する文字テキストとなっている。簡潔に表現されるのも、筆による傾きが強いはずである。中世の説話テキストが次第に語りから書くことへ収束していき、それに応じて表現力を弱めていく」³³という結論に辿り着いた。異なる説話集における共通説話をを用いた研究方法として、本論にもぜひ参考にしたい。

廣田収氏は、『宇治拾遺物語』の冒頭話と末尾の孔子説話「盗跖与孔子問答事」(一九七)について検討し、『宇治拾遺物語』の思想を論じた。同論文では九〇話「帽子叟与孔子問答事」をも取り上げて考察し、「『宇治拾遺物語』の編者が、盗跖や老翁などの言動によって、儒教思想を否定したところに、『宇治拾遺物語』の編纂を通して、鎌倉期という新しい時代に即した行動、判断、あるいは美的価値などの規範的な基準を模索している」³⁴と述べ、更に「栄達よりも蟄居することを望んだと伝えられる編者像にふさわしい思想」³⁵に繋が

³¹ 前掲注 28、「古事談と十訓抄—院政期以後」、p. 166

³² 前掲注 28

³³ 前掲注 28、p. 203

³⁴ 廣田収(2000)「『宇治拾遺物語』の思想：末尾話と冒頭話をめぐって」『同志社国文学』53、同志社大学国文学会、p. 6

³⁵ 前掲注 34、p. 11

篇について深く言及していなかったが、『宇治拾遺物語』における『莊子』関連説話の配列意識に関する一見解を示した。



(二) 『十訓抄』に関する研究

『十訓抄』全体の表現について、竹村信治氏は「連想と展開—十訓抄の表現(1) —」「連想と読み替え—十訓抄の表現(2) —」という二篇の論文を用いて論じた。「連想と展開」で竹村氏は「十訓抄の叙述は、大略、主題文・引証・関連話題・関連説明の各要素によって構成されている」³⁶と定義し、『十訓抄』の編者がどのような手法でこれらの要素を繋げたのかを追究した。竹村氏はく六ノ二十四>とその前後の内容を含めて検討し、「関連話題」という要素がただ「引証」から「主題文」に繋げる役割を果たすだけでなく、他にも「引証」の読み替えを促し、「主題文」の説明叙述を展開させ、また当章段全体の主題展開を導く契機にもなったなど多様な機能を見出した。この一連のプロセスの背後には「連想」という機能が働き、「連想と読み替え—十訓抄の表現(2) —」でそれについて説明した。「連想は、それを導く対象の主題、叙述展開、作品に設定された主題、あるいは主体を支配する思考の枠組みなどに規制されながらも、時に解放され、叙述を領導し、主題を展開させ、編述主体に働き掛けつつ、作品の形成に参与」し、「説話相互の連なり方に認められるズレは、編述主体の対象話題を読む営み(説話行為)と深くかかわり、その読む営みの自在さに起因する。読みの自在さが自在な読み替えを生み、自在な読み替えが話題相互間の「自在な連想」関係をもたらすのである」³⁷と竹村氏が述べた。結論の一部として、竹村氏は『十訓抄』のような、ある特定の目的に基づいて編纂

³⁶ 竹村信治(1986)「連想と展開—十訓抄の表現(1) —」『説話・物語論集』14、金沢大学古典文学研究会、pp. 21-31

³⁷ 竹村信治(1987)「連想と読み替え—十訓抄の表現(2) —」『金沢美術工芸大学学報』31、金沢美術工芸大学、pp. 1-2

された説話集であるからこそ、説話の配列で様々な工夫を施さなければならぬと解説した。上記の竹村氏の論文は、『十訓抄』の各章段を読み解くに多大な示唆を与えた。

『十訓抄』と他の説話集との共通説話を比較する研究について、野本氏は『十訓抄』と『五常内義抄』における共通説話<十ノ七十七>を取り上げ、『十訓抄』の叙述方法を中心に論じた。『十訓抄』は一章段の説話の中で、関連性が薄い逸話を挿入し、教訓内容を脱線させる傾向が見られるのに対して、『五常内義抄』の教訓内容がより明確と見られるにもかかわらず、一般的には『十訓抄』の内容全体が教訓的だと認められる。それを問題点とし、野本氏が『十訓抄』各巻に散見された序や小序に着目し、共通の説話素材を使用した『寢覚記』

『源氏物語』『狭衣物語』『宇治拾遺物語』などの作品と比較対照した。その結果、『十訓抄』編者による序文の大半が後ろに展開する説話の内容とのズレが見られると判明したが、「複数の説話素材をまとまりとして捉え、説話素材を重ねて共通点を照合することによって、同一の切り口で把握する思考、さらには同一の切り口を特定の意味づけと結び付ける思考を指す」という類比の手法で、「小序の内容を微妙にずらしていくことによって中心的なものの広がりを得ている（中略）小序に示された教訓は必ずしも統括的なものとは言えず、中心的主題となるわけではないものの、教訓的な意味づけのために回帰する拠り所として機能し、類比を実現する起点として存在する」³⁸と述べた。最終的に、「語り手の伝えたい教訓が常に明示的にあるわけではない以上、教訓的言

³⁸ 野本東生(2013)「十訓抄における叙述方法：類比的装い」『国語と国文学』90(4)、東京大学国語国文学会、p. 46

辞の明確化は読み手を巻き込んでいく中に初めて達成される」³⁹と、『十訓抄』の内容全体が読者に教訓的に見せる手法を明らかにした。



三、『今昔物語集』における『莊子』関連説話の研究

先述したとおり、『今昔物語集』での『莊子』関連説話が六話もあり、それを中心にした研究も相当あると見られる。以下ではそれについてかなり深く論じたいいくつかの研究を取り上げてまとめる。

宮田尚氏は『今昔物語集』巻第十の「臣下孔子、道行、値童子問申語第九」、
「孔子逍遙値榮啓期聞語第十」と「孔子、為教盜跖行其家怖返語第十五」の三話を「『莊子』系の孔子譚」と定義付けて取り上げ、『今昔物語集』の編者がこれらの説話に対する意識に注目した。その中で孔子のみに対して敬語の多用、また第九に付け加えた和製孔子譚から見ると、『今昔物語集』の編者は基本的に孔子が代表した儒家的な価値観を認める一方、あえて「孔子倒れ」意識を持つ『莊子』系の孔子譚を用いたことが矛盾であると指摘した。宮田氏がこのような現象について、『今昔説話集』における資料収集の規模がそれほど大きくなかったため、限られた資料を用いた結果とされた。また、宮田氏は『宇治拾遺物語』の共通説話を取り上げ、第一九七の「盗跖与孔子問答事」と『今昔説話集』の第十五における敬語の使用状況を比較した。そして「『宇治拾遺物語』が敬語を用いていない箇所には『今昔物語集』が用いている例はほかにもあるが、逆のばあいは一例もない」⁴⁰と判明した。

池上洵一氏が巻第十「莊子行人家主殺雁備肴語第十二」の内容には原拠に対する誤解があると主張し、そこから『今昔物語集』における『莊子』関連説話

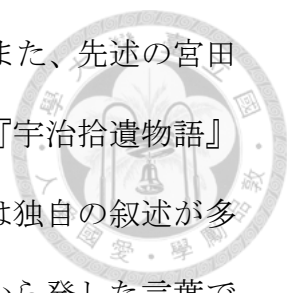
³⁹ 前掲注 38、p. 54

⁴⁰ 宮田尚(1982)「『莊子』系孔子譚の選択—『今昔物語集』巻十への臆説—」『日本文学研究』18、梅光女学院大学日本文学会、p. 80

をまとめて検討した。まず巻第十二の誤読について、池上氏は『明文抄』などの名句名文集が漢籍から抄出した際、説話の内容を切り取ってしまう傾向があると指摘し、一部だけ抄出してしまった結果、『莊子』の思想を語る部分である後半が省かれ、前半の説話部分のみが語り継がれようになった。そのせいで、説話に内包した真意が誤って読まれ続けられたと言われる。同じような誤読が『十訓抄』にも見られ、「この話は『十訓抄』はもちろん『今昔』よりもなお以前から、日本式理解によって再生された、いわば日本に帰化した莊子説話として、原拠の『莊子』からは完全に離脱したかたちで浮遊していたのであろう」、また「この話を通して運命の不条理さを説く『今昔』と、両端を廃したおとなしい中道の生き方を説く『十訓抄』と、両者の思想には相当の違いがあるけれども、この説話にとっては、それはむしろ二次的に生じた変化であったように思えるのである」⁴¹と述べた。『今昔物語集』などの説話集が受容されたのは、既に原拠である『莊子』と違って、日本化した『莊子』関連説話であり、その上各々の説話集編者が異なる読み方をして、解釈を加えたと見られる。『十訓抄』と共通しているこの説話以外に、池上氏は『方丈記』との共通説話である「莊子見畜類所行走逃語第十三」と、『宇治拾遺物語』との共通説話である「莊子請[□]栗語第十一」などの例を援引して論拠を固めた。その中にとりわけ『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』の共通説話が三話まで共通し、「両者の背後に共同母体的な資料の存在を予想すべき」⁴²と主張した。更に視点を『今昔物語集』に収録された『莊子』関連説話が呈した特徴に移すと、共通説話数の多い『宇治拾遺物語』との比較を通し、莊子の品格を讃えるような文句が見

⁴¹ 池上洵一(1983)「震旦説話の変容—説話の莊子—」『新版 今昔物語の世界—中世のあけぼの—』、以文社、pp. 188-189

⁴² 前掲注 41、p. 193



られるのは『今昔物語集』だけであることがはっきりした。また、先述の宮田氏の論文でも触れた「孔子、為教盜跖行其家怖返語第十五」と『宇治拾遺物語』第一九七の共通説話について、明らかに『今昔物語集』編者は独自の叙述が多く付け加えられ、それが『今昔物語集』編者による莊子理解から発した言葉であり、想像力の産物とも言えると述べた⁴³。先述した宮田氏の論説によると、『今昔物語集』の編者は基本的に儒家思想を尊重していると思われるが、池上氏の論説によれば、莊子の品格を讃える文句がある故、莊子の思想をある程度理解しているはずである。このような現象が後世から見るとパラドックスのような構図であったが、恐らく『今昔物語集』の成立時代では孔子も莊子も賢者として、ただ敬うべき存在であったと考えられる。

中川徳之助氏は『今昔物語集』巻五「国王為盜人被盜夜光玉語第三」の説話が、諺「塞翁が馬」の思想と類似し、またそれは兼好法師が『徒然草』第三十八段に『莊子』「齊物論」篇の論理に対して寄せた関心と似通っているところもあると指摘した。次に中川氏も先述の池上氏が取り上げた「莊子請栗語第十一」「莊子行人家主殺雁備肴語第十二」「莊子見畜類所行走逃語第十三」を用い、この三話を見る限りでは『今昔物語集』の「作者が莊子の比喻による論理に強く興味を寄せていることはいかがえるが、莊子の思想にどの程度の理解を有したかという点では疑問が残る（中略）これらの話の作者も自分自身は莊子の思想を理解した上で、説話として大勢の享受者に提供するにあたってその理解度を配慮してわかりやすい比喻の論理のおもしろさに筆をとどめた」と言い、このような配慮を施すのは「当時の日本人の莊子に対する一般的

⁴³ 前掲注 41、pp. 195-208

な理解度がこの程度であった」⁴⁴と述べた。他に中世の禅僧中岩円月と虎関師錬の作品と経歴を挙げて、『今昔物語集』における荘子受容の面と異なっていることを中川氏が指摘した。



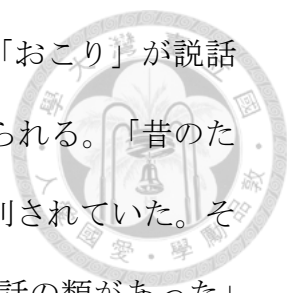
以上は管見の限り、『莊子』における「寓話」に関する論述、及び説話集における『莊子』関連説話に関する先行研究である。説話集における『莊子』関連説話を中心にした研究が少ないため、本論では『莊子』関連説話を「孔子譚」として扱われるものや、儒教思想の対照として『莊子』関連説話を扱うものも含めて参考として取り上げた。一方、説話集における『莊子』関連説話を中心にした研究が少ないという点があったからこそ、本論の研究を通してその一側面を明らかにしたい。

第四節、研究方法

小峯氏は論文「説話と物語文学はどう違うのか」で藤井貞和氏の「フルコト」論⁴⁵を援引し、「(説話は) 貴族社会に脈々と受けつがれてきた故事伝承は、その社会を維持し存続させるのにかかせない、典籍にも匹敵する固有の財産であった。言談の世界にはそういう重みがある。だから社会が変質すれば、その伝承もまた変貌を余儀なくされるのは必然であり、院政期にその兆候が現れるのは実にみやすい構図だろう。口伝と記録のあわい、葛藤や相剋に説話が沸騰

⁴⁴ 中川徳之助(1985)「日本人の“荘子”受容」に関する覚え書『日本研究』1、日本研究研究会、p. 18

⁴⁵ 藤井貞和氏(1987)が『物語文学成立史—フルコト・カタリ・モノガタリ』(東京大学出版会)に「フルコト」論を提出し、「コトという語は伝承の意味を固有にさしたわけではなく、広く言語活動や事柄をさした。その一環として説話をそのように称した、ということにほかならない。伝承のなかから、固有に古伝承を意味する言葉としてはフルコトという語が生じてくる。つまり古伝承を古伝承として、フル(古)コトであるとの認識が進めば、固有のそれをさす語が成立してこないわけにゆかない」と述べた。p. 54

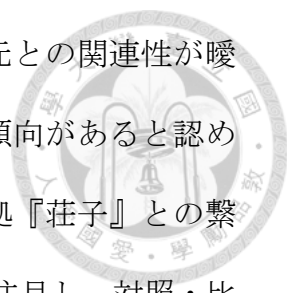


する時代だ。故事のごとき「こと」（「事」）や「ためし」「おこり」が説話であることは、たとえば『とはずがたり』などでもたしかめられる。「昔のためし」が『源氏物語』などの「昔物語」の引用とはっきり区別されていた。そういう正当な故事に対して、街談行説・道聴塗説といわれる噂話の類があった⁴⁶と述べた。物語と違って、説話は歴史の移りにつられ、社会が変質するとともに変貌する一方、「伝承」の役割も果たしたと説かれた。一方、志村氏は著書で「（説話は）「伝承・伝播」の特性を有するものの、結局伝承ルートを明確に断定することはできなかったことが多い⁴⁷と、説話の間での伝承関係を確認するには困難だと述べた。また今成氏は「一つの説話が、いくつかの説話集や物語の類に散見するという例を見るのは、口承・書承の別を問わず説話が伝承された証拠であるとされる。説話の伝承者は、（中略）享受した説話を素材として、新たな自分なりの説話に構築しなおし、それによって主体的な説示を行おうとしているのである。たとえ説話の全貌が形態的にはほとんどそのまま伝えられているという、いわゆる同文的同話にあっても伝承者は、享受した説話の総体を、自分の中に芽生えた説示意識を表出するに適した素材としてそっくり選びとり、それをもって新たな説示を行なっているのである⁴⁸と述べ、伝承者である説話集の編纂者や作者の重要性を指摘した。要するに、説話を研究対象として見なす場合、説話の内容自体を重視するのみではなく、当説話が置かれた説話集にも意識しながら考察する必要があると思われる。故に本論第一章と第二章では、まず説話集の作者や編纂意図などを考察し、説話採録の背景などを把握したい。

⁴⁶ 小峯和明(1997)「説話と物語文学はどう違うのか」『國文学』42(2)、學燈社、p. 23

⁴⁷ 志村有弘(1974)「中世説話文学の諸問題」『中世説話文学研究序説』桜楓社、p. 11

⁴⁸ 前掲注 13、p. 5



また、志村氏が指摘したように、個々の説話は原拠や引用元との関連性が曖昧であると見られ、説話が伝承されればされるほど変貌する傾向があると認められる⁴⁹。本論では、説話集における『莊子』関連説話と原拠『莊子』との繋がりより、作品内容における相違する箇所、つまり改変点に注目し、対照・比較する方法を通して考察したい。また、本論では『莊子』関連説話の受容のあり方を、「受容」か「変容」として検討してみたい。以下、辞書を参照に、「受容」と「変容」の意味を確認し、定義づけたい。『日本国語大辞典』によれば、「受容」とは二つの意味合いが含まれ、それぞれ「（１）受け入れること。取り入れること」、「（２）鑑賞の基礎をなす作用で、芸術作品などを感性に受け入れ、味わい楽しむこと」⁵⁰とあるように、二つの意味合いが含まれている。本論で言う「受容」は、（１）の「受け入れること。取り入れること」として定義づけたい。一方、「変容」の場合は「姿や形、また、状態や内容などが変わること、または変えること」⁵¹と記載されているが、本論では、説話集が『莊子』関連説話に施す文面上の改変より、読み方や解釈を改変したことこそ「変容」だと見做したい。なお、本論では「変容」は「受容」の一環として見ており、「変容」が発生する場合は即ち「受容」も見られることであると考えている。

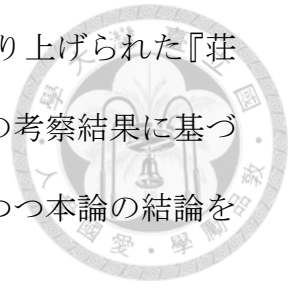
以上で述べたもののまとめにかえて、本論の研究手順を簡単に述べると、まず研究対象『宇治拾遺物語』と『十訓抄』それぞれの編纂目的・説話の採録意識を考察し、説話集編者の考え方を把握した上でテキストの考察に臨む。次に説話集における『莊子』関連内容を取り上げ、原拠『莊子』の内容とを対照・比較をする。次に『宇治拾遺物語』と『十訓抄』に見られる『莊子』関連説話

⁴⁹ 前掲注 47

⁵⁰ 『日本国語大辞典』、小学館、JapanKnowledge ジャパンナレッジ Lib、2022. 08. 31 閲覧

⁵¹ 前掲注 50

と、他の説話集における共通説話と比較・分析をする。更に取り上げられた『莊子』関連説話が変容されたのかを考えてみる。最後に、以上の考察結果に基づいて、『宇治拾遺物語』と『十訓抄』との成立時期を意識しつつ本論の結論をまとめる。



第一章、『宇治拾遺物語』における『莊子』の受容と変容



はじめに

『宇治拾遺物語』は従来、源隆国編著の『宇治大納言物語』を後継した作品として見なされ、伝承と固有の説話を含めて全部で197話を所収している説話集である。所収話を概観すると、「全体として、量的には仏教説話に属するものが多く、靈驗譚や僧侶・遁世者の逸話などが目立つが、啓蒙性・教訓性は希薄で、話の面白さ・珍しさ・主人公の魅力などが印象に残る」¹と評されるが『莊子』関連説話をもいくつか収録している。それらの『莊子』関連説話は本来、莊子思想を釈明するために語られたものであるが、『宇治拾遺物語』ではいかなる目的で『莊子』関連説話を記したのであろうか。

『宇治拾遺物語』における『莊子』関連説話は以下の3話が見られる。

通し番号	篇名	原拠『莊子』
卷第六 八 九〇	帽子の叟、孔子と問答の事	雑篇・漁父第三十一
卷第十五 十一 一九六	後の千金の事	雑篇・外物第二十六
卷第十五 十二 一九七	盗跖と孔子と問答の事	雑篇・盗跖第二十九

表1 『宇治拾遺物語』における『莊子』関連説話

本章では以下の視点を以て問題提起とし、考察を進めていく。

1. なぜ「仏教説話」が多く、また「話の面白さ・珍しさ」を重視する

『宇治拾遺物語』は、これらの『莊子』関連説話を取り入れるのか。

¹ 三木紀人(1984)「宇治拾遺物語」『研究資料日本古典文学③説話文学』、明治書院、p. 159

2. これらの説話を収録した際に、説話集の内容や趣旨に合わせるため、何か工夫や改変を施したか。

3. 『宇治拾遺物語』における『莊子』の受容、もしくは変容のあり方を考える。

既に序章で先行研究を紹介したため、本章では『宇治拾遺物語』の編纂意図に改めて着目し、それを踏まえて同書所収の『莊子』関連説話計三話の一つずつ考察する。考察方法としては、『宇治拾遺物語』の説話と、原拠と見なされる『莊子』の内容とを取り上げて比較し、とりわけ『宇治拾遺物語』にみられる『莊子』関連説話内容の改変及びその改変の意義を究明したい。最後に、この三話において、果たして『宇治拾遺物語』では『莊子』関連説話を受け容れたのか、もしくは変容させたのかという問題について考える。

第一節、『宇治拾遺物語』の編纂意図について

『莊子』関連説話の採録意識について追究する前に、まず『宇治拾遺物語』の編纂意図・編者の目的を考える必要があると思われる。しかし『宇治拾遺物語』の編者については今日になっても未詳であるのが周知の事実である。また、通常編纂目的などを伝える序文が書物の冒頭に置かれるが、『宇治拾遺物語』の場合は、同書の序文は編者ではない人物の手によって編纂する可能性があると言われ、未だに真偽は定かではない²。それでも尚、『宇治

² 「序文が編者自身によるものではないとみる主張の代表的な論説は、吉田幸一「『宇治拾遺物語』序文偽撰考」（『宇治大納言物語』伊達本、古典文庫 昭和六十年）で、そこでは後人の手になったとしか考えようのない杜撰さが、完膚なきまでに追及されている。一方、序文自撰説の代表的な論説は、島津忠夫「宇治拾遺物語の序文（中世文学 28号 昭和五十八年）で、いかにも後人の手になったとしか読めないような説明こそは実作者の偽作めかした手法と見るべきではないかという、うがった見方を提示している。私は従来偽撰説の側に加担してきたのであるが、このたびの注釈作業に従ってみて、物事を生真面目にではなく、対象に距離をお

拾遺物語』の序文についての論説が多く、序文を通して、ある程度本書の編纂目的・編者の採録意図が伺えると考えられる。『宇治拾遺物語』の序文を以下にあげる。



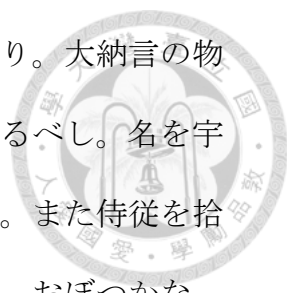
世に宇治大納言物語といふ物あり。この大納言は隆国といふ人なり。西宮殿の孫、俊賢大納言の第二の男なり。年たかうなりては、暑さをわびて暇を申して、五月より八月までは平等院一切経蔵の南の山ぎはに、南泉房といふ所に籠りゐられけり。さて、宇治大納言とは聞こえけり。

髻を結びわけて、をかしげなる姿にて、筵を板に敷きてすずみ居侍りて、大きな打輪をもてあふがせなどして、往来の者、上下をいはず呼び集め、昔物語をせさせて、我は内にそひ臥して、語るにしたがひて大きな双紙に書かれけり。

天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり。それがうちに貴き事もあり、をかしき事もあり、恐ろしき事もあり、哀れなる事もあり、きたなき事もあり、少々は空物語もあり、利口なる事もあり、様々やうやなり。

世の人これを興じ見る。十四帖なり。その正本は伝りて、侍従俊貞といひし人のもとにぞありける。いかになりにけるにか。後にさかしき人々書き入れたるあひだ、物語多くなれり。大納言より後の事書き入れたる本もあるにこそ。

いていささか諧謔的な語り方をしている数多くの事例に接した実感から、後人の作を装った自撰説も捨てがたい」小林保治・増古和子校注・訳(1996)『新編 日本古典文学全集[50]宇治拾遺物語』、小学館、p. 499



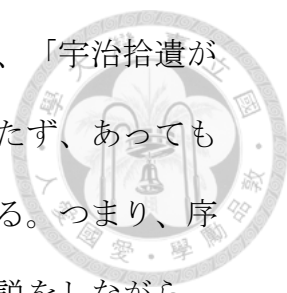
さるほどに、今の世にまた物語書き入れたる出で来たれり。大納言の物語にもれたるを拾ひ集め、またその後の事など書き集めたるべし。名を宇治拾遺物語といふ。宇治にのこれるを拾ふとつけたるにや。また侍従を拾遺といへば、宇治拾遺物語といへるにや。差別しりがたし。おぼつかなし。

(『新編 日本古典文学全集[50]宇治拾遺物語』 pp. 23-24)

上記の序文を読んでまず違和感を感じたのは、果たしてこれは『宇治拾遺物語』の序文か、それとも『宇治大納言物語』の序文なのかということである。なぜなら内容の半分以上は『宇治大納言物語』の成立について語っており、『宇治拾遺物語』を言及するところはほんの最後の一段落のみと見られるからである。この点について先学たちは様々な角度から論じ、興味深い論説を提出したが、本論の趣旨との関連性が薄いため割愛させていただく。ただ一つ言及しておきたいのは、序文で記された『宇治大納言物語』は未だに散佚のままだが、『宇治拾遺物語』は「『宇治大納言物語』の方針を踏襲しながら、そこには収録されていなかった諸話を蒐集し、隆国没後の出来事も公然とかき集めてある」³とのことである。つまり序文の内容は『宇治大納言物語』だけでなく、『宇治拾遺物語』にも通用すると見做して良いと考える。

佐藤晃氏は、「序文が第三者的な物言いをするのは、この語りの場に迎え入れられた読者に、「この作品の主題はこうである」といったような一義的なく意味>を示すのではなく、場の設定だけをして、あとは読者の自由な解

³ 前掲注 2、p. 498



釈によって作品が享受されることを促しているわけであり、「宇治拾遺が各話において、その話の〈意味〉を説示する評語をあまり持たず、あっても感想的なものにとどまる場合が多いのはこれとかかわっている。つまり、序文は世の言い伝えによって宇治拾遺についての第三者的な解説をしながら、実はこの作品の読みを示唆しているのである」⁴と述べる。すなわち、『宇治拾遺物語』の編者は敢えて自身の存在を抹消し、読者本位の立場から書物を吟味することを薦めていると理解してよい。また、三木紀人氏は、同書所収話の内容から編者像を考える時、「歌壇への志向や抒情的気質があまりなかったものと思われ」、笑い話や猥雑な話が多く見られるが、「作者の品性を疑わせるほどのいかがわしさは感じさせない」とし、「作者みずからの正体をうかがわせる文章は、同書の中にまったくと言ってよいほど見られないのであり、『宇治拾遺物語』の編者は「自己表出については消極的ないし禁欲的な方である」⁵と論じる。これら先行研究の指摘のように、『宇治拾遺物語』は、編者自身の意志による影響を最小限にし、読者が各々の説話を自由に読み解いてもらおうという読者本位の方針のもとで編纂されたものであると考えられる。

一方、小峯和明氏は同書「序文にこそ「巡物語」の場が宣言されていることを重視すべきであろう。（中略）自在な談話の場を象徴する」⁶と述べる。

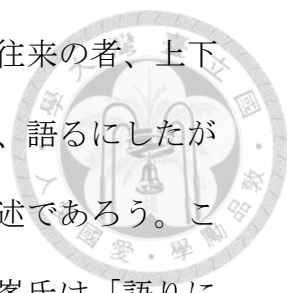
『日本国語大辞典』によると、「巡物語」とは「夜、数人の人が集まって、特定の貴人の前で順番に物語を語りついでいくこと」⁷とのことである。小峯

⁴ 佐藤晃(1993)「宇治拾遺物語—表現の変動期、変動期の表現—」『説話集の世界 II—中世—』、勉誠社、p. 351

⁵ 前掲注1、p. 160

⁶ 小峯和明(1999)「序文を読みなおす」『宇治拾遺物語の表現時空』、若草書房、p. 17

⁷ 『日本国語大辞典』、小学館、JapanKnowledge ジャパンナレッジ Lib、2022. 06. 07 閲覧



氏がいう「巡物語」とは、恐らく『宇治拾遺物語』序文の「往来の者、上下をいはず呼び集め、昔物語をせさせて、我は内にそひ臥して、語るにしたがひて大きな双紙に書かれけり」という文言に基づいての論述であろう。このような「「巡物語」の場」において著された作品には、小峯氏は「語りに対して聞くだけでなく、書くという主体的な行為が介在していることが注意される。（中略）語り手がいかように語ろうとも、すべては書き手の裁量にゆだねられる」という特徴があり、そしてこのような「語りと筆記の拮抗」は当然後継の『宇治拾遺物語』にも作用していると述べる⁸。要するに、『宇治拾遺物語』序文によれば、同書の編纂意図や编者自身の意思が全く見られず、全て読者の読書行為に委ねようとするのが编者の本望だと思われるが、文字化する際に、書き手の裁量やそれによる影響力も無視できないと考えられるのである。

総じて言うと、『宇治拾遺物語』は、编者の希望により説話集全体の思想を汲み取り、それをまとめるのが難しいかもしれないが、個々の説話を読み解く過程の中で、改変の意図と伝承による受容や変容のあり方を考察することが可能だと伺える。本章の視点から言うと、『莊子』関連説話を所収する『宇治拾遺物語』编者の採録意識について、説話集全体の思想に拘らず、個々の収録話の内容に専念して読み解けば、説話自体の受容や変容のあり方を見出せると考える。

⁸ 前掲注 6、pp. 17-18

第二節、『宇治拾遺物語』第九〇話

本章第二・三・四節では、本章の表1に載せられた『宇治拾遺物語』における『莊子』関連説話を順次取り上げて、原拠とみられる『莊子』の内容とを比較して考察を行う。本節では『宇治拾遺物語』第九〇話をあげることにする。まず、当該説話を以下に載せる。

(A) 今は昔、唐に孔子、林の中の岡だちたるやうなる所にて逍遙し給ふ。我は琴を弾き、弟子どもは書を読む。ここに、舟に乗りたる叟の帽子したるが、舟を葦につなぎて陸にのぼり、杖をつきて、琴の調べの終るを聞く。人々あやしき者かなと思へり。この翁、孔子の弟子どもを招くに、一人の弟子招かれて寄りぬ。翁曰く、「この琴弾き給ふは誰ぞ。もし国の王か」、「それにもあらず」。「さは何ぞ」と問ふに、「ただ国の賢き人として政をし、悪しき事を直し給ふ賢人なり」と答ふ。翁あざ笑ひて、「いみじき痴者かな」といひて去りぬ。

御弟子不思議に思ひて、聞きしままに語る。孔子聞きて、「賢き人にこそあなれ。とく呼び奉れ」。御弟子走りて、今舟漕ぎ出づるを呼び返す。呼ばれて出で来たり。孔子のたまはく、「何わざし給ふ人ぞ」。翁の曰く、「させる者にも侍らず。ただ舟に乗りて、心をゆかさんがために、まかり歩くなり。君はまた何人ぞ」。「世の政を直さんために、まかり歩く人なり」。(B) 翁の曰く、「きはまりではかなき人にこそ。世に影を厭ふ者あり。晴に出でて離れんと走る時、影離るる事なし。陰にみて心のどかに居らば、影離れぬべきに、さはせずして、晴に出でて離れんとする時には、力こそ尽くれ、影離るる事なし。また犬の屍の水に流れて下る。こ

れを取らんと走る者は、水に溺れて死ぬ。かくのごとくの無益の事をせらるるなり。ただ然るべき居所占めて一生を送られん、これ今生の望みなり。この事をせずして、心を世に染めて騒がるる事は、きはめてはかなき事なり」といひて、(C) 返答も聞かで帰り行く。舟に乗りて漕ぎ出でぬ。孔子その後ろを見て、二度拝みて、棹の音せぬまで拝み入りてゐ給へり。音せずなりてなん車に乗りて帰り給ひにける由、人の語りしなり。⁹

(『新編 日本古典文学全集[50]宇治拾遺物語』 pp. 214-216)

以下ではまず第九〇話を分析し、次に説話の原拠『莊子』雑篇「漁父第三十一」（以下、「漁父」篇と記す）の内容を考察し、両者の相違などを比較して論じる。

(一) 第九〇話の内容について

第九〇話の概略をまとめると、およそ (A) (B) (C) の三部分からなる。

(A) 孔子と弟子たちと林で琴を弾いたり、読書したりする光景が、ある舟に乗っている翁に見かけられた。翁がそこにいた弟子を捕まえ、琴を弾いているものは何者かと尋ねた。そして一人の弟子が、孔子は何の官職もつかず、ただの勸善懲悪の賢人であると教えた。翁はそれを嘲笑い去った。弟子がこのことをすぐに孔子に知らせ、孔子は急いで翁を呼び止め、話を伺った。

(B) 翁は、徒に影から逃れようとする人と、水にあった犬の屍を拾おうが結局溺れて死んだ人の譬喩を用い、孔子の行いがいかに徒労に見えたかを述べた。さらに、「然るべき居所占めて一生を送られん、これ今生の望みなり」

⁹ 引用文中の (A) (B) (C) などの記号、太字は、筆者によるものである。以下同様

とあるように、人間は自然の状態に従うべきだと主張する。(C) 話が終わって翁が舟に乗って去り、最後に孔子はその後ろ影に何度も礼をした。

(B) の部分では、二つの比喩が用いられた。一つは影から離れようとする人間の話で、これは『莊子』雑篇「漁父」篇に見られるものである。一方、もう一つの犬の屍の話(太字の部分)は出典未詳である¹⁰。

第九〇話は、本章第四節で取り上げる第一九七話とともに、「孔子倒れ」という諺と関わるものとして見なされるものである¹¹。本来儒家の代表として尊ばれるはずの孔子は、第九〇話では漁父である老人に叩かれ、また一九七話では盗賊の首領に論破されることになり、いずれも物語の最後で孔子の威信が失墜するよう見られ、これは『宇治拾遺物語』の編者の儒家思想に対する反発だと思われる¹²。

(二) 原拠『莊子』「漁父」篇の内容について

『莊子』雑篇「漁父」篇は一つの説話によって構成されており、紙幅が頗る長い。全篇を以下に載せて『宇治拾遺物語』第九〇話と対照・比較したい。

¹⁰ 「『莊子』雑篇「漁父」には、この犬の屍の例は見えない」三木紀人・浅見和彦校注(1990)『新 日本古典文学大系[42]宇治拾遺物語 古本説話集』、岩波書店、p. 216

¹¹ 池上洵一(1983)「震旦説話の変容—説話の莊子—」『新版 今昔物語の世界—中世のあけぼの—』、以文社、p. 193

国東文麿(1985)『今昔物語集作者考』、武蔵野書院、p. 189 などの論がある。

¹² 「儒教思想は、奈良期から平安期において日本の律令を支える思想的支柱出会った。『宇治拾遺物語』の編者が、盗跖や老翁などの言動によって、儒教思想を否定したところに、『宇治拾遺物語』の編纂を通して、鎌倉期という新しい時代に即した行動、判断、あるいは美的価値などの規範的な基準を模索している、と考えることができるのではないだろうか。」廣田收(2000)「『宇治拾遺物語』の思想：末尾話と冒頭話をめぐって」『同志社国文学』53、同志社大学国文学会、p. 6

(A') 孔子游_レ乎緇帷之林、休_レ坐乎杏壇之上。弟子讀_レ書、孔子絃歌鼓_レ琴。奏_レ曲未_レ半、有_レ漁父者、下_レ船而來。須眉交白、被_レ髮揄_レ袂、行_レ原以上、距_レ陸而止。左手據_レ膝、右手持_レ頤、以聽。曲終而招_レ子貢、子路二人_レ俱對。客指_レ孔子_レ曰、彼何為者也。子路對曰、魯之君子也。客問_レ其族。子路對曰、族孔氏。客曰、孔氏者何治也。子路未_レ應。子貢對曰、孔氏者、性服_レ忠信、身行_レ仁義、飾_レ禮樂、選_レ人倫、上以忠_レ於世主、下以化_レ於齊民、將_レ以利_レ天下。此孔氏之所_レ治也。又問曰、有土之君與。子貢曰、非也。侯王之佐與。子貢曰、非也。客乃笑而還。行言曰、仁則仁矣。恐不_レ免_レ其身。苦_レ心勞_レ形、以危_レ其真。嗚乎遠哉、其分_レ於道也。

子貢還報_レ孔子。孔子推_レ琴而起曰、其聖人與。乃下求_レ之、至_レ於澤畔。方將_レ杖_レ擊而引_レ其船。顧見_レ孔子、還鄉而立。孔子反走、再拜而進。客曰、子將_レ何求。孔子曰、曩者先生有_レ緒言而去。丘不肖、未_レ知_レ所謂。竊待_レ於下風、幸聞_レ咳唾之音。以卒相_レ丘也。客曰、嘻甚矣、子之好_レ學也。孔子再拜而起曰、丘少而修_レ學、以至_レ于今六十九歲矣。無_レ所得_レ聞_レ至教。敢不_レ虛_レ心。

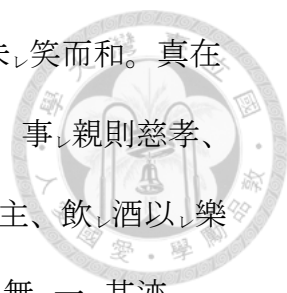
(B' 1) 客曰、同類相從、同聲相應、固天之理也。吾請、釋_レ吾之所_レ有、而經_レ子之所_レ以。子之所_レ以者人事也。天子·諸侯·大夫·庶人、此四者自正、治之美也。四者離_レ位、而亂莫_レ大_レ焉。官治_レ其職、人憂_レ其事、乃無_レ所_レ陵。故田荒室露、衣食不_レ足、徵賦不_レ屬、妻妾不_レ和、長少無_レ序、庶人之憂也。能不_レ勝_レ任、官事不_レ治、行不_レ清白、羣下荒怠、功美不_レ有、爵祿不_レ持、大夫之憂也。廷無_レ忠臣、國家昏亂、工技不_レ巧、貢職不_レ美、春秋後_レ倫、不_レ順_レ天子、諸侯之憂也。陰陽不_レ和、寒

暑不_レ時、以傷_二庶物_一、諸侯暴亂、擅相攘伐、以殘_二民人_一、禮樂不_レ節、財用窮匱、人倫不_レ飭、百姓淫亂、天子有司之憂也。

今子既上無_二君侯有司之勢_一、而下無_二大臣職事之官_一。而擅飾_二禮樂_一、選_二人倫_一、以化_二齊民_一、不_二泰多事_一乎。且人有_二八疵_一、事有_二四患_一、不_レ可_レ不_レ察也。非_二其事_一而事_レ之、謂_二之摠_一、莫_二之顧_一而進_レ之、謂_二之佞_一、希_レ意道_レ言、謂_二之諂_一、不_レ擇_二是非_一而言、謂_二之諛_一、好言_二人之惡_一、謂_二之讒_一、析_レ交離_レ親、謂_二之賊_一、稱譽詐偽以敗_二惡人_一、謂_二之慝_一、不_レ擇_二善否_一兩容、頰適偷_二拔其所_一欲、謂_二之險_一。此八疵者、外以亂_レ人、內以傷_レ身。君子不_レ友、明君不_レ臣。所謂四患者、好經_二大事_一、變更易_レ常、以挂_二功名_一、謂_二之叨_一、專_レ知擅事、侵_レ人自用、謂_二之貪_一、見_レ過不_レ更、聞_レ諫愈甚、謂_二之很_一、人同_二於己_一則可、不_レ同_二於己_一、雖_レ善不_レ善、謂_二之矜_一。此四患也。能去_二八疵_一、無_レ行_二四患_一、而始可_レ教已。

(B' 2) 孔子愀然而歎、再拜而起曰、丘再逐_二於魯_一、削_二跡於衛_一、伐_二樹於宋_一、圍_二於陳·蔡_一。丘不_レ知_レ所_レ失、而離_二此四謗_一者何也。客悽然變_レ容曰、甚矣、子之難_レ悟也。人有_二畏_レ影惡_レ跡、而去_レ之走者_一。舉_レ足愈數、而跡愈多、走愈疾、而影不_レ離_レ身。自以為尚遲。疾走不_レ休、絕_レ力而死。不_レ知_二處陰以休_レ影、處_レ靜以息_レ跡。愚亦甚矣。子審_二仁義之間_一、察_二同異之際_一、觀_二動靜之變_一、適_二受與之度_一、理_二好惡之情_一、和_二喜怒之節_一、而幾_二於不_レ免矣。謹脩_二而身_一、慎守_二其真_一、還以_レ物與_レ人、則無_レ所_レ累矣。今不_レ脩_二之身_一而求_二之人_一、不_二亦外_一乎。

(B' 3) 孔子愀然曰、請問、何謂真。客曰、真者、精誠之至也。不_レ精不_レ誠、不_レ能_レ動_レ人。故強哭者、雖_レ悲不_レ哀。強怒者、雖_レ嚴不_レ威。強親



者、雖_レ笑不_レ和。真悲無_レ聲而哀、真怒未_レ發而威、真親未_レ笑而和。真在_レ內者、神動_二於外_一。是所_二以貴_レ真也。其用_二於人理_一也、事_レ親則慈孝、事_レ君則忠貞、飲_レ酒則歡樂、處_レ喪則悲哀。忠貞以_レ功為_レ主、飲_レ酒以_レ樂為_レ主、處_レ喪以_レ哀為_レ主、事_レ親以_レ適為_レ主。功成之美、無_レ一_二其迹_一矣。事_レ親以_レ適、不_レ論_二所以_一矣。飲_レ酒以_レ樂、不_レ選_二其具_一矣。處_レ喪以_レ哀、無_レ問_二其禮_一矣。禮者、世俗之所_レ為也。真者、所_二以受_二於天_一也。自然不_レ可_レ易也。故聖人法_レ天貴_レ真、不_レ拘_二於俗_一。愚者反_レ此。不_レ能_レ法_レ天而恤_二於人_一、不_レ知_レ貴_レ真、祿祿而受_二變於俗_一、故不_レ足。惜哉、子之蚤湛_二於偽_一、而晚聞_二大道_一也。

(C ‘) 孔子又再拜而起曰、今者丘得_レ遇也、若_二天幸_一然。先生不_レ羞、而比_二之服役_一而身教_レ之。敢問_二舍所_レ在、請、因受_レ業而卒學_二大道_一。客曰、吾聞_レ之、可_二與往_一者、與_レ之至_二於妙道_一、不_レ可_二與往_一者、不_レ知_二其道_一。慎勿_レ與_レ之、身乃無_レ咎。子勉_レ之。吾去_レ子矣、吾去_レ子矣。乃刺_レ船而去、延_二緣葦間_一。顏淵還_レ車、子路授_レ綏、孔子不_レ顧、待_二水波定、不_レ聞_二擊音_一而後、敢乘。

(D) 子路旁_レ車而問曰、由得_レ為_レ役久矣。未嘗見_二夫子遇_レ人如_レ此其威_一也。萬乘之主、千乘之君、見_二夫子_一、未嘗不_二分_レ庭伉禮_一。夫子猶有_二倨敖之容_一。今漁父杖_レ擊逆立、而夫子曲要磬折、再拜而應。得_レ無_二太甚_一乎。門人皆怪_二夫子_一矣。漁人何以得_レ此乎。孔子伏_レ軾而歎曰、甚矣、由之難_レ化也。湛_二於禮義_一有_レ聞矣、而樸鄙之心至_レ今未_レ去。進、吾語_レ汝。夫遇_レ長不_レ敬、失_レ禮也。見_レ賢不_レ尊、不_レ仁也。彼非_二至仁_一、不_レ能_レ下_レ人、下_レ人不_レ精、不_レ得_二其真_一、故長傷_レ身。惜哉、不仁之於_レ人也、禍莫_レ大_レ焉。而由獨擅_レ之。且道者、萬物之所_レ由也。庶物失_レ之者死、得_レ之

者生。為_レ事逆_レ之則敗、順_レ之則成。故道之所_レ在、聖人尊_レ之。今漁父之於_レ道、可_レ謂_レ有矣。吾敢不_レ敬乎。¹³

(『新釈漢文大系第8巻 莊子下』 「漁父第三十一」、pp. 771-783)



『莊子』 「漁父」 篇の内容概要はおおむね『宇治拾遺物語』 第九〇話と一致するが、漁父と孔子の問答部分 (B' 1、B' 2、B' 3) において大幅な相違が見受けられる。ここではまず、相違の著しい (B') の部分を取り上げ、『莊子』 「漁父」 篇の内容を確認する。

(B' 1) では、漁父は「その位にあらざれば、その政を謀らず」という道理を孔子に説き、また人には八つの欠点 (八疵) があり、事には四つの患い (四患) があるので、常に戒めなければならないと述べた。そして (B' 2) では、孔子の問いかけに対して、漁父は「影から離れようとする人間」の比喻を用いつつ、「謹脩_二而身_一、慎守_二其真_一」を解決策として孔子に告げた。

(B' 3) では、孔子が「真」について漁父に聞いたところ、漁父は、「真」とは「精誠之至」であり、人事や礼法などで縛れるものではないと述べ、孔子が「蚤湛_二於偽_一、而晚聞_二大道_一也」、早いうちに虚礼などを知り尽くしたが、逆にそれに拘束され、晩年になってはじめて大道を聞くということが実に残念だったと言った。

最後に、「漁父」 篇の (D) では、子路は孔子に、何故ただの漁人の翁に尊敬した態度を取るかを聞いた。編者は孔子と子路の口を借りて、孔子が漁父を尊敬する理由、及び漁父の語る道理に従う原因などを述べつつ、漁父の

¹³ 下線部は『宇治拾遺物語』 第九〇話にも用いられた「漁父」 篇の論説部分を指し、筆者によるものである。

説いた言葉に焦点を当てた。なお、(D)の部分は、『宇治拾遺物語』第九〇話にはみられない。



(三) 第九〇話における改変について

先述したように、『莊子』「漁父」篇と『宇治拾遺物語』第九〇話との最大の相違は主に漁父と孔子の問答部分、すなわち(B)と(B')にある。それ以外の内容は概ね一致すると言える。しかし、一致したのはあらすじのみであって、細部の描写と表現にはやはり食い違いが見受けられる。以下は両者の相違するところを羅列して検討したい。

1. 孔子が漁父に取る態度について、「漁父」篇では終始尊敬しているに対し、第九〇話では前後不一致な態度を取ることが見受けられた。
2. 「漁父」篇にあった子路と孔子の問答部分(D)が第九〇話では見られない。
3. 第九〇話で孔子の弟子の名を明記していないが、「漁父」篇では子貢と子路の名前を掲げた。

まず、漁父への態度について、「漁父」篇においては、孔子は子貢の報告を受けてすぐに、「推_レ琴而起曰、其聖人與。乃下求_レ之、至_二於澤畔_一」と動き出し、去ろうとする漁父に「再拜而進」という丁寧な態度を以て接した。一方、第九〇話では、孔子は「何わざわざ給ふ人ぞ」という不遜な態度で漁父に問いかけ、漁父に反問される時も自分が「世の政を直さんために、まかり歩く人なり」とあるように、優越感をあらわにして答えた。それに比べて、

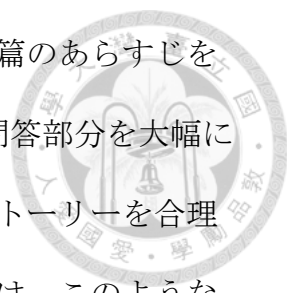
「漁父」篇では、「曩者先生有_二緒言_一而去。丘不肖、未_レ知_レ所_レ謂。竊待_二於

下風一、幸聞_レ咳唾之音_一。以卒相_レ丘也」と述べる孔子が、いかに自分を卑下するような態度を取ったかが明らかである。

「漁父」篇で終始尊重する態度で接する孔子は、なぜ第九〇話において、初対面の漁父に不遜な態度を取りながら、漁父のことばを最後まで聞いてから、漁父に「その後ろを見て、二度拝みて、棹の音せぬまで拝み入りてみ給へり。音せずなりてなん車に乗りて帰り給ひにける」とあるように、ガラッと態度を一変させたのであろうか。

それは恐らく、『宇治拾遺物語』の編者は、孔子が漁父の話聞いた前後の態度にギャップを持たせることによって、漁父の言葉が孔子を納得させたということを強調するための作為だと考える。第九〇話の主幹は漁父の論述であるため、その論述の信憑性及び漁父という人物の重要性を高めるには、最初に不遜な態度で振る舞った孔子まで尊敬する態度で漁父を拝むようになるという改変が必要となり、読者にも印象的であろう。

次は、二点目の相違について、実は一点目のことにも関連性があると考えられる。前述したように、「漁父」篇の(D)は漁父のことばの重要性を高める役割がある。それに対して、第九〇話では既に、「孔子の不遜な態度が矯正される場面」を通して、「漁父のことばの重要性を高める」という目的が達成されたので、「漁父」篇の(D)はそれほど必要な段落とされない。また、子路と孔子の間答部分(D)を欠落させることで、ストーリーの焦点を漁父と孔子に集中する効果もあると考える。三点目の、第九〇話では弟子たちの名前を伏せたという改変もまさにそのような原因があり、登場人物を減らすことで、漁父と孔子のやりとりにより焦点が絞られると思う。

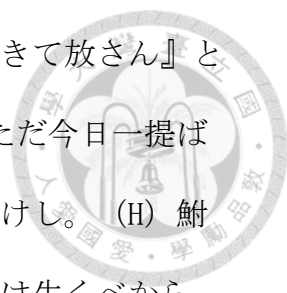


以上に考察したように、第九〇話では、『莊子』「漁父」篇のあらすじをおおむね保留したが、「漁父」篇の軸となる(B)の会話・問答部分を大幅に削減し、更に登場人物や文字表現にも改変を加えている。ストーリーを合理的に作り直したうえで、焦点を漁父の話に置かせた。本論では、このような『莊子』受容のあり方を一種の変容として見做したい。

第三節、『宇治拾遺物語』第一九六話

本節では、『宇治拾遺物語』第一九六話を取り上げ、説話の原拠『莊子』雑篇「外物第二十六」（以下、「外物」篇と記す）の記事内容との対照・比較を通して、両者の相違を考察する。『宇治拾遺物語』第一九六話は以下の通りである。

(E) 今は昔、唐に莊子といふ人ありけり。家いみじう貧しくて、今日の食物絶えぬ。隣に監河侯といふ人ありけり。それがもとへ今日食ふべき料の粟を乞ふ。河侯が曰く、「今五日ありておはせよ。千両の金を得んとす。それを奉らん。いかでかやんごとなき人に、今日参るばかりの粟をば奉らん。返す返すおのが恥なるべし」といへば、莊子の曰く、(F) 「昨日道をまかりしに、跡に呼ばふ声あり。顧みれば人なし。ただ車の輪跡のくぼみたる所にたまりたる少水に、鮒一つふためく。何ぞの鮒にかあらんと思ひて寄りて見れば、少しばかりの水にいみじう大きな鮒あり。『何ぞの鮒ぞ』と問へば、鮒の曰く、『我は河伯神の使に、江湖へ行くなり。それが飛びそこなひて、この溝に落ち入りたるなり。喉渴き死なんとす。我を助けよと思ひて呼びつるなり』といふ。答へて曰く、『吾今二三日あ



りて、江湖といふ所に遊びしに行かんとす。そこにもて行きて放さん』といふに、魚の曰く、(G) 『さらにそれまでえ待つまじ。ただ今日一提ばかりの水をもて喉をうるへよ』といひしかば、さてなん助けし。(H) 鮒のいひし事、我が身に知りぬ。さらに今日の命、物食はずは生くべからず。後の千の金さらに益なし」とぞいひける。それより、「後の千金」といふ事名誉せり。

(『新編 日本古典文学全集[50]宇治拾遺物語』 pp. 482-483)

(一) 第一九六話の内容について

第一九六話は頗る短いが、莊子の話の中に鮒の話が語られるという枠物語のような構造となっており、本論では、(E) (F) (G) (H) に分けて内容を分析する。まず、冒頭部 (E) では、莊子が近所の監河侯という人に食糧を借りに行って、今日だけの分を請うたというやりとりから始まった。監河侯は莊子に一日の食糧分だけを貸すなら申し訳ないので、あと五日待てれば、千両の金を莊子に差し上げると返答した。その返事から莊子に敬う意思が伺えるが、莊子にとって望ましくない回答のようだ。そして (F) では、莊子は鮒と出会った譬喩話を語り出した。あるわだちに干からびた鮒は、通りすがりの莊子呼び止めて、一提の水を乞うた。しかし莊子は先ほど監河侯が回答したように、あと二、三日待てば鮒に江湖の水を差し上げると言った。最後に、(G) では、鮒の口を借りて第一九六話の趣旨を示した。更に (H) では、この話は後に諺「後の千金」になって語り伝えられたと記す。

第一九六話では、莊子は自分のことを渴き鮒に、監河侯を自身に喩えて風刺をきかせた。先述のように、一話の趣旨は、「遠水は近火を救わず」とい

うことわざに合致しているが、たとえどのような恩恵を与えようが、タイミングが合わなければ役に立たないとも言え、物事には緩急があることをも論じている。



(二) 原拠『莊子』「外物」篇の内容について

第一九六話は『莊子』「外物」篇の一部から取り上げたものだと思われ、以下は、当該箇所を引用し、第一九六話との対照・比較を行う。

(E') 莊周家貧。故往貸粟於監河侯。監河侯曰、諾。我將得邑金。將貸子三百金、可乎。莊周忿然作色曰、(F') 周昨來、有中道而呼者。周顧視、車轍中有鮒魚焉。周問之曰、鮒魚來、子何為者邪。對曰、我東海之波臣也。君豈有斗升之水而活我哉。周曰、諾。我且南遊吳越之王。激西江之水而迎子、可乎。鮒魚忿然作色曰、(G') 吾失我常與、我無所處。吾得斗升之水、然活耳。君乃言此。曾不如早索我於枯魚之肆。

(『新釈漢文大系第8巻 莊子下』「外物第二十六」、p. 689)

『莊子』「外物」篇における本段の趣旨は、『宇治拾遺物語』第一九六話とほぼ一致しており、莊周が渴いた鮒の譬喩を使って、監河侯が目の前に餓死寸前の莊周を助けず、数日後に三百金を借りる約束したことを風刺した。鮒の譬喩では、僅かな水しか求めない轍の中の鮒に対して、莊周は後に江湖の水を与えると言い、鮒がそれを待っている頃に自分はもう干物になってしまおうと返し、物事には緩急があることを説いた。

(三) 第一九六話における改変について

第一九六話と「外物」篇とを比較すれば、内容はほぼ同じく、僅かな相違しか見られない。細かい相違も含めて以下にまとめてみた。

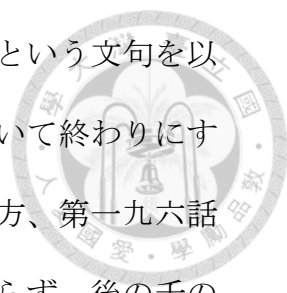


1. 監河侯の莊子への態度には相違が見られる。
2. 莊周と鮒の会話内容における固有名詞の相違が見られる。
3. 鮒の返事内容には相違が見られる。
4. 『莊子』「外物」篇には (H) の部分が見られない。

第一九六話では、監河侯は莊子に、「いかでかやんごとなき人に、今日参るばかりの粟をば奉らん。返す返すおのが恥なるべし」とあるように、莊子のようなご身分に粟を貸すなら、僅かな量だけ貸したら恥じるべきことであると述べた。一方、『莊子』「外物」篇では、監河侯は「諾。我將_レ得_二邑金_一。將_レ貸_二子三百金_一、可乎。」と述べ、少し尊大な態度で莊子を接している。この相違点から見ると、『宇治拾遺物語』の編者は恐らく、莊子を尊敬すべき人物と見ていたのではないかと思われる。

二点目の固有名詞の改変だが、第一九六話では、原拠にある唐の地名「呉越」を、一般名詞の「江湖」に変えた。

三点目の相違点は、「外物」篇で鮒の自称が「東海之波臣」だが、第一九六話では馴染みの「河伯神の使」に変えられ、二点目と同じく、読者への配慮、即ち読者が馴染みのある名詞で表現するように意識して改変を施したと考える。また、「外物」篇における鮒の、「君乃言_レ此。曾不_レ如_三早索_一我於枯魚之肆_一」という言葉も風刺性の強い一文であるが、第一九六話にはこれが見当たらず、代わりに (H) の「鮒のいひし事、我が身に知りぬ。さらに今日



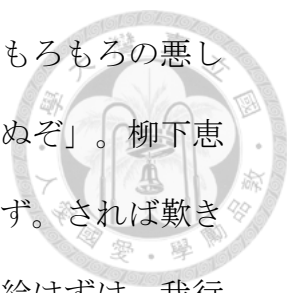
の命、物食はずは生くべからず。後の千の金さらに益なし」という文句を以て一文を締めくくられた。「外物」篇の説話は鮒の言葉を用いて終わりにするため、全体的に風刺を効かせるイメージが強いと思う。一方、第一九六話では、食糧を請う荘子の、「今日の命、物食はずは生くべからず。後の千の金さらに益なし」という言葉を以て同話の趣旨を掲げ、これによって第一九六話の教訓性も引き立てられたと思う。

総じて言うと、第一九六話では、原拠の『莊子』「外物」篇とは文字表現上の相違が認められるものの、特に大幅な改変と思想上の食い違いが見出されず、原拠に近い形で「外物」篇の内容を受容したと考える。

第四節、『宇治拾遺物語』第一九七話

本節では『宇治拾遺物語』第一九七話を取り上げて分析し、説話の原拠となる『莊子』雑篇「盜跖」篇（以下、「盜跖」篇と記す）の内容との比較を通して、両者の相違を考察する。『宇治拾遺物語』第一九七話の内容は以下の通りである。

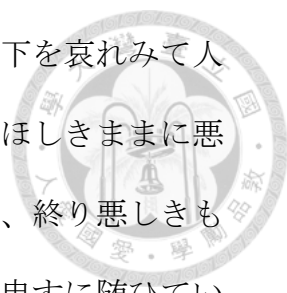
(I) これも今は昔、唐に柳下惠といふ人ありき。世のかしこき者にして、人に重くせらる。その弟に盜跖といふ者あり。一つの山の懷に住みて、もろもろの悪しき者を招き集めて、おのが伴侶として、人の物をば我が物とす。歩く時は、この悪しき者どもを具する事、二三千人なり。道にあふ人を滅し、恥を見せ、よからぬ事の限りを好みて過すに、柳下惠、道を行く時に孔子にあひぬ。「いづくへおはするぞ。みづから対面して聞えんと思ふ事のあるに、かしこくあひ給へり」といふ。柳下惠、「いかなる



事ぞ」と問ふ。「教訓し聞えんと思ふ事は、そこの舎弟、もろもろの悪しき事の限りを好みて、多くの人を歎かする、など制し給はぬぞ」。柳下恵答へて曰く、「おのれが申さん事を敢へて用ふべきにあらず。されば歎きながら年月を経るなり」といふ。孔子の曰く、「そこ教へ給はずは、我行きて教へん。いかがあるべき」。柳下恵曰く、「さらにおはすべからず。いみじき言葉を尽くして教へ給ふとも、なびくべき者にあらず。返って悪しき事出で来なん。あるべき事にあらず」。孔子曰く、「悪しけれど、人の身を得たる者は、おのづからよき事をいふにつく事もあるなり。それに、『悪しかりなん。よも聞かじ』といふ事は僻事なり。よし見給へ。教へて見せ申さん」と言葉を放ちて、盗跖がもとへおはしぬ。

(J) 馬よりおり、門に立ちて見れば、ありとあるもの、獣、鳥を殺し、もろもろの悪しき事を集へたり。人を招きて、「魯の孔子といふ者なん参りたる」と言ひ入るるに、即ち使帰りて曰く、「音に聞く人なり。何事によりて来たれるぞ。人を教ふる人と聞く。我を教へに来たれるか。我が心にかなはば用ひん。かなはずは肝膾に作らん」といふ。その時に孔子進み出でて、庭に立ちて、まづ盗跖を拝みて、上りて座に着く。盗跖を見れば、頭の髪は上さまにして、乱れたる事蓬のごとし。目大きにして見くればかす。鼻をふきいからかし、牙をかみ、鬚をそらしてゐたり。

盗跖が曰く、「汝来たれる故はいかにぞ。たしかに申せ」と、怒れる声の、高く恐ろしげなるをもていふ。孔子思ひ給ふ、かねて聞きし事なれど、かくばかり恐ろしき者とは思はざりき。かたち、有様、声まで人とは覚えぬ。肝心も砕けて震はるれど、思ひ念じて曰く (K1)、「人の世にある様は、道理をもて身の飾りとし、心の掟とするものなり。天をいただ




き、地を踏みて、四方を固めとし、おほやけを敬ひ奉る。下を哀れみて人に情をいたすを事とするものなり。しかるに承れば、心のほしきままに悪しき事をのみ事とするは、当時は心になふやうなれども、終り悪しきものなり。さればなほ人はよきに随ふをよしとす。しかれば申すに随ひていきますかるべきなり。その事申さんと思ひて参りつるなり」といふ時に、

(K2) 盗跖、雷のやうなる声をして笑ひて曰く、「汝がいふ事ども一つも当てらず。その故は、昔、堯、舜と申す二人の帝、世に貴まれ給ひき。しかれども、その子孫、世に針さすばかりの所を知らず。また世にかしこき人は伯夷、叔齊なり。首陽山に伏せり、飢ゑ死にき。またそこの弟子に顔回といふ者ありき。かしこく教へ給ひしかども、不幸にして命短し。また同じき弟子にて子路といふ者ありき。衛の門にして殺されき。しかあれば、かしこき輩は遂にかしこき事もなし。我また悪しき事を好めども、災身に來たらず。ほめらるるもの、四五日に過ぎず。そしらるるもの、また四五日に過ぎず。悪しき事もよき事も、長くほめられ、長くそしられず。しかれば我が好みに随ひ振舞ふべきなり。汝また木を折りて冠にし、皮をもちて衣とし、世を恐れ、おほやけにおち奉るも、二たび魯に移され、跡を衛に削らる。などかしこからぬ。汝がいふ所、まことに愚かなり。すみやかに走り帰りね。一つも用ゆべからず」といふ時に、(L) 孔子またいふべき事覚えずして、座を立ちて急ぎ出でて、馬に乗り給ふに、よく臆しけるにや、轡を二たび取りはづし、鐙をしきりに踏みはづす。これを世の人、「孔子倒れず」といふなり。

(『新編 日本古典文学全集[50]宇治拾遺物語』 pp. 483-487)

(一) 第一九七話の内容について



第一九七話は、前に検討した第九〇話・第一九六話より紙幅が長く、大まかに (I) (J) (K) (L) など四つの部分に分けて内容を考察する。まずは (I) 賢人として尊ばれる柳下恵という人物が、その弟・盗跖が極悪人であり、更に仲間を集めて様々な悪事を行った。孔子はそれを知り、柳下恵が兄として責任を持って盗跖を教訓すべきだと言った。柳下恵はそれが出来かねると答え、孔子は柳下恵の代わりに盗跖を戒めてやると告げた。いくら柳下恵が盗跖の頑なさを主張するにもかかわらず、孔子は満を持して盗跖の元へ向かった。(J) 盗跖の所に着いた孔子は、最初に見た武器と鳥獣の死体が散りばめられた光景によって、既に恐怖を感じてしまった。更に盗跖の容姿、及び「我が心になはば用ひん。かなはずは肝膾に作らん」という言葉に脅かされ、ようやく教訓の言葉を語り出そうとする時点で「肝心も砕けて震はる」ほど怯えてしまう。それでも恐怖心を堪えて、(K1) 盗跖に善事を行うように勧めた。しかしそれを聞いた盗跖はすぐに反論し、(K2) 儒家が尊ばないものとして自分の好きなままで動くべきだと言った。(L) 盗跖の言動に震撼された孔子は、更に痛いところを突かれて、反論もせずに、這う這うの体で帰った。

第一九七話は『宇治拾遺物語』の末尾に位置しており、説話集全編の思想に関わるものとして重要視されている¹⁴。また、前述した第九〇話や同書における他の孔子説話と共に、編者の孔子への態度が垣間見られる説話として注目されている。

(二) 原拠『莊子』「盗跖」篇の内容について

¹⁴ 前掲注 12

『莊子』雜篇「盜跖」篇には複数の説話が収録されているが、本論では第一九七話と関わりのある部分のみを取り上げて考察する。



(I') 孔子與_レ柳下季_一為_レ友。柳下季之弟、名曰_二盜跖_一。盜跖從卒九千人、橫行_二天下_一、侵_二暴諸侯_一、穴_レ室樞_レ戶、驅_二人牛馬_一、取_二人婦女_一、貪_レ得忘_レ親、不_レ顧_二父母兄弟_一、不_レ祭_二先祖_一。所_レ過之邑、大國守_レ城、小國入_レ保。萬民苦_レ之。孔子謂_二柳下季_一曰、夫為_二人父_一者、必能詔_二其子_一、為_二人兄_一者、必能教_二其弟_一。若父不_レ能_レ詔_二其子_一、兄不_レ能_レ教_二其弟_一、則無_レ貴_二父子兄弟之親_一矣。今先生世之才士也。弟為_二盜跖_一。為_二天下害_一而弗_レ能_レ教也。丘竊為_二先生_一羞_レ之。丘請、為_二先生_一往説_レ之。


柳下季曰、先生言、為_二人父_一者、必能詔_二其子_一、為_二人兄_一者、必能教_二其弟_一。若子不_レ聽_二父之詔_一、弟不_レ受_二兄之教_一、雖_二今先生之辯_一、將奈_レ之何哉。且跖之為_レ人也、心如_二涌泉_一、意如_二飄風_一。強足_二以拒_レ敵、辯足_二以飾_レ非。順_二其心_一則喜、逆_二其心_一則怒、易_二辱_レ人以_レ言。先生必無_レ往。孔子不_レ聽、顏回為_レ馭、子貢為_レ右、往見_二盜跖_一。盜跖乃方休_二卒徒大山之陽_一、膾_二人肝_一而饋_レ之。

(J') 孔子下_レ車而前、見_二謁者_一曰、魯人孔丘、聞_二將軍高義_一、敬再_二拜謁者_一。謁者入通。盜跖聞_レ之大怒、目如_二明星_一、髮上指_レ冠。曰、此夫魯國之巧偽人孔丘非邪。為_レ我告_レ之。爾作言造語、妄稱_二文武_一、冠_二枝木之冠_一、帶_二死牛之脅_一、多辭繆説、不_レ耕而食、不_レ織而衣、搖_レ唇鼓_レ舌、擅生_二是非_一、以迷_二天下之主_一、使_二天下學士不_レ反_二其本_一、妄作_二孝弟_一、而傲_二倖於封侯富貴_一者也。子之罪大極重。疾走歸。不_レ然、我將_レ以_二子肝

益中晝舖之膳上。孔子復通曰、丘得幸於季、願望履幕下。謁者復通。盜跖曰、使來前。孔子趨而進、避席反走、再拜盜跖。

盜跖大怒、兩展其足、案劍瞋目、聲如乳虎。曰、丘來前。若所言、順吾意則生、逆吾心則死。孔子曰、(K' 1) 丘聞之、凡天下有三德。生而長大美好無雙、少長貴賤見而皆說之、此上德也。知維天地、能辯諸物、此中德也。勇悍果敢、聚眾率兵、此下德也。凡人有此一德者、足以南面稱孤矣。今將軍兼此三者。身長八尺二寸、面目有光、脣如激丹、齒如齊貝、音中黃鐘。而名曰盜跖。丘竊為將軍恥不取焉。將軍有意聽臣、臣請、南使吳越、北使齊魯、東使宋衛、西使晉楚、使下為將軍造大城數百里、立數十萬戶之邑、尊將軍為諸侯。與天下更始、罷兵休卒、收養昆弟、共祭先祖、此聖人才士之行、而天下之願也。

(K' 2) 盜跖大怒曰、丘來前。夫可規以利、而可諫以言者、皆愚陋恆民之謂耳。今長大美好、人見而說之者、此吾父母之遺德也。丘雖不吾譽、吾獨不自知邪。且吾聞之、好面譽人者、亦好背而毀之。今丘告我以大城眾民、是欲規我以利、而恆民畜我也。安可長久也。城之大者莫大乎天下矣。堯舜有天下、子孫無置錐之地。湯武立為天子、而後世絕滅。非以其利大故邪。且吾聞之、古者禽獸多而人民少。於是民皆巢居以避之、晝拾橡栗、暮栖木上。故命之曰有巢氏之民。古者民不知衣服、夏多積薪、冬則煬之。故命之曰知生之民。神農之世、臥則居居、起則于于、民知其母、不知其父、與麋鹿共處、耕而食、織而衣、無有相害之心。此至德之隆也。



然而黃帝不能致德。與蚩尤戰於涿鹿之野、流血百里。堯舜作、立羣臣。湯放其主、武王殺紂。自是之後、以強陵弱、以眾暴寡。湯武以來、皆亂人之徒也。今子修文武之道、掌天下之辯、以教後世。縫衣淺帶、矯言偽行、以迷惑天下之主、而欲求富貴焉。盜莫大於子。天下何故不謂子為盜丘、而乃謂我為盜跖。子以甘辭說子路而使從之、使子路去其危冠、解其長劍、而受教於子。天下皆曰、孔丘能止暴禁非。其卒之也、子路欲殺衛君、而事不成、身蒞於衛東門之上。是子教之不至也。

子自謂才士聖人邪、則再逐於魯、削跡於衛、窮於齊、圍於陳·蔡、不容身於天下。子教子路蒞此患、上無以為身、下無以為人。子之道豈足貴邪。世之所高、莫若黃帝。黃帝尚不能全德、而戰涿鹿之野、流血百里。堯不慈、舜不孝、禹偏枯、湯放其主、武王伐紂、文王拘羑里。此六子者世之所高也。孰論之、皆以利惑其真、而強反其情性。其行乃甚可羞也。

世之所謂賢士、伯夷·叔齊辭孤竹之君、而餓死於首陽之山、骨肉不葬。鮑焦飾行非世、抱木而死。申徒狄諫而不聽、負石自投於河、為魚鱉所食。介子推至忠也、自割其股以食文公。文公後背之、子推怒而去、抱木而燔死。尾生與女子期於梁下。女子不來、水至不去、抱梁柱而死。此四者、無異於磔犬流豕、操瓢而乞者。皆離名輕死、不念本養壽命者也。世之所謂忠臣者、莫若王子比干·伍子胥。子胥沈江、比干剖心。此二子者、世謂忠臣也。然卒為天下笑。自上觀之、至于子胥·比干、皆不足貴也。丘之所說

我者、若告_レ我以_二鬼事_一、則我不_レ能_レ知也。若告_レ我以_二人事_一者、不_レ過此矣。皆吾所_二聞知_一也。

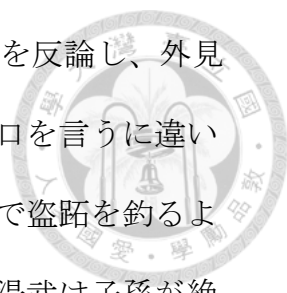
今吾告_レ子以_二人之情_一。目欲_レ視_レ色、耳欲_レ聽_レ聲、口欲_レ察_レ味、志氣欲_レ盈。人上壽百歲、中壽八十、下壽六十。除_二病瘦・死喪・憂患_一、其中開_レ口而笑者、一月之中、不_レ過_二四五日_一而已矣。天與_レ地無_レ窮、人死者有_レ時。操_二有_レ時之具_一、而託_二於無_レ窮之間_一。忽然無_レ異_二騏驥之馳過_レ隙也。不_レ能_下說_二其志意_一、養_中其壽命_上者、皆非_二通_レ道者_一也。丘之所_レ言、皆吾之所_レ棄也。亟去走歸、無_二復言_レ之。子之道、狂狂汲汲詐巧虛偽事也。非_レ可_二以全_レ真也。奚足_レ論哉。

(L) 孔子再拜、趨走出_レ門。上_レ車執_レ轡三失、目芒然無_レ見、色若_二死灰_一。據_レ軾低_レ頭、不_レ能_レ出_レ氣。歸到_二魯東門外_一、適遇_二柳下季_一。柳下季曰、今者、闕然數日不_レ見。車馬_二有行色_一、得_レ微_二往見_レ跖邪。孔子仰_レ天而歎曰、然。柳下季曰、跖得_レ無_下逆_二汝意_一若_上前乎。孔子曰、然。丘所謂無_レ病而自灸也。疾走料_二虎頭_一、編_二虎須_一、幾不_レ免_二虎口_一哉。¹⁵

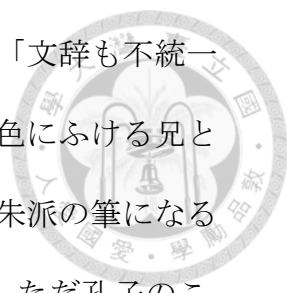
(『新釈漢文大系第8巻 莊子下』「漁父第二十九」、pp. 738-763)

第一九七話は、本章第二・三節で取り上げた『莊子』関連説話と同じく、説話の趣旨とあらすじは概ね変わらないが、主な論述内容が削減されたり、また内容に食い違いが見られたりする。相違点についてまた後述するが、本節ここでは、「盗跖」篇の主眼である論述、即ち盗跖が語っている (K' 2) を考察してみたい。

¹⁵ 下線部は『宇治拾遺物語』第一九七話にも用いられた「盗跖」篇の論説部分を指し、筆者によるものである。



盗跖の論述内容（K' 2）では、まず孔子が彼に対する賞賛を反論し、外見の良さは親の賜物であり、また表で人を褒める人こそ裏で陰口を言うに違いないと嗤った。そして孔子が城主と将軍になれるなどの利得で盗跖を釣るような言葉について、盗跖が堯舜の子孫は狭い地に住むことと湯武は子孫が絶えたことを例として挙げ、一時的な栄華が長く続かないことを言っている。反論を言った後、盗跖が有巢氏と神農氏の話について説き、それが「至徳之隆」であると称えた。しかしながら黄帝の代になると、世の中は徳を致すことができなくなり、堯舜、湯武などの君主を含めて、盗跖が「皆亂人之徒也」と述べた。更に盗跖が批判の矛先を孔子に向け、孔子が「修_二文武之道_一、掌_二天下之辯_一」とあるようだが、嘘偽りばかりをし、当時の主君と孔子の弟子たちを惑わし、そのせいで弟子の子路が命を失う羽目になった。また、盗跖は自称才士聖人の孔子自身も、諸国の君主から追放されたから、模範にはならないと言い、黄帝が代表とした世間が称える六人の賢君も「皆_レ以利惑_二其真_一、而強反_二其情性_一」と貶した。古から認められた賢君たちの評価をひっくり返すだけでなく、次に盗跖が「賢士」や「忠臣」と呼ばれる伯夷・叔齊・比干・伍子胥などの人物も、皆尊ぶには当たらないと述べた。最後に盗跖は批判を終え、人間の性情について孔子に説いた。盗跖が思う人間の性情とは、美しいものを見、良い音を聞き、うまいものを味わって満足するものである。また人間の寿命が長くても百歳に過ぎないが、天地は無窮であり、それと比べたら人間が生きている時間はほんの一瞬しかないと思われる。短い寿命の中で、なるべく自分の思いのまま過ごし、天寿を全うすべきだと盗跖が主張した。



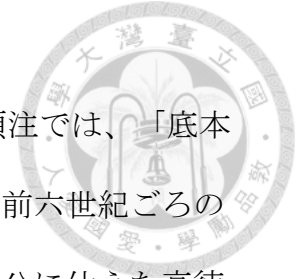
「盗跖」篇の内容について、新釈漢文大系『莊子』では、「文辞も不統一で論旨また浅薄を免れない。列子楊朱篇に見える、子産が酒色にふける兄と弟とをいさめた寓話と類似するところが多く、おそらくは楊朱派の筆になるものであろう」¹⁶と論ずる。確かに盗跖の論述を見ていくと、ただ孔子のこゝばに反論したり、また失敗するところを取り上げて叩いたり、盗跖自身の思想について、孔子に対する批判ほど述べていないと見られる。最後はとにかく自分の意思のままに生きていきたいことを主張したが、盗跖の前半の論述との繋がりが薄弱だと思われる。

(三) 第一九七話における改変について

第一九七話と「盗跖」篇とはあらましが概ね一致するように見えるが、細部の表現や話の順序には相違が見られる。以下では相違点をまとめて検討したい。

1. 「盗跖」篇では盗跖の兄を「柳下季」と記すが、第一九七話では「柳下恵」とされる。
2. 盗跖に教訓の言葉を発する前に、第一九七話では孔子が怯えている様子が描写されたが、「盗跖」篇では特に言及されていない。
3. 第一九七話における孔子の論説と「盗跖」篇における内容とは食い違いが見られる。
4. 第一九七話における盗跖の反論では、内容の順序が変えられ、また「盗跖」篇に見られない論説も見られる。

¹⁶ 市川安司、遠藤哲夫校注・訳(1967)「雑篇 盗跖第二十九」『新釈漢文大系第8巻 莊子下』、明治書院、p. 751

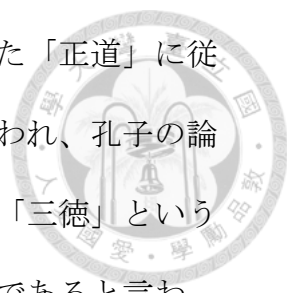


まず一点目の「柳下惠」について、『宇治拾遺物語』の頭注では、「底本は「りうかくゑい」。『莊子』は、「柳下季」とする。紀元前六世紀ごろの人。春秋時代の魯の大夫。姓は展、名は獲、字は季。よく僖公に仕えた高徳の士。」、そして「盗跖」について、「中国古代、黄帝時代また秦代の大盗賊といわれる伝説的な存在。柳下惠の弟という根拠はない」¹⁷と説明されるように、「柳下惠」は実際に存在した人物だが、孔子の生没年代と合わず、また盗跖という弟がいることも根拠のない話であるため、恐らく本説話が借りた名前だと思われる。

二点目の相違点についてだが、『莊子』では盗跖の恐ろしさに関する描写があるにもかかわらず、孔子は最初から恐れているという点が特に強調されていない。それに対して、第一九七話では敢えて孔子が恐れている様子を描写している。その理由は恐らく、のちのち盗跖に論破される羽目になることを示唆するところにあると考える。つまり、『宇治拾遺物語』の編者は説話の合理性を考えて、孔子の盗跖への態度に改変を加えたのではないかとと思われる。

三点目の、孔子の論説に見られる両書の相違するところについて、これは第一九七話に見られる孔子の盗跖に対する唯一の論説であり、即ち (K1) と (K' 1) の部分に相当する箇所である。第一九七話の (K1) では、孔子は「人の世にある様は、道理をもて身の飾りとし、心の掟とするものなり」と言い、人には従うべき正道があると掲げた。それを従わず、盗跖のように勝手気ままに過ごす、最期は「終り悪しきものなり」となると盗跖に忠告し

¹⁷ 前注 2、p. 483



た。しかし (K2) で見られるように、盗跖は孔子が言っていた「正道」に従う者の例を挙げ、その者たちの最期も「悪しきもの」だと思われ、孔子の論説を反駁した。一方、原拠「盗跖」篇の (K' 1) は、孔子が「三徳」という概念を掲げ、また盗跖がまさにその「三徳」を備えている者であると言われ、志を高く「聖人才士之行」を目指して行動すべきだと盗跖に吹聴した。結局、盗跖が孔子の所謂「聖人才士」の結末を取り上げて孔子の論説を駁した。最後に「盗跖」篇では、盗跖は (K' 2) で自身の信念と生き方を以て、孔子を論破した。

孔子の論説における一番大きな食い違いは、第一九七話では孔子は「道理」「掟」などで盗跖に戒めようとしたが、「盗跖」篇では「三徳」という具体的な徳目を以て具体例を挙げつつ詳しく論じるところにある。第一九七話では、原拠『莊子』にある「三徳」を「道理」「掟」に差し替えたのは、恐らくのちの盗跖の言葉に重きを置くため、孔子の論述をぼやかし、表現も曖昧にする手法だと考える。また、「盗跖」篇には孔子が盗跖を称賛するような発言が見られるが、第一九七話には見られない。この点について、先ほどの二点目の相違点、つまり物語の合理性を考えての改変と関連があると推測する。つまり、第一九七話の流れから見ると、相手を恐れている孔子は、盗跖を称賛するのがやや不自然なことになってしまう。第一九七話では、孔子の論説を大幅に改変することによって、焦点をのちの盗跖の言葉に当てさせた。

次は四点目になるが、第一九七話の (K2) と「盗跖」篇の (K' 2) とは紙幅に差がある以上、内容が少々削減されるのも理に適う。しかし、第一九七話では、論説を意図的に順序が変えられ、また「盗跖」篇にはない内容を添

付したことも見受けられる。順序が変えられたところに関して、第一九七話が「盗跖」篇の論説を用いたところは以下のように、堯舜の子孫→伯夷・叔齊→顔回・子路→孔子という順番で示される。一方、他の論述を除いたら

「盗跖」篇では、堯舜の子孫→子路→孔子→伯夷・叔齊という流れで例を挙げている。即ち第一九七話が伯夷・叔齊の例を前倒しして、堯舜の子孫の例の直後で取り上げたと見られる。本来、「盗跖」篇における伯夷・叔齊の例は他の儒家の賢人と思われる介子推、尾生、比干、伍子胥などの者と共に挙げられた。しかし第一九七話でその全てを挙げることなく、伯夷・叔齊の例だけ残し、また儒家の聖人・賢人の例だと見做し、前の堯舜子孫の例と共に挙げることにした。伯夷・叔齊の例だけ残した理由について、単純に中世でも馴染む話であり、本論第二章で論じる『十訓抄』にもよく取り上げられるほどの知名度が高い話であると考えられる。そして、第一九七話の盗跖の反論 (K2) では、「ほめらるるもの、四五日に過ぎず。そしらるるもの、また四五日に過ぎず。しかれば我が好みに随ひ振舞ふべきなり。」という原拠に見当たらない部分がある。その意味は、賞賛されようが、謗られようが、どうせ四、五日に持たず、すぐに人々に忘れられるから、自分の思うがままに振る舞うが良いと言っている。しかし、「盗跖」篇には「好_レ面譽_レ人者、亦好_レ背而毀_レ之」とあるように、裏表のある人間についての論述しか見られず、以上のような趣旨が見出されない。伝承された時点で既に改変を行われた可能性も否定できないが、第一九七話では、原拠『莊子』にはなかった文言を盗跖の論述に加えて書き記す理由について、筆者の推測に過ぎないが、恐らく『宇治拾遺物語』の編者自身の『莊子』認識に基づいて付け加えられたものではないかと考える。要するに、他人の評価を気にしない、己の

思うように振る舞うがいいという思考は、『宇治拾遺物語』の編者にとって盗跖に相応しい考え方だと言えるだろう。

総じていうと、第一九七話における改変が、主に編者がストーリーの合理性と表現の流暢さを考慮した上で施されたと見られるが、改変の幅が広く、まして主眼とした盗跖の論述がほとんど変貌されたため、本章の第二節と同様に、一種の『莊子』関連説話の変容だと見做していきたい。

まとめ

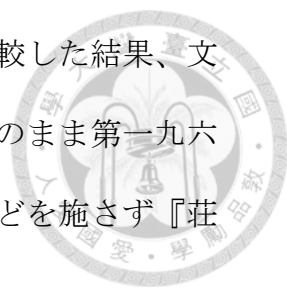
本章第一節では『宇治拾遺物語』序文を通して、『宇治拾遺物語』の編纂意図や特徴について考察したところ、以下のことを明確にした。

①同書は「「巡物語」の場」で作られた説話集だが、編者による影響がある程度残っている。

②編者は読者本位の読み方を念頭におきつつ、自身の意志による影響を最小限にしようとするのである。

本論では以上二点を念頭に入れて、『宇治拾遺物語』に収録された『莊子』関連説話を考えていく。

第二節では『宇治拾遺物語』第九〇話と原拠『莊子』「漁父」篇の内容をそれぞれ考察し、そして対照・比較をした結果、第九〇話には表現手法の違いによって添削や改変が見受けられる。第九〇話では、ストーリー性の重視及び漁父と孔子のやりとりに焦点を絞るために、孔子の漁父への態度と子路との問答部分に改変が施された。全体的に細かい改変だと認めるが、文面上の変化だけではなく、編者自身の理解を加えての改変と思われ、第九〇話は『莊子』説話の「変容」であると認められよう。



第三節では、第一九六話と『莊子』「外物」篇の内容を比較した結果、文面上の僅かな相違しか見られず、原拠本来の強い風刺性もそのまま第一九六話に保留されていた。すなわち、第一九六話の場合、改変などを施さず『莊子』「外物」篇の内容をそのまま受容したと伺える。

第四節では、第一九七話と『莊子』「盜跖」篇を段分けして比較・分析した。相違点だけ取り上げてみると、表記上の違いも見られるが、特に孔子と盜跖の論説で食い違いがあることを指摘した。食い違った部分には、例えば盜跖が挙げる例に見られる順番の改変などで、編者自身の『莊子』認識を加えた痕跡が見られる。故に第一九七話は、第二節で検討した第九〇話と同じく『莊子』の変容が見られると考える。

以上の内容をまとめると、第一九六話のみ、元来『莊子』の内容と近い形でそれを受容したものである。第九〇話・第一九七話は編者の思惑による改変が施されたので、変容だと見受けられる。

第二章、『十訓抄』における『莊子』の受容と変容



はじめに

鎌倉中期の説話集『十訓抄』は、十箇条の教訓に基づき、「何らかの啓蒙教化を目的と」し、「日常での生き方を平易に説く実用的教養的性格を濃厚にもつ、典型的な中世の教訓説話集である」¹と評される教訓性の強い説話集である。所収している内容は和漢説話を含めおよそ 294 話以上、また各段の教訓に合わせて先頭に小序が置かれ、連想や読み替えなどの方法で複数の説話を繋げて語るという書き方が特徴的だと言われる²。故に『十訓抄』の説話は多かれ少なかれ編者によって改変され、教訓に相応しいように配列させると見られる。啓蒙教化を目的とし、また実用的教養的性格が濃厚である持ち主として、『十訓抄』では儒仏道ゆかりの説話をも大量に取り入れた。その中で、道家の代表的典籍とした『莊子』の関連説話もいくつか取り上げられたと見られる。『莊子』における説話は、本来ならば『莊子』思想を敷衍して語られていて、元から教訓性を帯びる内容であると思われる。故に『莊子』関連説話がどのように『十訓抄』の趣旨と結びつけられるのかについて、本章でそれを考えたい。

『十訓抄』における『莊子』関連内容は以下の六話が見られる。

巻・篇名	内容の要約	原拠『莊子』
第二 僇慢を離るべき事	材と不材	外篇・

¹ 小峯和明(1984)「十訓抄」『研究資料日本古典文学③説話文学』、明治書院、p. 219

² 本論の先行研究で紹介した竹村信治氏の論文に参照する。

＜二ノ二＞		山木第二十
第三 人倫を侮らざる事 ＜三ノ十二＞	黄帝と牧馬の童子	雑篇・ 徐無鬼第二十四
第六 忠直を存ずべき事 ＜六ノ一＞	蟬をねらう 螻蛄をねらう 黄雀	外篇・ 山木第二十
第六 忠直を存ずべき事 ＜六ノ三十一＞	蝶を夢見る翁	内篇・ 齊物論第二
第十 才芸を庶幾すべき事 ＜十ノ五十四＞	邯鄲の歩み	外篇・ 秋水第十七
第十 才芸を庶幾すべき事 ＜十ノ六十七＞	洞庭の楽	外篇・ 天運第十四

表2 『十訓抄』における『莊子』関連内容

本章では以下の視点を以て問題提起とし、考察を進めていく。

1. 本来教訓性の強い『十訓抄』は、同じく教訓性の強い『莊子』関連内容をどう取り入れるのか、両者の教訓性は通じ合えるものなのか。
2. 『十訓抄』は『莊子』関連内容を取り上げた際に、説話集の内容や趣旨に合わせるため、何か工夫や改変を施したかどうか。
3. 『十訓抄』における『莊子』の受容、もしくは変容のあり方を考える。

既に序章で先行研究を紹介したので、本章では『十訓抄』の編纂意図に改めて着目し、それを踏まえて同書所収の『莊子』関連内容を一つずつ考察したい。表2で列挙した『莊子』関連内容の中で、説話ごと『十訓抄』に取り上げられたのは＜二ノ二＞と＜六ノ一＞のみ、他は全て文言だけの引用が見

られる。故に本章では、第二節と第三節で〈二ノ二〉と〈六ノ一〉の内容をそれぞれ取り上げて考察し、そして第四節でまた〈二ノ二〉と〈六ノ一〉以外の『莊子』関連内容を考察する。

考察方法としては前章と同様、『十訓抄』の内容と、原拠と見なされる『莊子』の内容とを取り上げて比較し、とりわけ『十訓抄』にみられる『莊子』関連内容の改変及びその改変の意義を究明したい。最後に、この六話において、果たして『十訓抄』では『莊子』関連説話を受け容れたのか、もしくは変容させたのかという問題についても明らかにしたい。

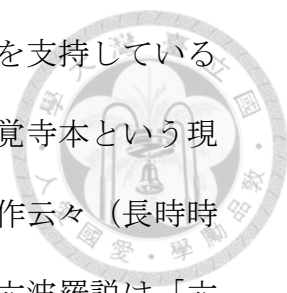
第一節、『十訓抄』の編纂意図について

『莊子』関連内容の採録意識について論じる前に、まず『十訓抄』の編纂意図・編者の目的を考える必要があると思われる。『十訓抄』の編者に関して、かつて「橘成季、六波羅二膳左衛門入道、菅原為長の三人が擬せられている」³と言われる。そのうち橘成季は『古今著聞集』の編者として名高く、また『古今著聞集』で『十訓抄』から大量の抄入説話があることがよく知られる。しかしその故に、『古今著聞集』と『十訓抄』の成立年代及び編纂時期がほぼ重なっていて、同一人物による作品とは考え難いと指摘され⁴、早いうちに学界が橘説の可能性を除外したと見られる。一方、六波羅説と為長説

³ 前掲注1、p. 216

⁴ 「古今著聞集とほぼ同時期に、十訓抄が成立し、これも主として王朝貴族世界の説話を大量に収集している。しかし十訓抄には、古典的な王朝世界をふまえながらも、それなりに新しい時代に対処しようとする啓蒙意識があり、とにかく一步さきの世界を予感している点で、著聞集の世界と明確に区別されなければならない。」永積安明(1966)「解説」『日本古典文学大系 84 古今著聞集』、岩波書店、p. 15

「諸書との伝承関係を調査してみたが、「十訓抄」と「古今著聞集」とは非常に異質な伝承関係にあることが判明し、この点からも「十訓抄」に関して、橘成季著作説は明白に否定しなければならない」志村有弘(1974)「「十訓抄」の説話配列と編者——菅原為長考——」『中世説話文学研究序説』、桜楓社、p. 229



について、それぞれ既存の論拠を持っているので、それぞれを支持している学者も多いと見られる。六波羅説の発端は、『十訓抄』の妙覚寺本という現在所在不明な伝本の中で、「或人云、六波羅二臈左衛門入道作云々（長時時茂等奉公）」という一句が記されたからである。それ以来、六波羅説は「六波羅二臈左衛門入道」という人物の正体にまつわって論説を展開した。そして為長説に関しては、室町時代の歌論書『正徹物語』の後半「清巖茶話」に、「拾訓抄は、為長卿の作かと覚ゆる也。哥仙・有職・能書にて有りし也。」⁵という文句が見られるからである。しかし総じて見ると、六波羅説といい、為長説といい、いずれも傍証のみ挙げられ、「この人物こそが『十訓抄』の編者である」といった確証は未だに出されていないと見られる⁶。

『十訓抄』の編者は未だに特定できないが、同書の序文からある程度本書の編纂目的・編者の採録意図が伺えると考えられる。『十訓抄』の序文を以下にあげる。

それ、世の中にある人、ことわざしげき振舞につけて、高き賤しき品をわかず、賢なるは得多く、愚なるは失多し。しかるに、いまなにとなく、聞き見るところの、昔今の物語を種として、よろづの言の葉の中より、いささかその二つのあとをとりて、良きかたをば、これをすすめ、悪しきすぢをば、これを誡めつつ、いまだこの道を学びしらざらむ少年のたぐひをして、心をつくる便となさしめむがために、こころみに十段の篇を別ち

⁵ 久松潜一、西尾實校注(1961)「正徹物語」『日本古典文学大系 65 歌論集 能楽論集』、岩波書店、p. 208

⁶ 「両説とも、補足、傍証といったことが加えられてきたが、現在においても結論を見るには至っていない。」浅見和彦(1997)「解説」『新編 日本古典文学全集[51]十訓抄』、小学館、p. 502

て、十訓抄と名づく。すなはち三巻の文として、三余の窓に置かむとなり。

その詞、和字をさきとして、必ずしも筆の費多からず。見るもの、目安からむことを思ふゆゑなり。そのためし、漢家を次として、広く文の道を訪はず。聞くもの、耳近からむことを思ふゆゑなり。すべてこれをいふに、空しき詞をかざらず、ただ実のためしを集む。道のかたはらの碑の文をば、こひねがはざるところなり。

ただし、つたなき身を顧みるに、秋の螢の光を集めずして、風月の望に暮らく、春の鶯のさへづりを学ばざれば、糸竹の曲に疎し。芸なく、能欠けたり。なすことなくして、いたづらにあまたの露霜を送るばかりなり。かかるにつけては、藻塩草かきあやまれる言の葉も数つもり、梓弓引きみむ人の嘲りも、はづれがたくおぼえながら、志のゆくところ、ただにはいかがやまむとてならし。

そもそも、かやうの手すさみのおこりを思ふに、口業の因離れざれば、賢良の諫めにたがひ、仏の教へにそむけるに似たりといへども、閑かに諸法実相の理を案ずるに、かの狂言綺語の戯れ、かへりて讚仏乗の縁なり。いはむや、またおごれるをきらひ、直しきをすすむる旨、おのづから法門の意にあひかなはざらむや。かたがたなにの憚りかあらむ。

これによりて、建長四年の冬、神無月のなかばのころ、おのづから暇のあき、心閑かなる折節にあたりつつ、草の庵を東山のふもとにしめて、蓮の台を西土の雲にのぞむ翁、念仏のひまにこれを記し終はること、しかりとなむいへり。

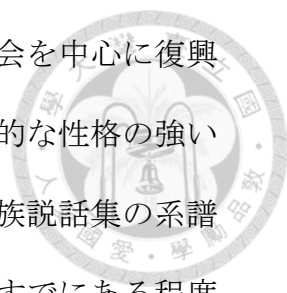
(『新編 日本古典文学全集[51]十訓抄』 pp. 17-19)



『十訓抄』の序文は短いものだが、「文章が論理的であったのみならず、その構造もかなり綿密に作り込まれていて、読者を意識した文章である」⁷と称えられるほど読みやすい文章だと考えられる。まず著作の動機として、編者は「世の中にある人、ことわざしげき振舞につけて、高き賤しき品をわかず、賢なるは得多く、愚なるは失多し」という状況に気付き、『十訓抄』の読者層を「この道を学びしらざらむ少年のたぐひ」と設定し、「聞き見るところの、昔今の物語を種として、よろづの言の葉の中より、いささかその二つのあとをとりて、良きかたをば、これをすすめ、悪しきすぢをば、これを誡めつつ」という方法で説話集を編纂し、「十段の篇を別ちて、十訓抄と名づく」と、書名の由来を詳しく述べた。次に文体を和文にした理由と、「漢家を次として、広く文の道を訪はず。聞くもの、耳近からむことを思ふゆゑなり。すべてこれをいふに、空しき詞をかざらず、ただ実のためしを集む」とあるように、漢籍の原拠から珍しい教訓を採録するより、読者が馴染みのある故事説話を優先するという採録意識を語った。また、序文では「ただし、つたなき身を顧みるに、秋の螢の光を集めずして、風月の望に暮らく、春の鶯のさへづりを学ばざれば、糸竹の曲に疎し。芸なく、能欠けたり」と述べ、『十訓抄』編者自身の経験によって読者の勉学を薦める姿勢が伺えると同時に、『十訓抄』が漢籍と詩歌管弦に関する知識を重視することも垣間見える。

福島尚氏が『十訓抄』序文の解釈を緒とし、「『十訓抄』は、主として後嵯峨院時代の公家社会に奉仕する「技能官人」層の若輩者あたりを想定読者

⁷ 内田濤子(2012)「『十訓抄』序文再読」『日本文学』61(7)、日本文学協会、p. 45-47



とし、王朝貴族的な制度・文化が嵯峨院の宮廷（仙洞）社会を中心に復興してくる公家社会の動向に緊密に結びついて成立した、当代的な性格の強い処世のための教訓（教養）書」であるため、「基本的には貴族説話集の系譜に連なる啓蒙的著作であって、その意図された啓蒙の対象はすでにある程度の王朝貴族的教養を身につけた人々である」⁸という啓蒙精神に富む特徴を指摘した。また、竹村信治氏は、『十訓抄』序文の冒頭で『古今和歌集』の序文「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」⁹を踏まえたことについて、「和歌世界の築いている文芸的価値観に寄り掛かりつつ、この作品の成立を語ろうとしている」¹⁰と、文芸に憧れる編者の姿勢を明らかにした。総じて言うと、『十訓抄』の編者は「若い奉公人に正しい処世術を教えたい」という明確な編纂意図を以て説話集を編纂し、所収の内容も編者が思う「身に付くべき教養」という選別基準を以て取捨選択したものと考えられる。

第二節、『十訓抄』〈二ノ二〉

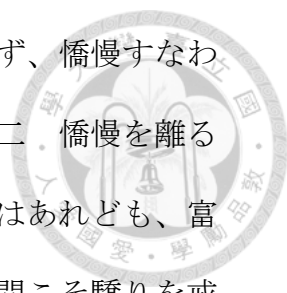
本章第二・三・四節では、本章の表1に載せられた『十訓抄』における『莊子』関連内容を順次取り上げて、原拠とみられる『莊子』の内容とを比較して考察を行う。本節ではまず『十訓抄』〈二ノ二〉について検討する。

『十訓抄』〈二ノ二〉「木と雁の運命」は、第二条の「橋慢を離るべき事」の第二項目に位置するものである。「第二 橋慢を離るべき事」という

⁸ 福島尚(1993)「十訓抄——作品研究のための瀬ぶみ——」『説話集の世界 II—中世—』、勉誠社、pp. 374-375

⁹ 小沢正夫・松田成徳(1994)「仮名序」『新編 日本古典文学全集[11]古今和歌集』、小学館、p. 17

¹⁰ 竹村信治(1986)「連想と展開—十訓抄の表現(1)—」『説話・物語論集』14、金沢大学古典文学研究会、p. 21



一条は、題目の通り、人の身分がどうであろうにもかかわらず、橋慢すなわち驕り高ぶることを控えておくべきという教訓である。「第二 橋慢を離るべき事」冒頭部の小序では、「およそ貧しきものの諂はざるはあれども、富者の驕らざるはかたけれ」と書いて、高い立ち位置にいた人間こそ驕りを戒めるべきだと言っている。また、『涅槃経』ゆかりの文「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」が小序に用いられ、日常の振る舞いから常に慎むべきだと言われる。＜二ノ二＞「木と雁の運命」は第二条の第二項目であり、すなわち冒頭に近い立ち位置にあるので、本条目が説いた「橋慢を離るべき」という処世訓とある程度繋がりががあると思われる。＜二ノ二＞の内容を以下に載せる。

(M) おほかた、世にある道のわづらはしく、振舞ひにくきこと、薄氷を踏むよりもあや服、けはしき流れに棹さすよりも、はなはだしきものなり。

(N1) 莊子、山を過ぎ給ふに、木を切るものあり。直なるをば切りて、ゆがめるをば切らず。また、人の家にやどり給ふに、鴈二つあり。主人よく鳴くをば生け、鳴かざるをば殺しつ。明くる日、弟子、莊子に申していはく、「昨日、山中の木は、直ぐなるを切りて、ゆがめるをば切らず。また、家の二つの鴈は、よく鳴くをば生け、鳴かざるをば殺しつ。よき木も切られ、よく鳴かざる鴈も殺されぬ」と申せり。莊子のいはく、「世の中のためし、これにあり」と答へ給へり。

(N2) かかるにつけても、よく橋慢を捨てて、身をつつしむべしと見えたり。



(01) 文集詩にいはいく、

木鴈一篇須記取 木鴈一篇須く記し取るべし

致身材与不材間 身を致さむ、材と不材との間

とあるはこれなり。

(02) また、陸士衡が文賦には、

在木闕不材之質 木に在いては不材の質を闕き

処鴈乏善鳴之分 鴈に処しては善く鳴くの分に乏し

ともあり。

(03) また藤原篤茂が長句にも、

昨日山中之木 材取於己 昨日山中の木、材己に取り

今日庭前之花 詞慙於人 今日庭前の花、詞人に慙づ¹¹

(『新編 日本古典文学全集[51]十訓抄』 pp. 112-114)

本段は一つの『莊子』関連説話と三つの詩文から成り立ち、以下ではまず本段の構造と内容から分析し、次に説話の原拠『莊子』外篇「山木第二十」(以下、「山木」篇と記す)で記された内容を考察し、両者の相違などを比較して論じる。

(一) <二ノ二>の内容について

<二ノ二>の概略をまとめると、およそ (M) (N1) (N2) (01) (02)

(03) の五つの部分からなる。まず『十訓抄』編者自身が付けたまえがき

(M) に続いて、(N1) で『莊子』「山木」篇から出典の説話(以下、「材と

¹¹ 引用文中の (M) (N) (0) などの記号、下線は、筆者によるものである。以下同様

不材」説話)と(N2)、『十訓抄』編者による評論、最後に白居易の詩(01)、陸士衡の賦(02)、藤原篤茂の長句(03)を並べて終わらせた。

『十訓抄』<二ノ二>の冒頭では、前述に触れた「第二 僣慢を離るべき事」の小序で記された教訓を踏まえ、日常の振る舞いを慎むことがまさに

「薄氷を踏むよりもあやふく」ことを述べ、言行を慎むことがいかにも難しいことであろうことかと強調した。そして続いての「材と不材」説話の概略はこうである。莊子が人のうちに訪ねていく途中で二つの場面を見かけた。一つ目の場面は、きこりが木を切るところで、歪んで生えた木を無視し、真っ直ぐに生えた木を切ることである。もう一つの場面は、主人が来客をもてなすために、鴈を殺そうとするところで、よく鳴くほうの鴈を選ばず、鳴かないほうの鴈を殺すことである。この二つの場面に対して、莊子はそれこそが世の常理だと嘆いたと見られる。『十訓抄』の編者がこの「材と不材」説話に対して、「よく僣慢を捨てて、身をつつしむべし」という句を記し、<二ノ二>が置かれた条目「第二 僣慢を離るべき事」の主旨と呼応するように見える。しかし『十訓抄』編者自らの感想だけではなく、次に「材と不材」説話にまつわる三つの漢詩文を並べて示した。挙げられた三つの漢詩文の出典、作者、及び本来の詩作テーマはそれぞれ違うが、同じ「材と不材」説話における「木と鴈」のモチーフを用いた故、『十訓抄』の編者によって切り取られたと見られる(上記下線部に参照)。

『十訓抄』<二ノ二>における引用ではない部分、即ち冒頭部分の(M)と「材と不材」説話に対する感想(N2)だけを考えると、『十訓抄』の編者は「材と不材」説話に肯定的な態度で取り扱うことがまず判明できると伺える。そして、引用であるが『十訓抄』の編者によって切り取って並べ替えた

(01) (02) (03) の詩文も、編者の意思で行った配列だと見られ、<二ノ二>の中心である (N1)、「材と不材」説話の趣旨をより強調するように行われたと考える。

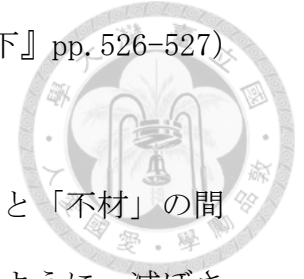


(二) 原拠『莊子』「山木」篇の内容について

『莊子』外篇「山木」篇は八つの説話からなり、それぞれ説話本体と論説部分があり、互いに関連がないと見られる。本節では、「材と不材」説話に関わる内容だけ取り上げて、以下に載せる。(表記上の便宜のため、以下の部分のみを指す場合「山木①」と称し、本来の「山木」篇全編を指す場合は「山木」篇のままです。)

(N' 1) 莊子行_レ於_レ山中_一、見_レ大木枝葉盛茂_一。伐_レ木者止_レ其旁而不_レ取也。問_レ其故_一、曰、無_レ所_レ可_レ用。莊子曰、此木以_レ不_レ材_一得_レ終_レ其天年_一。夫子出_レ於_レ山_一、舍_レ於_レ故人之家_一。故人喜、命_レ豎子殺_レ鴈而烹_レ之。豎子請曰、其_レ能鳴、其一不_レ能_レ鳴。請奚殺。主人曰、殺_レ不_レ能_レ鳴者_一。明日弟子問_レ於_レ莊子曰、昨日山中之木、以_レ不_レ材_一得_レ終_レ其天年_一、今主人之鴈、以_レ不_レ材_一死。先生將_レ何處_一。

(N' 2) 莊子笑曰、周將_レ處_下夫材與_レ不_レ材_一之間_上。材與_レ不_レ材_一之間、似_レ之而非也。故未_レ免_レ乎累_一。若夫乘_レ道德_一而浮游則不_レ然。無_レ譽無_レ訾、一龍一蛇、與_レ時俱化、而無_レ肯專為_一。一上一下、以_レ和為_レ量。浮_レ游乎萬物之祖_一、物_レ物而不_レ物_レ於_レ物_一、則胡可_レ得_レ而累_レ邪。此神農黃帝之法則也。若夫萬物之情、人倫之傳則不_レ然。合則離、成則毀、廉則挫、尊則議、有_レ為_レ則虧、賢則謀、不肖則欺。胡可_レ得_レ而必_レ乎哉。悲夫。弟子志_レ之。其唯道德之鄉乎。



『莊子』「山木①」で莊子が述べているのは、ただ「材」と「不材」の間に立ち止まっても、いつかまた直ぐ生えた木と鳴かざる雁のように、滅ぼされる運命に遭う羽目になる。故にその窮地から逃れるには、時と共に変化し、或いはもっぱら何かを取えて為すことせずして、物事に使役させないのが、煩わしさから逃れる唯一の方法だと言っている。また (N' 2) の後半で、莊子はそのようにしなければいけない理由について、世間における秩序は「合則離、成則毀、廉則挫、尊則議、有_レ為則虧、賢則謀、不肖則欺」であるため、この「常住のものは何一つない相對の世界」¹²で生き延びたいなら、道德の郷に帰するのが最適だと主張する。

周知の通り、『莊子』の外篇と雜篇は後人による付記したものであり、内容は内篇の敷衍としたものである場合も考えられる。「山木」篇もまさにそうであり、「山木①」で語られた「材と不材」説話は、『莊子』内篇の「逍

¹² 服部武(1990)「莊子の説話と語録」『莊子—大知と逍遙の世界—』、富山房、p. 201



遙遊」と「人間世」に論じられた「不材の用」または「無用の用」¹³という概念から敷衍されたと言われる¹⁴。

(三) <二ノ二>における改変について

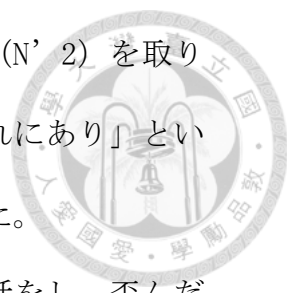
<二ノ二>と「山木①」の内容を比較すると、以下のような違いが見られる。

1. <二ノ二>の (N1) (N2) 「材と不材」説話部分及び感想部分の前に、編者によるまえがき (M) と、後述の (01) (02) (03) があり、一方「山木①」は (N' 1) (N' 2) 「材と不材」説話部分及び思想部分のみで構成される。

¹³ 「惠子謂_レ莊子_レ曰、吾有_二大樹_一。人謂_レ之_レ樗_一。其大本擁腫而不中_レ繩墨_一、其小枝卷曲而不中_レ規矩_一。立_レ之_レ塗_一、匠者不_レ顧_一。今、子之言、大而無_レ用。眾所_レ同去_一也。莊子曰、子獨不_レ見狸狌_一乎。卑_レ身而伏、以候_レ敖者_一。東西跳梁、不_レ避_レ高下_一、中_レ於機辟_一、死_レ於罔罟_一。今、夫蘘牛、其大若_二垂天之雲_一。此能為_レ大矣、而不_レ能_レ執_レ鼠_一。今、子有_二大樹_一、患_レ其無_レ用。何不_レ樹_レ之_レ於無何有之鄉、廣莫之野_一、彷徨乎無_レ為_レ其側_一、逍遙乎寢_レ臥_レ其下_一。不_レ夭_レ斤斧_一、物無_レ害者_一。無_レ所_レ可_レ用、安所_レ困苦_一哉。」阿部吉雄、市川安司、山本敏夫、遠藤哲夫校注・訳(1966)「逍遙遊第一」『新釈漢文大系第7巻 老子 莊子上』、明治書院、pp. 149-150

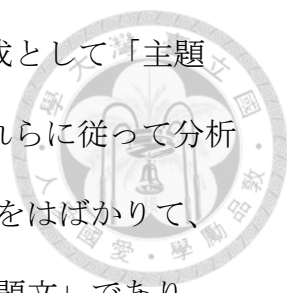
「南伯子綦遊_レ乎商之丘_一。見_レ大木_一焉有_レ異。結_レ駟千乘_一、隱將_レ芘其所_レ賴_一。子綦曰、此何木也哉。此必有_二異材_一夫。仰而視_レ其細枝_一、則拳曲而不_レ可_レ以為_二棟梁_一。俯而視_レ其大根_一、則軸解而不_レ可_レ為_二棺槨_一。啜_レ其葉_一、則口爛而為傷。嗅_レ之_一、則使_レ人狂醒三日而不_レ已。子綦曰、此果不材之木也。以至_レ於此其大_一也。嗟乎、神人以_レ此不材。宋有_二荆氏者_一。宜楸・柏・桑_一。其拱把而上者、求_レ狙猴之杙_一者斬_レ之、三圍四圍、求_レ高名之麗者斬_レ之、七圍八圍、貴人・富商之家求_レ禪傍_一者斬_レ之。故未_レ終_レ其天年_一、而中道之夭_レ於斧斤_一、此材之患也。故解_レ之以_レ牛之白額者、與_レ豚之亢鼻者_一、與_レ人有_レ痔病_一者_一、不_レ可_レ以適_レ河_一。此皆巫祝以知_レ之矣。所_レ以為_二不祥_一也。此乃神人之所_レ以為_二大祥_一也。」「人間世第四」、p. 220

¹⁴ 「本段（筆者注：本論でいう「山木」篇）で言っている内容は、内篇における莊子の觀念と完全に一致しないことではないが、主体とした觀念が敷衍されたと見られる。最も明らかであるのが、<山木>篇において内篇の「不材之材」と「無用之用」を検証したこと。また、「主人の雁は不材によって死んだ」ことも、莊子の「無用之用」の觀念に直接的に疑い始め、挑戦を申し出たと見なす。<山木篇>には更に「周將處乎材與不材之間」という新しい觀念を提出し、内篇の「超越的な直線型思考」から「内在的な循環式思考」に転換した。（原文：莊子本段所言，與内篇中莊子之觀念並非完全不同，然無可否認的，在主體觀念上已有進一步的引申。最明顯者在於〈山木篇〉已針對内篇「不材之材」、「無用之用」的觀念加以檢驗；而「主人之雁以不材死」，更是對莊子「無用之用」觀念最直接的質疑與挑戰。〈山木篇〉提出「周將處乎材與不材之間」的新觀念，將内篇「超越的直線式思維」轉而為「內在的循環式思維」）劉榮賢(2004)「外雜篇中由「心」向「物」的思維發展」『莊子外雜篇研究』、聯經出版、pp. 151-152

- 
2. <二ノ二>には、「山木①」における莊子返答部分の（N' 2）を取り上げてなく、代わりに（N2）の「世の中のためし、これにあり」という句を用いて（N1）の「材と不材」説話を締めくくった。
 3. 「山木①」の「材と不材」説話に、莊子はきこりと会話をし、歪んだ木を切らない理由について問う場面があるが、<二ノ二>では見られない。

<二ノ二>と「山木①」それぞれの趣旨を見てみると、<二ノ二>で伝えている教訓とは、人は僣慢になりすぎず、卑下もしすぎせず、身を慎みながら生きていくべきである。一方、「山木①」は、人が生きていくには、場によって自身の姿勢を変化しつつ、或いは一層相対な世界から離れようと述べた。故に趣旨から見ると、両作品が述べたいものは異なっていると言えるが、両者の主眼となる「材と不材」説話だけ取り上げて見たら、以上で挙げた四点のうち3,4のように、文面での細かい相違しか見られないという奇妙な現象が見受けられる。故に、<二ノ二>と「山木①」において全体を異なったことにしたのは、主眼となる「材と不材」説話ではなく、<二ノ二>が付け加えた（M）と（01）（02）（03）にあったと考えられる。

<二ノ二>では、「材と不材」説話本体部分（N1）の前後に、編者によるまえがき（M）と「材と不材」説話に対する感想（N2）が付け加えられるという一連のプロセスを通して、「材と不材」説話の読み方を主導したと見られる。先行研究で取り上げた竹村信治氏の論文では、<二ノ二>はただ「第二僣慢を離るべき事」という条目における論説の補強要素として設けた現実理



解の材料であると言われる¹⁵。竹村氏が『十訓抄』の説話構成として「主題文・引証・関連話題・関連説明」¹⁶などが挙げられるが、それらに従って分析すると、「第二 僣慢を離るべき事」の小序で述べた「人目をはばかりて、よく習ひをつつしみて、心に心をまかすまじきなり」は「主題文」であり、<二ノ二>での(N1)「材と不材」説話は「引証」、(01) (02) (03)三つの詩文は「関連話題」として取り上げられたと見られる¹⁷。『十訓抄』の編者は、<二ノ二>における「引証」と「関連話題」を確実に働かせるため、まえがきの(M)と(N' 2)を「関連説明」として付け加えたと伺える。しかしこのように、他の要素を付け加えて「材と不材」説話の読み方を改変したのは、『十訓抄』編者が都合のいい解釈をするためではなく、寧ろ編者が「材と不材」説話を採録した時点から、既に本来の「山木①」と違った読み方で「材と不材」説話を読んでいると推測できよう。

「材と不材」説話が『十訓抄』の編者に読まれた時点で違った読み方で読まれた理由は二つあると考える。まず一つ目は、恐らく『十訓抄』の編者が実際「山木①」における(N' 2)の思想部分を読んでいなく、そのせいで「材と不材」説話の理解に欠けていると考える。先述で考察した『十訓抄』の序文に述べられたように、編者の採録基準はあくまで「聞くもの、耳近か

¹⁵ 「十訓抄第二章は、「可離僣慢事」をテーマに掲げ、その小序では、僣慢に端を發する振る舞いを列挙してこれを戒め、「人目をはゞかり、世のそしりをつゝしみて、心にまかすまじきなり」（第一類本による。）との処世訓が提示されるが、これを補強するために示された現実理解「大方世ニアル道ノワヅハシク振舞ニクキ事」は、第2段（莊子故事）、第3段の「引証」によって例証されている。」竹村信治(1987)「連想と読み替え—十訓抄の表現(2)—」『金沢美術工芸大学学報』31、金沢美術工芸大学、p. 4

¹⁶ 「十訓抄の叙述は、(中略)主題文・引証・関連話題・関連説明によって構成されていると観察される」前掲注15、p. 1

¹⁷ 「「主題文」は、各章の主題を提示し説明した叙述で、各章冒頭の序文や叙述の節目、また引証例の説明などに見出される。作品叙述の骨格を形成するものと言ってよい。「引証」は、主題を敷衍説明するために引かれた、仏典・典籍の一節や漢詩・和歌、或いは故事説話をいう。「関連話題」は、「引証」にかかわって想起引用された話題で、これに更に関連話題が続く場合や、また「関連説明」の例証としてひかれる場合もある。」前掲注10、p. 21

らむこと」、まして「空しき詞をかざらず、ただ実のためしを集む」と言われたので、直接原拠の漢籍から引用せず、馴染みのある名言や故事を集めた類書から説話の材料を集めるのが効率的だと想定できるだろう。実際、『十訓抄』が類書を典拠とする論点も先行研究で指摘された¹⁸ので、この理由の可能性はかなり大きいと伺える。

もう一つ推測として挙げたい理由を述べる前に、まず<二ノ二>の最後で引用された三つの詩文、すなわち (01) (02) (03) の白居易の詩、陸士衡の賦、藤原篤茂の長句について、「材と不材」説話との関連性を考察したい。

<二ノ二>では、白居易の詩、陸士衡の賦、藤原篤茂の長句をそれぞれ一組の対句だけ切り取って、(01) (02) (03) となり引用した。「文集詩にいはく」と記された (01) の内容は、『白氏文集』卷六十六から出典した

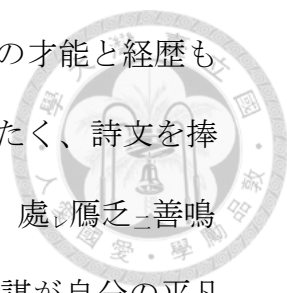
「偶作」という律詩にあった最後の二句である。原拠「偶作」のあらすじを述べると、作者の白居易は長閑な生活情景を描写しつつ、最後で『莊子』の

「材と不材」説話を想起し、この説話の趣旨はまさに「致_中身才與_下不才_上間_上」¹⁹ということにあると言っている。「致_中身才與_下不才_上間_上」、即ち「材と不材の間で身を致す」という読み方は、まさに『十訓抄』<二ノ二>での読み方と一致すると伺える。次に「陸士衡が文賦には」と記された (02) の詩文は、実際廬諶の「贈劉琨詩」の序文であると『十訓抄』の頭注が指摘し、陸士衡の賦と同じく『文選』に収録される²⁰。「贈劉琨詩」は合計二十首と小

¹⁸ 「『十訓抄』が漢籍を出典として利用している場合、典拠たる漢籍を直接の情報源とするのではなく、類書などの二次的情報源に拠っていることが多い」前掲注 7, p. 48

¹⁹ 岡村繁(2015)「偶作」『新釈漢文大系 107 白氏文集 十一』卷六十六、明治書院、pp. 463-464

²⁰ 「陸士衡の文賦は『文選』卷十七に収録されているが、所載の一文はそれではなく、廬諶の「劉琨に贈る詩」(文選・卷二十五)の序の一節。」前掲注 6, p. 113



序があり、その小序の趣旨を要約して述べると、廬諶が自身の才能と経歴も芳しくないのに、劉琨に一目置かれたことに感謝の意を表したく、詩文を捧げた。「贈劉琨詩」小序の内容では、「在_レ木闕_二不材之資_一、處_レ鴈乏_二善鳴之分_一」²¹とあり、「材と不材」説話のモチーフを用いて、廬諶が自分の平凡さを強調すると見られる。つまり、廬諶は自身が「不材で鳴かない雁である」ということを伝えるためだけで、「材と不材」説話のモチーフを用い、説話の内容自体に触れていなかったと考える。最後に、(03)で引用した藤原篤茂の長句について、『本朝文粹』には「昨日山中之木、材取_二諸己_一。今日庭前之花、詞慙_二於人_一」²²と記され、山における悪材を自分が取り入れるという内容も、モチーフだけの使用に止まり、「材と不材」説話の内容とほとんど関連性がないと伺える。

(01) (02) (03) の三詩文をまとめて考察すると、白詩以外の二つ、廬諶の「贈劉琨詩」と藤原篤茂の長句は、共に「材と不材」説話とあまり関係がなく、ただ「材と不材」説話における歪める木と鳴かざる雁を「不材」のモチーフとして使えたと見られる。要するに、唯一「材と不材」説話の内容に触れたのは白居易の詩であり、そして白詩での「材と不材」説話に対する読み方が、『十訓抄』〈二ノ二〉での読み方と一致すると考える。前節で紹介した『十訓抄』の編者に関する先行研究では、『十訓抄』の編者と思われる人物が白居易に憧れを持っている者に違いないと指摘した²³。また言われるまでもなく、白詩が日本中世に与える影響が大きいと認められ、そこで考え

²¹ 内田泉之助、網祐次(1963)「贈_二劉琨_一詩、並書」『新釈漢文大系 14 文選(詩篇)上』贈答三、明治書院、p. 345

²² 大曾根章介、金原理、後藤昭雄校注(1992)「仲春於_二左武衛將軍亭_一同賦_二雨來花自湿_一」『新日本古典文學大系 27 本朝文粹』卷第十、岩波書店、p. 301

²³ 前掲注 4、pp. 243-257

られたのは、『十訓抄』の編者が〈二ノ二〉を編纂する際に、既に(01)の白詩を読んで、白詩が「材と不材」説話に対する読み方に影響される可能性もないとは言えないと考える。

いずれ白詩の読み方に影響されようか、もしくは類書からの採録によって理解に欠けようか、〈二ノ二〉の「材と不材」説話に対する理解が本来の「山木①」とズレがあることは確かであろう。総じて言うと、たとえ〈二ノ二〉と「山木①」における「材と不材」説話の文面で改変が見られなくても、「材と不材」説話に対する読み方の相違によって、〈二ノ二〉は他の要素を付け加え、『莊子』「材と不材」説話を変容して受容したことが見られる。

第三節、『十訓抄』〈六ノ一〉

本節では、『十訓抄』〈六ノ一〉を取り上げ、説話の原拠『莊子』「山木」篇の記事内容との対照・比較を通して、両者の相違を考察する。

『十訓抄』「第六 忠直を存ずべき事」は、同条の小序、「主君にてもあれ、父母、親類にてもあれ、知音、朋友にてもあれ、悪しからむことをば、必ずいさむべき」とあるように、君主に直諫する姿勢こそ称えたいのが第六の教訓だと考える。また、小序でも「人の腹立ちたる時、強く制すれば、いよいよいかる。さかりなる火に少水をかけむは、その益なかるべし。しかれば、機嫌をはばかりて、和らかにいさむべし」とあるように、賢い方法で進言するのが最善だと言われる。直諫かつ賢く諫めることを例証として、〈六ノ一〉が取り上げられた。その内容は以下の通りである。

(P) 楚の襄王、晋の国をうたむとす。孫叔敖、これをいさめ申していはく、「園の楡の上に、蟬、露を飲まむとす。うしろに螻蛄のをかさむとするを知らず。螻蛄、また蟬をのみまもりて、うしろに黄雀のをかさむとするを知らず。黄雀、また螻蛄をのみまもりて、楡のもとに弓を引いて、童子のをかさむとするを知らず。童子、また黄雀をのみまもりて、前に深き谷、後に堀株のあることを知らずして、身をあやまてり。これ皆、前利のみ思ひて、後害をかへりみざるゆゑなり」と申せり。王、この時、悟りを開きて、晋を攻むといふ事、とどまり給ひぬ。

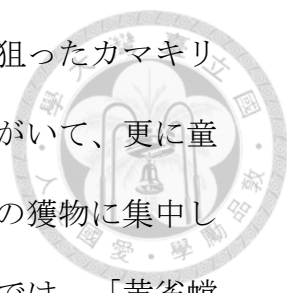
(Q) ただし、周の文王、殷の紂を討たむがために、義兵を挙げて、かの国へ向ひ給ふ時、孤竹の二子、三つの理を立てて、いさめをなすといへども、呂望がはからひにつきて、とどまり給はざりき。(R) これは紂の心、おごれるによりて、国これを背くあひだ、天授人与の時なれば、後害のかぎりにあらざるなり。

(『新編 日本古典文学全集[51]十訓抄』 pp. 211-212)

(一) <六ノ一>の内容について

『十訓抄』の<六ノ一>は「第六 忠直を存ずべき事」という条目に置かれて、『莊子』関連説話「螻蛄をねらう黄雀」(P)ともう一つ紂王に関わる中国故事(Q) (以下、「武王伐紂」の故事と記す)より成り立っている。

(<六ノ一>の(P)にて枠物語の構造が見受けられるので、表記の便宜上、(P)全体を指す場合、孫叔敖の話と記し、(P)における下線部のところを「黄雀螻蛄」説話と記す)



「黄雀螳螂」説話の概要は頗るシンプルで、楡の園で蟬を狙ったカマキリの後ろに黄雀がいて、また黄雀の後ろに弾き弓を構えた童子がいて、更に童子自身が深い谷と堀株などに囲まれているが、全員が目の前の獲物に集中しすぎて周りの危険に気付かなかった。『十訓抄』〈六ノ一〉では、「黄雀螳螂」説話を語り出したのは楚の襄王²⁴の臣下である孫叔敖で、襄王が隣国の宋を討伐しようとする事について進言するため用いたと見られる。

先ほど考察した「第六 忠直を存ずべき事」の小序を想起すると、『十訓抄』の編者は〈六ノ一〉称えたいのは孫叔敖が賢く君主に直諫する姿勢のほゞであったが、〈六ノ一〉の後半で取り上げられたのは以下のような話である。臣下である伯夷と叔齊が紂王を討伐しようとし、周の武王に諫めたが、結局それを阻止できず、しかも歴史的観点から見ると紂王が滅ぼされたといういい結果を残したと見られる中国故事が取り上げられた。まるで孫叔敖の話に対しての反論のように、編者が「武王伐紂」の故事の後で更に（R）「天授人与の時なれば、後害のかぎりにあらざるなり」という一句を付け加え、諫めずして天命に任せるケースもあったと提示した。

（二）原拠『莊子』「山木」篇の内容について

先述したように、『莊子』外篇「山木」篇は複数の説話からなるため、本節では、「黄雀螳螂」説話に関わる内容だけ取り上げて、以下に載せる。

（表記上の便宜のため、以下の部分のみを指す場合「山木⑧」と称し、本来の「山木」篇全編を指す場合は「山木」篇のままで称す。）

²⁴ 『十訓抄』において「楚の襄王」で記されたが、頭注や史実によって楚には「襄王」がいないため、恐らく「荘王」の誤りだと思われるが、本論では『十訓抄』の表記に沿う。

(P' 1) 莊周遊_二乎雕陵之樊_一。睹_下一異鵠自_二南方來者_上。翼廣七尺、目大運寸、感_二周之類_一而集_二於栗林_一。莊周曰、此何鳥哉。翼殷不_レ逝、目大不_レ覩。蹇_レ裳躩步、執_レ彈而留_レ之。睹、一蟬方得_二美蔭_一而忘_二其身_一；螳螂執_レ翳而搏_レ之、見_レ得而忘_二其形_一。異鵠從而利_レ之、見_レ利而忘_二其真_一。莊周怵然曰、噫物固相累、二類相召也。捐_レ彈而反走。虞人逐而誅_レ之。

(P' 2) 莊周反入、三月不庭。藺且從而問_レ之。夫子何為頃閒甚不庭乎。莊周曰、吾守_レ形而忘_レ身、觀_二於濁水_一而迷_二於清淵_一。且吾聞_二諸夫子_一、曰、入_二其俗_一從_二其俗_一。今吾遊_二於雕陵_一而忘_二吾身_一、異鵠感_二吾類_一、遊_二於栗林_一而忘_レ真。栗林虞人以_レ吾為_レ戮。吾所_二以不庭_一也。

(『新編 日本古典文学全集[51]十訓抄』 pp. 545-546)

『十訓抄』〈六ノ一〉における語り手の視点と違って、原拠と見なす『莊子』「山木⑧」での「黄雀螳螂」説話は、莊子本人が遭った出来事として自らで述べる話である。ある日、莊子が巨大な鵠にぶつけられ、鵠を追うためある栗林に入っていった。弾を執り、鵠を撃とうとする莊子が、横から鵠→螳螂→蟬の捕食連鎖を見て、自分もこの連鎖の一員であることに気付き、弾を捨ててその場から離れた。しかし去る時、栗林の主に出くわし、泥棒扱いされて追い出された。この出来事の後日、莊子がこの件のせいで不愉快となり、弟子が莊子に不愉快になった理由について聞いたら、莊子はその日の自分の不甲斐なさを告げた。

「黄雀螳螂」説話が後に熟語「螳螂窺_レ蟬」となって言い伝えられたと見られる。熟語「螳螂窺_レ蟬」の意味を辞書で調べると、「目前の利益に目がくらんで、危険をかえりみないたとえ。せみをねらうかまきりのうしろをすずめ


がねらい、またそのうしろを獵師がねらっていたという話による」²⁵と書かれている。その意味を「山木⑧」にあった文句で言うと、「見_レ得而忘_レ其形_一」 「見_レ利而忘_レ其真」だと伺える。しかし「山木⑧」全体の内容から見ると、莊子が述べたいことは、「螳螂窺_レ蟬」の光景を見た後に発した言葉にあり、すなわち「噫物固相累、二類相召也」だと考える。加えて最後に莊子が弾き弓を捨てて去り、自身の行動を以て「物固相累」の連鎖から離脱したと見られる。また、莊子が弟子に告げる言葉には、当時の自分が「觀_レ於濁水_一而迷_レ於清淵_一」という一句があり、要するに目の前に利害の悪循環が発生しているが、悪循環における一員に居ると状況をはっきりと把握できないと言っている。故にこそ連鎖から逃れ、循環に加えないことが得策だと示唆している。また、利害の悪循環が発生する原因は「物固相累」であり、それが必然的で免れないことなど、熟語「螳螂窺_レ蟬」だけで言い尽くせないものが「山木⑧」の中で述べられたと伺える。

(三) <六ノ一>における改変について

『十訓抄』<六ノ一>と『莊子』「山木⑧」の内容を比較し、以下は両者の相違するところを羅列して検討したい。

1. <六ノ一>と「山木⑧」の登場人物が異なる。<六ノ一>では孫叔敖から楚の襄王に「黄雀螳螂」説話を教えたが、「山木⑧」では莊子が自身の実体験を、弟子の藺且に告げる形である。

²⁵ 『新選漢和辞典 Web 版』、小学館、JapanKnowledge ジャパンナレッジ Lib、2022.01.20 閲覧

- 
2. 「黄雀螳螂」説話における捕食連鎖の順序について、〈六ノ一〉では
蝉→螳螂→黄雀→弓を執る童子、「山木⑧」では蝉→螳螂→鵲→莊子。
順序は同じであるが、鳥の種類と最後の人物が異なる。
 3. 〈六ノ一〉の「黄雀螳螂」説話は、「山木⑧」の（P' 2）の部分が無
く、代わりに（Q）の武王伐紂故事を付け加えた。

文面だけ注目しても、〈六ノ一〉は「山木⑧」とかなり食い違った作品だと思われるが、以上の三つの相違点にまとめたい。

まず一点目で取り上げた登場人物と語り手の視点について、『莊子』「山木⑧」では、莊子の経験談として一人称を用いて語り、一方『十訓抄』〈六ノ一〉では、孫叔敖が三人称の視点で「黄雀螳螂」説話を述べた。人称が変わるにつれて、〈六ノ一〉における「黄雀螳螂」説話は枠物語となり、本来の「黄雀螳螂」説話は第一層で、晋を討とうとする襄王に進言した孫叔敖の話は第二層となり、この説話が孫叔敖の話として見受けられる。既に先述したように、「第六 忠直を存ずべき事」の小序から、〈六ノ一〉は「第六 忠直を存ずべき事」の「引証」や「関連話題」²⁶として見なされる。更に〈六ノ一〉前半での（P）孫叔敖の話は、後半での（Q）武王伐紂の故事と「諫め」という要素で繋いだことから見ると、〈六ノ一〉における話題の中心はもう「黄雀螳螂」説話にないと見られる。また、本章の第二節で〈二ノ二〉を論じる時と同じく、『十訓抄』の編者によってこのような読み方に仕向けたとは思えず、編者が収録した際に、既に「黄雀螳螂」説話が孫叔敖の話となって伝承されていると考えるのが妥当だと思う。

²⁶ 前掲注 10、15

なぜかと言うと、頭注では〈六ノ一〉における「黄雀螳螂」説話が、他に『韓詩外伝』や『説苑』などの漢籍にも見られると指摘し、そこで見られた「黄雀螳螂」説話の内容も、全て杵物語で伝えられたと見られる²⁷。『説苑』における「黄雀螳螂」説話での登場人物が〈六ノ一〉とはまた別なので、ここでは『韓詩外伝』における「黄雀螳螂」説話だけを用いて考察する。

楚莊王將興師伐晉、告士大夫曰、敢諫者死無赦。孫叔敖曰、臣聞、畏鞭箠之嚴、而不敢諫其父、非孝子也、懼斧鉞之誅、而不敢諫其君、非忠臣。於是遂進諫曰、臣園中有榆、其上有蟬、蟬方奮翼悲鳴、欲飲清露、不知螳螂之在後、曲其頸、欲攫而食之也、螳螂方欲食蟬、而不知黃雀在後、舉其頸、欲啄而食之也、黃雀方欲食螳螂、不知童子挾彈丸在下、迎而欲彈之、童子方欲彈黃雀、不知前有深坑、後有窟也。此皆言前之利、而不顧後害者也、非獨昆蟲眾庶若此也、人主亦然。君今知貪彼之士、而樂其士卒。國不怠、而晉國以甯、孫叔敖之力也。²⁸（句読点は筆者により）

『韓詩外伝』は漢朝の韓嬰による、説話集と近似した書物である。『韓詩外伝』における「黄雀螳螂」説話の登場人物と内容から見ると、確かに「山木⑧」における「黄雀螳螂」説話より〈六ノ一〉と似通っていると見られる。とりわけ「臣下が君主に諫める」という要素が共通し、また同じく杵物語であると見られる。こういった点から言うと、〈六ノ一〉における「黄雀螳

²⁷ 「以下の話は『韓詩外伝』巻十に見える。ただし、『説苑』正諫では、呉王と少孺子の話」、前掲注6、p. 211。また書末の「関係説話表」によって、和書にも〈六ノ一〉の類話があるが、成立年代が『十訓抄』より遅れた『五常内義抄』であると見られる。

²⁸ 宋衛平、徐海榮主編(2015) 「韓詩外傳」巻十『文瀾閣欽定四庫全書 經部 82』、杭州出版社、p. 975

螂」説話の源は確か『莊子』「山木⑧」であるが、採録したバージョンは『韓詩外伝』を踏まえた可能性が高いと伺える。一方、『韓詩外伝』を経て「黄雀螳螂」説話が枠物語になったからこそ、〈六ノ一〉の「黄雀螳螂」説話の文面が「山木⑧」と食い違うところが多いと言えるだろう。

しかし文面がかけ離れていても、まだ『十訓抄』が『莊子』の「黄雀螳螂」説話を変容したとは言えないと考える。『莊子』「山木⑧」では、最後に莊子が採った行動、すなわち弾き弓を捨てて園から去って「見_レ得而忘_レ其形_一」「見_レ利而忘_レ其真」の状態から身を引くことが、実は孫叔敖が襄王に諫めたことと同じ意味を持っていると伺える。当時、楚國がもし晋を討伐したら、自身の周りをうまく把握できなくなり、目の前の利益だけに集中するという、「山木⑧」における莊子みたいな危うい状態に陥ると見られる。孫叔敖が、内枠の「黄雀螳螂」説話と楚の現状という外枠と重ねることによって、襄王に弾き弓を捨てて園から去った莊子を真似し、討伐を取り消しさせたい。そして孫叔敖の行いが、のちに孫叔敖の話になって『十訓抄』など様々な説話集に取り上げられ、忠直を称える教訓話として伝承した。本来の「黄雀螳螂」説話の読み方が改変されていない理由は、まさに枠物語にさせて、外枠に守られて保存されたと伺える。要するに、『十訓抄』〈六ノ一〉では、「黄雀螳螂」説話でなく、孫叔敖の話のほうを着眼したが、『莊子』「山木⑧」における「黄雀螳螂」説話の読み方を変わらずして受け容れたのである。

第四節、『十訓抄』における『莊子』関連内容の考察

第二節と第三節で考察した「材と不材」説話と「黄雀螭螂」説話以外に、『十訓抄』において他の説話ではない形で収録された『莊子』の関連内容が見られる。本節では、本章冒頭の表に基づき、『十訓抄』における他の詩文から間接引用した段落を以下で示す。

篇名	『十訓抄』の本文	出典（小学館『新編 日本古典文学全集[51]十訓抄』頭注により）	『莊子』の原拠
<三ノ十二>	黄帝の牧童の言葉を信じ、徳宗は農夫の諫めをぞいれ給ひける	『明文抄』 『ささめごと』	「徐無鬼」篇
<六ノ三十一>	前中書王の「菟裘賦」、 喪 _レ 馬之老、委 _レ 倚伏於秋草 _一 夢 _レ 蝶之公、任 _レ 是非於春叢 _一	菟裘賦 『本朝文粹』 『新撰朗詠集』	「斉物論」篇
<十ノ五十四>	清原滋藤は、その身、征夷使軍監の武芸にいたりしか	典拠未詳	「秋水」篇


	ども、文のかた、 たくみなりけり。 ある時、詩の落句 に作れり。 一文一武俱迷 _レ 道 為 _レ 我邯鄲步漸窮		
<十ノ六十七>	唐の高宗の後、則 天皇后の書き給へ るにや、 皇禹聞泉台之声、 遂登仙録 <u>帝軒張洞庭之楽</u> 、 早叶真源	典拠未詳	「天運」篇

表3 『十訓抄』における『莊子』の関連内容（詩文のみ）及び出典

詩文原拠の欄で示した内容は、『十訓抄』の原文に基づいたため、明記されていなかった場合はそのまま明記されないこととする。本節では、それぞれの関連内容を取り上げ、詩文の原拠（もしある場合）及び原拠と見なす『莊子』の内容を用いて考察を進めていく。

(一) <三ノ十二> 「黄帝の牧童の言葉」

『十訓抄』<三ノ十二>は「第三 人倫を侮らざる事」の条目に置かれ、たとえ身分の低いものも侮るべからずという教訓を説いた。<三ノ十二>では、漢の高祖が天下統一の偉業を成し遂げたものの、黥布という身分の低い

家臣を討伐する時にうっかり命を失ったということを述べている。「第三
人倫を侮らざる事」の「関連話題」²⁹に属したと考える。〈三ノ十二〉の構造
としては、高祖の頓死故事の後で、「智者も千慮に必ず一失有り、愚者も千
慮に必ず一得有り」という諺の道理を述べ、最後に「智者は空門を破り」

「聖人は藹藹にはかる」、及び『莊子』関連内容の「黄帝の牧童の言葉を信
じ」を取り上げ、それぞれ仏教、儒家、道家の経典から一言引いた形で教訓
性を強めた。「黄帝の牧童の言葉を信じ」という句は『莊子』「徐無鬼」篇
が原拠と見なされるが、〈三ノ十二〉では引用元を明記していない。「黄帝
の牧童の言葉を信じ」という句に対して、小学館『新編 日本古典文学全集
[51]十訓抄』の頭注では『明文抄』巻二の「黄帝、まさに大隗を具茨の野に
見んとす。牧馬童子いはく〈莊子〉」と「黄帝は牧童の詞をも信じ給へり」
(ささめごと)」を記す³⁰。恐らくこの一文は〈三ノ十二〉における他の引用
文句と同じく、当時の類書からの孫引きだと考えられる³¹。

『明文抄』における「黄帝の牧童の言葉を信じ」という一句に関する記述
は「黄帝将見大隗乎具茨之山（野）、…牧馬童子…曰、若乘日之車、而遊於
襄城之野。…小童・（又）曰、夫、為天下者、亦爰以異乎牧馬者哉。亦去其
害馬者而已。〈莊子〉」³²とあるように、頗る簡略な内容で全体の意味が捉え

²⁹ 前掲注 10、15

³⁰ 前掲注 6、p. 137

³¹ 〈三ノ十二〉における他の引用文句である「賢人も万慮に一失あり。愚かなるものも千慮に一徳あり」に対して、頭注二六は「当時の諺。「漢書云はく、智者も千慮に必ず一失有り、愚者も千慮に必ず一得有り」（世俗諺文上）。」と記す。

「智者は空門を破り」に対して、頭注二九は「法に空門大悟の心をも猶有所得とおとす」（ささめごと）。」と記す。

「聖人は藹藹にはかる」に対して、頭注三〇は「先民言有りて藹藹に詢る〈毛詩〉」（明文抄・巻四）」と記す。前掲注 6、pp. 136-137

³² 山内洋一郎(2012)「復元明文抄 二 帝道部下」『本邦類書玉函秘抄. 明文抄. 管蠡抄の研究』、汲古書院、p. 229

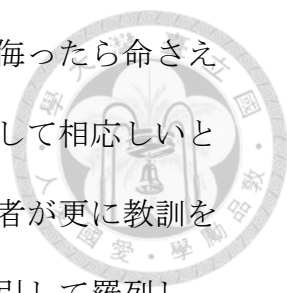
にくいと伺える。以下は、原拠となる『莊子』「徐無鬼」篇の当該内容を示す。



黃帝將見大隗乎具茨之山。方明為御、昌寓駟乘、張若・謔朋前馬、昆閻・滑稽後車。至於襄城之野。七聖皆迷、無所問途。適遇牧馬童子、問塗焉。曰、若知具茨之山乎。曰、然。若知大隗之所存乎。曰、然。黃帝曰、異哉小童、非徒知具茨之山、又知大隗之所存。請問為天下。小童曰、夫為天下者、亦若此而已矣。又奚事焉。予少而自遊於六合之內。予適有瞽病。有長者教予曰、若乘日之車、而遊於襄城之野。今予病少痊。予又且復遊於六合之外。夫為天下亦若此而已、予又奚事焉。黃帝曰、夫為天下者、則誠非吾子之事。雖然、請問為天下。小童辭。黃帝又問。小童曰、夫為天下者、亦奚以異乎牧馬者哉。亦去其害馬者而已矣。黃帝再拜稽首、稱天師而退。

((『新釈漢文大系第8巻 莊子下』 pp. 526-527) pp. 633-634)

その内容がほぼ黄帝と小童との問答で構成されたと見られ、最初は黄帝と七人の聖が具茨之山へ行く道に迷い、そこで通り過ぎた牧馬童子に道を尋ねた。また、牧馬童子は、黄帝一行が向かおうとする具茨之山への道だけを知るのではなく、一行本来の目的、大隗を見ようとする、その大隗の居場所も知っている。そのため、黄帝は小童に刮目し、更に小童に様々な質問を投げかけ、全てを巧妙に答えた小童に対して黄帝は感服した。最後に、黄帝が小童を天師と尊び、尊敬の態度を取った場面で話が終わる。



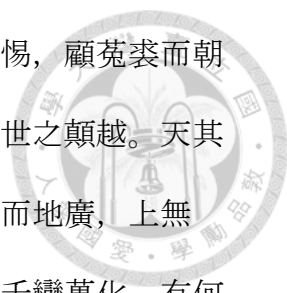
＜三ノ十二＞の主幹となる高祖の話では、身分が低い者を侮ったら命さえなくなるので、「第三 人倫を侮らざる事」の教訓の例証として相応しいと考えられる。そして、例証を一つ挙げた後、『十訓抄』の編者が更に教訓を強調するため、仏、儒、道それぞれの経典から関連文句を援引して羅列した。『莊子』の関連内容、すなわち黄帝と小童の話を「黄帝の牧童の言葉を信じ」という一句に要約されるが、原拠で記された内容と趣旨が合致すると見られる。要するに、＜三ノ十二＞における『莊子』の関連内容は、類書を通しての引用かもしれないが、『十訓抄』の編者が「人倫を侮らざる事」という教訓を強調できるものとして、原拠『莊子』の趣旨をきちんと受け容れての使用だと考える。

(二) ＜六ノ三十一＞「蝶を夢見る翁」

『十訓抄』＜六ノ三十一＞では、まず前半で「塞翁が馬」の説話について述べ、最後に前中書王の「菟裘賦」の文句を引用して締め括った。

「菟裘賦」は醍醐天皇の皇子である前中書王、即ち兼明親王による漢文で、『十訓抄』＜十ノ一＞にも関連の説話を所収していて、『十訓抄』の編者が兼明親王の才芸を慕いつつ、彼の境遇に不憫に思う姿勢を表したと見られる。「菟裘賦」の原文を以下に載せる。

余龜山之下，聊卜幽居。欲辭官休身，終老於此。逮草堂之漸成，為執政者，枉被陷矣。君昏臣諛，無處于愬。命矣天也。後代俗士，必罪吾以不遂其宿志。然魯隱飲營菟裘之地而老，為公子翬所害。春秋之義，贊成其志，以為賢君。後來君子，若有知吾者，無隱之焉。因擬賈生鵬鳥賦，作菟裘賦以自廣。其詞曰。

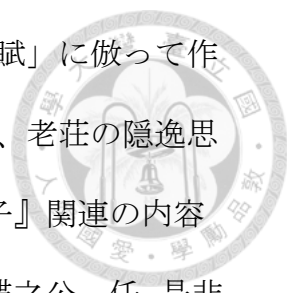


赤奮若歲，清和之月，陟彼西山，言採其蕨。吟鵬賦而夕惕，顧菟裘而朝發。昔隱公之逢害也，誠在天之棄魯。今我之不肖也，何遭世之顛越。天其何言乎，四時行，百物成，問之不言，請對以情。惟夫天高而地廣，上無始，下無極。萬物云生，或消或息，風雨陶冶，寒暑迴薄，千變萬化，有何常則。禍福相須，憂喜不定，榮枯同枝，歌哭同徑。下學人事，上達天命。不憂不喜，其唯上聖歟。伯夷得仁而飢，彼無奈其。盜跖以壽而終，是亦若為。箕子囚繫，比干傷夷，天之與善，其信未知。故柳下三黜而不悔，子仲長往而無歸。況今趙高指鹿之日，梁冀跋扈之時，虎而冠兮，匪常理之可謂。梟也鏡兮，寧彝倫之所資。夫劔戟者嫌於柔，不嫌剛而摧折，梁棟者取於直，不取撓而傾危。往哲舉措，無有磷緇，不歡其醜。雖孤漁父之誨，不容何病，可祖顏子之詞。亦夫世有治亂，時有否泰，命有通塞，跡有顯晦。

扶桑豈無影乎，浮雲掩而乍昏，藜藿豈不芳乎，秋風吹而先敗。彼尼父之一望也，歎龜山之蔽魯。靈均之五顧也，繞沅湘而傷楚。欲問明訓於先賢，以鑑幽致於萬古。唐風雖移，猶依稀於舊，漢德縱厭，安諂諛於新。殊恨王風之不競，直道之已湮。聞淫蛙而長歎，悲屈蠖之不伸。俟河清日，浮雲幾春。凡人在世也，殆花上之露，如空中之雲，去留無常，生滅不定，聚散相紛，沕穆糾錯，何可勝云。不語靡言，便是淨名翁之病。知者默也，寧非玄元氏之文。喪馬之老，委倚伏於秋草。夢蝶之翁，任是非於春叢。冥冥之理，無適無莫，如如之義，非有非空。

嗟乎！文王早歿，吾何之隨。已矣已矣，命之衰也。吾將入龜緒之巖隈，歸菟裘而去來。³³

³³ 前揭注 22、卷第一「兔裘賦並序」、p. 129



「菟裘賦」冒頭の序文で示したように、これは賈誼の「鵬鳥賦」に倣って作ったもので、作者兼明親王が自身の境遇について心境を語り、老荘の隱逸思想に近づくような文章だと思われる³⁴。中に用いられた『莊子』関連の内容は、『十訓抄』〈六ノ三十一〉によって切り取られた「夢蝶之公、任是非於春叢」以外に、「盜跖」篇と「漁父」篇について言及する文句も見られる。

要するに、〈六ノ三十一〉では「塞翁が馬」の話を締めくくるには、老荘思想が濃厚である「菟裘賦」の文句を用いたと見られる。加えて「夢蝶之公、任是非於春叢」という一句は『莊子』から出典したもので、〈六ノ三十一〉が老荘思想を満ちた一章段だと言えるだろう。『十訓抄』の編者が「夢蝶之公、任是非於春叢」と前句の「喪馬之老、委倚伏於秋草」と併せて切り取ったのも、恐らくこの点を意識したからであり、〈六ノ三十一〉で『莊子』関連の内容をそのまま受け容れることにしたと見られる。

(三) 〈十ノ五十四〉「邯鄲の歩み」

『十訓抄』の編者は「第十 才芸を庶幾すべき事」で、詩歌管弦に関する説話を大量に集め、編者の文才と芸能への憧れを際立たせる一章だと見られる。〈十ノ五十一〉から〈十ノ五十三〉まで、今様による往生、漢詩による往生、また和歌による往生の数奇往生説話を順番に並べて記した。その続きとした〈十ノ五十四〉では、まず中国の將軍李広の武芸を称え、一方「それしも文を兼ね、歌を好むたぐひ、いとどいみじくこそ」に転じ、文武両道の思想を掲げた。そして日本側の文武両道代表も〈十ノ五十四〉で取り上げら

³⁴ 「貞元二年(977)藤原兼通の謀略によって親王に復し二品中務卿の閑職に遷る。この時作られた「菟裘賦」は古来激賞されたが、その後嵯峨の山荘に移り悠々自適の生活を送った。」「作者解説」、前掲注 22、p. 385

れ、武将である清原滋藤によって著し、『莊子』の関連内容を用いた漢詩文を引用した。

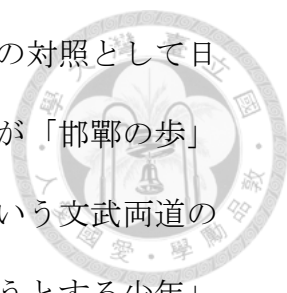
清原滋藤の詩で言及した「為_レ我邯鄲歩漸窮」は『莊子』「秋水」篇から出典したもので、原拠の内容を節録して以下に載せる。

子獨不_レ聞_三壽陵餘子之學_二行於邯鄲_一與。未_レ得_二國能_一、又失_二其故行_一矣、直匍匐而歸耳。今子不_レ去、將_下忘_二子之故_一失_中子之業_上。

(『新釈漢文大系第8巻 莊子下』p. 483)

『莊子』「秋水」篇の節録内容を概略で言うと、邯鄲へ行って歩き方を学ぼうとする壽陵の少年が、挙句の果て邯鄲の歩き方を身に付けず、更に本来の歩き方も忘れてしまい、這って帰国することになったと記されている。『莊子』「秋水」篇では、「邯鄲の歩」の話を出したのは魏牟という人物で、彼は公孫龍という名家の学者に言い返すために、『莊子』思想を理解しようとする公孫龍の試みを嘲笑った。

本来「秋水」篇での「邯鄲の歩」の話は、別分野に簡単に踏み込むべからずと言う意味を述べているが、『十訓抄』<十ノ五十四>では文武両道を讃える文脈において引用される。『十訓抄』<十ノ五十四>で引用された清原滋藤の詩文の内容を見ていくと、文武両道で称えられた清原滋藤自身が、本当は文武とも極め得ず、まるで邯鄲の歩き方を学ぼうとする少年のように、謙遜を表した一文だと見られる。『十訓抄』<十ノ五十四>において、清原滋藤の詩文を引用する前後に、編者が付け加えた評論が見られず、ただ清原滋藤の詩文を挙げた後で、清原滋藤の文才を表す故事を載せた。先述の通

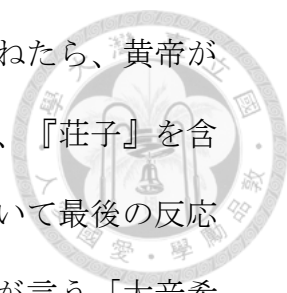


り、〈十ノ五十四〉は元々李広という中国の将軍を挙げ、その対照として日本の武将清原滋藤について言及した。故に『十訓抄』の編者が「邯鄲の歩」の話を用いた際に、まず強調したいのはやはり清原滋藤という文武両道の人物だと見られ、次に彼が自身のことを「邯鄲の歩みを学ぼうとする少年」と謙遜するぐらい高尚な気品の持ち主であることを挙げたいと考える。要するに、『十訓抄』〈十ノ五十四〉では、『莊子』の関連内容「邯鄲の歩」を孫引きで使用したが、清原滋藤の謙遜の言葉として用いられるので、原拠『莊子』の読み方を変わずして受容したと見受けた。

(四) 〈十ノ六十七〉「洞庭の樂」

『十訓抄』〈十ノ六十七〉では、音楽に関する内容を述べ、本段以前に既に琴、笛などの楽器に関わった説話が述べられ、音楽の習熟は為政者が備えるべき美德として読者に説いた。〈十ノ六十七〉は冒頭で、簫を愛する弄玉と、笛を好む王喬という二人の貴族が上仙した話が述べられる。音楽を習熟した二人が上仙することを通して、管絃と仙人の世界と結び付き、続いて大江以言と則天皇后の詩文を引用し、中国上代の黄帝、舜、禹が音楽と繋がったモチーフを取り上げて管絃の徳を強調した。

〈十ノ六十七〉において、編者が則天皇后の作だと記された『莊子』関連の内容「帝軒張_レ洞庭之樂_一」は、『莊子』外篇の「天運」篇における文句、「帝張_レ咸池之樂於洞庭之野_一」と見られるが、則天皇后の作と見なす出典が見当たらない。「天運」篇で「帝張_レ咸池之樂於洞庭之野_一」に関する内容を概略で言うと、黄帝の臣下である北門成という人物が、黄帝が洞庭の原野で奏でた咸池の樂を聞き、以下の反応があった。北門成はまず恐ろしいと感じて、次に体がだるくなり、最後に何も聞こえなくなって惑ってしまったと言



われる。北門成が黄帝に、その一連の反応の原因について尋ねたら、黄帝が自分の奏でた曲の奥深さについて教えた。黄帝の説明の中で、『莊子』を含む老莊思想が含まれたと見られる。例えば北門成が音楽を聞いて最後の反応は、音が聞こうとしたが聞こえないことについて、『老子』が言う「大音希聲」（徳経「同異第四十一」）と一致し、『莊子』「天運」篇でも「聽之不能聞其聲、視之不能見其形。充滿天地、苞裹六極」と描写されるように、耳で音が聞こえないだけで、本当は音が天地に満ち溢れていると言っている。

『莊子』ではよく「天」という言葉を用い、「天運」篇の「天」もそうだが、実際その「天」は仙人が住んでいる「天界」と一緒にするべきかどうか、まだ学界で意見が分岐すると思われる。しかし<十ノ六十七>での用い方から見ると、則天皇后作と言われる詩文「帝軒張洞庭之樂」で、黄帝が音楽を奏でる場所すなわち洞庭＝「天界」だと見られ、黄帝も<十ノ六十七>で仙人として見做されたと見られる。要するに、<十ノ六十七>では、ただ上仙することと音楽の繋がりを強調し、「天運」篇で用いられた黄帝と張洞庭之樂をモチーフとして切り取ったが、「天運」篇で書かれた思想内容について一切触れていなかった。この場合、<十ノ六十七>における『莊子』関連内容は、受容と変容も関わらずして、ただの無関係な引用であると判断できる。

まとめ



本章では、まず第一節で『十訓抄』の编者についての討論を踏まえ、未だに编者の正体は不明だと分かったが、序文の考察を通して、『十訓抄』の編纂目的及び採録意図を確かめた。その考察結果を以下に載せる。

①『十訓抄』の编者は「若い奉公人に正しい処世術を教えたい」という明確な編纂意図を以て『十訓抄』を編纂した。

②编者は前述の「若い奉公人」が「身に付くべき教養」という選別基準を以て、類書や典籍から説話の材料を取捨選択し、『十訓抄』を編纂すると考えられる。

第二節では『十訓抄』〈二ノ二〉と『莊子』「山木」篇の「山木①」における「材と不材」説話の内容をそれぞれ考察し、そして対照・比較した。結論から述べると、〈二ノ二〉と「山木①」それぞれの「材と不材」説話は、文面は大差がなく、ただし読み方には相違が見られる。『十訓抄』〈二ノ二〉では、白居易の詩文の読み方に影響を受け、「材と不材」説話に対して所引した白詩が用いる読み方を受け継いだと見られる。それに従って、〈二ノ二〉が编者によるまえがきと「材と不材」説話に対する感想を以て、「材と不材」説話の読み方を改変した。本来『莊子』「山木①」の読み方との相違が見受けられるため、〈二ノ二〉での『莊子』関連説話が変容したと伺える。

第三節では、『十訓抄』〈六ノ一〉と『莊子』「山木」篇の「山木⑧」における「黄雀螳螂」説話の内容をそれぞれ考察し、対照・比較した。『十訓抄』〈六ノ一〉における「黄雀螳螂」説話は、『韓詩外伝』における「黄雀螳螂」説話のように、既に杵物語「孫叔敖の話」となっていると見られる。更に

『十訓抄』〈六ノ一〉は、孫叔敖の話の後で武王伐紂の故事で繋いで、〈六ノ一〉における話題の焦点を「黄雀螿螂」説話から逸らした。一方、杵物語「孫叔敖の話」の一部になった「黄雀螿螂」説話が、『莊子』「山木^⑧」における「黄雀螿螂」説話の読み方が保留されるため、〈六ノ一〉は「孫叔敖の話」と共に「黄雀螿螂」説話を受け容れたと見なす。

第四節では、『十訓抄』における説話以外の『莊子』関連内容を考察し、それぞれ引用された詩文の原拠、及び『莊子』における関連箇所の内容と対照・比較した。以下二通りの使用状況に分けられると考える。

(1) 他の詩文を介在しながら、『莊子』原拠の精神を受け容れたままの使用：〈三ノ十二〉、〈六ノ三十一〉、〈十ノ五十四〉

(2) 他の詩文を介在し、『莊子』原拠とほぼ無関係なままでの使用：〈十ノ六十七〉

計四例の中で、一例が『莊子』とはほぼ無関係な内容で、他は引用された詩文と共に、『十訓抄』が受け容れたと見られる。

第二章の小結として、『十訓抄』に見られる六例の『莊子』関連説話・詩文では、変容が見受けられるのは〈二ノ二〉「材と不材」説話のみだと判明する。一方、〈六ノ一〉「黄雀螿螂」説話・〈三ノ十二〉・〈六ノ三十一〉・〈十ノ五十四〉などは他の作品を介在しながらも、原拠『莊子』の精神を受け継ぎ、『莊子』の思想を受け容れたものだと伺える。

第三章、『宇治拾遺物語集』『十訓抄』における『莊子』関連説話の同話・

類話

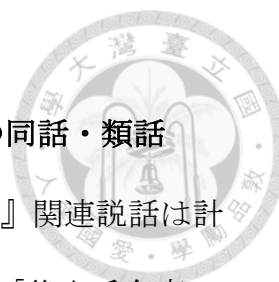


はじめに

本論の序章でも紹介した今成元昭氏が、「一つの説話が、いくつかの説話集や物語の類に散見するという例を見るのは、口承・書承の別を問わず説話が伝承された証拠であるとされる。説話の伝承者は、(中略)享受した説話を素材として、新たな自分なりの説話に構築しなおし、それによって主体的な説示を行おうとしているのである。たとえ説話の全貌が形態的にはほとんどそのまま伝えられているという、いわゆる同文的同話にあっても伝承者は、享受した説話の総体を、自分の中に芽生えた説示意識を表出するに適した素材としてそっくり選びとり、それをもって新たな説示を行なっているのである」¹と言い、たとえ同一の説話、いわゆる同文的同話であっても、異なる伝承者の手によると異なる風貌が現れると述べた。

本論の第一章と第二章では、既に『宇治拾遺物語』と『十訓抄』における『莊子』関連内容をそれぞれ考察し、所収した『莊子』関連内容が受容されたのか、もしくは変容させたのかを明らかに判明したが、これらの『莊子』関連内容、特に『莊子』関連説話がどのように伝承されてきたのかを更に広い視野から見渡したいと考える。故に本章では、第一章と第二章で考察した『宇治拾遺物語』と『十訓抄』における『莊子』関連説話を中心に、他の説話集における、『宇治拾遺物語』と『十訓抄』の『莊子』関連説話の同話・類話を取り上げて考察していきたい。

¹ 今成元昭(1984)「説話と説話文学」『研究資料日本古典文学③説話文学』、明治書院、p. 5



第一節、『宇治拾遺物語』における『莊子』関連説話の同話・類話

本論の第一章で考察した『宇治拾遺物語』における『莊子』関連説話は計三話で、第九〇話の「帽子叟与孔子問答事」、第一九六話の「後之千金事」と第一九七話の「盗跖与孔子問答事」である。本論では、小学館のテキストの付録における「関係説話表」²を参考に、同話と類話・関連話について以下の表を作成して示す。

説話番号・ 巻一話順・標題	同文話	類話・関連話
九〇 六一八 帽子の叟、孔子と 問答の事	『今昔物語集』一〇一一〇 「孔子逍遙、値栄啓期間語第十」	『莊子』雜篇「漁父」 『淮南子』九 『説苑』一七
一九六 十五一十一 後の千金の事	『今昔物語集』一〇一一一 「莊子、請 [□] 粟語第十一」	『莊子』雜篇「外物」 『説苑』一一
一九七 十五一十二 盗跖と孔子と問答 の事	『今昔物語集』一〇一一五 「孔子、為教盗跖行其家怖返語第十五」	『莊子』雜篇「盗跖」

表5 『宇治拾遺物語』における『莊子』関連説話の同文話・類話

²三木紀人・浅見和彦校注(1990)「関係説話表」『新 日本古典文学大系[42]宇治拾遺物語 古本説話集』、岩波書店、P. 541-545



表5で示したように、『宇治拾遺物語』の第九〇話・第一九六話・第一九七話と同文話を持ったのは『今昔物語集』のみと見られる。『今昔物語集』における三話のタイトルはそれぞれ「孔子逍遙、値栄啓期間語第十」、「莊子、請[□]栗語第十一」、「孔子、為教盜跖行其家怖返語第十五」であり、全て震旦部の卷十に収録されている。以下では『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』の『莊子』関連説話三話をそれぞれ対照・比較していく。

(一) 『宇治拾遺物語』第九〇話「帽子叟与孔子問答事」の同話『今昔物語集』卷十「孔子逍遙、値栄啓期間語第十」

『今昔物語集』卷十「孔子逍遙、値栄啓期間語第十」の内容は以下の通りである。

今昔、震旦ニ孔子、[□]云フ所ニ、林ノ中ノ岳ノ有ル所ニ行テ逍遙シ給ケリ。孔子ハ、琴ヲ弾キ給ウ。弟子十余人許ヲ引将テ、廻ニ令居メテ文ヲ令読ム。

其ノ時ニ、海ヨリ小船ニ乗タル翁ノ帽子ヲ着タル、漕ギ来テ、船ヲ葦ニ繫テ陸ニ登テ、杖ヲ突テ来テ、孔子ノ弾キ給フ琴ノ調ベノ畢ルヲ聞ク。孔子ノ弟子等、此ノ翁ヲ見テ怪シビ思フ間ニ、翁、弟子一人ヲ招ク。然レドモ、弟子等、目不見係ズシテ不行ズ。翁、強ニ招ク時ニ、一人ノ弟子寄りヌ。翁、弟子ニ問テ云ク、「此ノ琴弾キ給フ人ハ誰ソ。若シ、国ノ王カ」ト。弟子ノ云ク、「国ノ王ニモ非ズ」ト。翁ノ云ク、「然ラバ、国ノ大臣カ」ト。弟子ノ云ク、「大臣ニモ非ズ」ト。翁ノ云ク、「然ラバ、国ノ司カ」ト。弟子ノ云ク、「国ノ司ニモ非ズ」ト。翁ノ云ク、「然ラバ何人

ゾ」ト。弟子ノ云ク、「只、国ノ賢キ人トシテ公ノ宥ヲ直シ、悪キ事ヲ止
メ、善キ事□□□□人也」ト。翁、此ヲ聞テ疵咲テ云ク、「此レ、極タル
嗚呼人也」ト云テ、去ヌ。

弟子、翁ノ言ヲ聞テ、帰テ孔子ニ此ノ事ヲ語ル。孔子、此レヲ聞テ云
ク、「其レハ、極タル賢キ人ニコソ有ナレ。速ニ可呼還シ」ト。弟子、走
リ行テ、翁ノ今、船ニ乗テ既ニ漕ギ出ヅルヲ呼ビ還ス。翁、被呼テ、還テ
孔子ニ会ヌ。

孔子、翁ニ云ク、「君、何人ゾ」ト。翁ノ云ク、「我レ、何人ニモ無
シ。只、船ニ乗テ心ヲ行サムガ為ニ、罷リ行ク翁也。亦、君ハ何事ヲ役ト
シ給フ人ゾ」ト。孔子ノ云ク、「己ノレハ世ノ宥ヲ直シ、悪キ事ヲ止メ、
善キ事ヲ行ハムガ為ニ罷リ行ク者也」ト。翁ノ云ク、「其レ、極テ墓無キ
事也。世ニ蔭ヲ厭フ人有リ。晴ニ出デ、蔭ヲ離レムト走ル時ニハ、蔭ヲ離
ル、事無シ。蔭ニ寄テ心静ニ居ナバ蔭ハ可離キニ、然ハ為ズシテ、晴ニ出
デ、離々レムト為ル時ニハ、身ノカコソ尽レドモ、蔭離ル、事無シ。亦、
犬ノ死骸、水ニ流レテ下ル。此レヲ要シテ走ル者有リ。即チ、水ニ溺レテ
死ヌ。然レバ、此等ノ譬ノ如ク、此レ、極テ益無キ事也。只、可然キ所ニ
居所ヲ示テ、静ニ一生ヲ被送ラレム。此レ、此ノ生ノ望也。而ルニ、其ノ
事ヲ不思ズシテ、心ヲ世々ニ染メテ被騒ル、事、極テ墓無キ事也。我が身
ニハ三ノ樂有リ。人ト生タル、此レーノ樂也。人ニ男女有リ。而ルニ、男
ト生レタル、此レ二ノ樂也。我レ、今、年九十五ニ成ル、此レ三ノ樂也
ト云テ、孔子ノ答ヲ不聞ズシテ、還リ行テ、船ニ乗テ漕ギ出デ、去ヌ。

孔子、其ノ漕ギ行ク翁ノ後ヲ見テ、二度ビ礼シ給フ。船ニ乗テ行ク棹ノ音不聞ズ成ルマデ礼ミ入テ居給ヘリ。棹ノ音不聞ズ成ヌル後ニゾ、車ニ乗テ還リ給ヒケル。此ノ翁ノ名ヲバ榮啓期トナム云ヒケルト人ノ語り伝ヘタルトヤ。

(『新 日本古典文学大系[34]今昔物語集二』 pp. 315-317)

(下線部は筆者により、『宇治拾遺物語』と食い違う部分を示す)

『今昔物語集』「孔子逍遙、値榮啓期間語第十」と『宇治拾遺物語』「帽子叟与孔子問答事」が同文話であるため、内容趣旨がほぼ一致すると認められる。しかし表現面から見ると、『今昔物語集』は『宇治拾遺物語』より叙述量が多く、孔子が弟子との宴や翁が弟子を招いて会話する場面など、情景を細かく叙述する傾向が窺える。それ以外に著しい相違点を取り上げると以下の二点である。

1. 翁の呼称について、『今昔物語集』では「翁」「榮啓期」と記されるが、『宇治拾遺物語』では「漁父」「帽子叟」と記されるという違いが見られる。
2. 『今昔物語集』における翁の説教内容では、「我ガ身ニハ三ノ樂有リ」について言及する段落が見られるが、『宇治拾遺物語』には見られない。

まず一点目に関して、『今昔物語集』における説話のタイトルでは、「榮啓期」という名前を用い、説話の末尾の地の文でも「此の翁の名をば、榮啓期となむ云ひける」と記した。しかし本論の第一章で『莊子』「漁父」篇の内容を考察したように、「榮啓期」という名前が『莊子』では言及されていない

いと言われる。『新 日本古典文学大系[34]今昔物語集二』の頭注によると、上記の二点目で挙げた「三楽説」について「以下の三楽説、宇治拾遺なし。列子、孔子家語、明文抄などにあり」と記載され³、『列子』『孔子家語』『明文抄』にも「三楽説」に関する記述があると示した。『明文抄』の成立時間は『今昔物語集』以降になり、『今昔物語集』に与える可能性が低い⁴ため、以下では『列子』と『孔子家語』の内容のみ考察する。

まず『列子』「天瑞」篇での「三楽説」に関する内容は以下の通りである。

孔子遊_レ於大山_一。見_二榮啓期行_一乎_レ郕之野_一。鹿裘帶_レ索、鼓_レ琴而歌。孔子問曰、先生所_レ以樂_一、何也。對曰、吾樂甚多。天生_二萬物_一、唯人為_レ貴。而吾得_レ為_レ人。是一樂也。男女之別、男尊女卑。故以_レ男為_レ貴、吾既得_レ為_レ男矣。是二樂也。人生有_レ不_レ見_二日月_一、不_レ免_二襁褓_一者。吾既已行年九十矣。是三樂也。貧者士之常也、死者人之終也。處_レ常得_レ終、當_二何憂_一哉。孔子曰、善乎、能自寬者也。⁴

一方、『孔子家語』「六文」篇での「三楽説」に関する内容は以下の通りである。

孔子遊_レ於泰山_一、見_二榮聲期行_一乎_レ郕之野_一。鹿裘帶索、鼓_レ琴而歌。孔子問曰、先生所_レ以_レ為_レ樂者何也。期對曰、吾樂甚多。而至者三。天生_二萬

³ 小峯和明校注(1999)『新 日本古典文学大系[34]今昔物語集二』、小学館、p. 317

⁴ 下線部は筆者により。小林信明(1967)「天瑞第一」『新釈漢文大系第 22 卷 列子』、明治書院、p. 36

物_一、唯人為_レ貴。吾既得_レ為_レ人。是一樂也。男女之別、男尊女卑。故人以_レ男為_レ貴。吾既得_レ為_レ男。是二樂也。人生有_下不_レ見_一日月_一、不_レ免_一襁褓_一者_上。吾既以行年九十五矣。是三樂也。貧者士之常、死者人之終。處_レ常待_レ死。當_一何憂_一哉。孔子曰、善哉。能自寬者也。⁵

『列子』と『孔子家語』の記述を踏まえると、両者が極めて近似すると見られるが、孔子と会話する相手について、『列子』では「榮啓期」と表記し、『孔子家語』では「榮聲期」と表記されると見られる。また、三番目の樂の例として、『列子』では「行年九十」とあるが、『孔子家語』では「行年九十五」とあるような違いが見られる。

『列子』と『孔子家語』における「三樂説」の内容では、『今昔物語集』「孔子逍遙、值榮啓期聞語第十」と同じ、孔子と榮啓期（榮聲期）と会話する要素が見られるが、『今昔物語集』と違って、船漕ぎや孔子の弟子たちとの場面がなく、代わりに榮啓期（榮聲期）が野原で琴を弾いて逍遙しているという首尾が全く異なった説話だと言える。

一方、「三樂説」と榮啓期という名前は、『宇治拾遺物語』の「帽子叟与孔子問答事」で見られず、更に原拠である『莊子』「漁父」篇でも見られない。しかしそれ以外の『今昔物語集』「孔子逍遙、值榮啓期聞語第十」の説話内容は、『宇治拾遺物語』「帽子叟与孔子問答事」と概ね一致し、つまり「三樂説」と榮啓期の部分だけ明らかに相違すると見られる。その理由について、もしくは『今昔物語集』が独自で「三樂説」と榮啓期の要素を取り入れ、原拠『莊子』「漁父」篇の説話の後に付け加えたのか、または『宇治拾

⁵ 宇野精一(2008)「六本 第十五」『新釈漢文大系第53巻 孔子家語』、明治書院、p. 211

遺物語』が本来あったはずの「三楽説」と栄啓期を削減したのか、多様の可能性があると推測する。

本節では、序章で紹介した池上洵一氏の論著で『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』、「両者の背後に共同母体的な資料の存在を予想すべき」⁶と主張する点を踏まえて考えると、『宇治拾遺物語』が「三楽説」と栄啓期の話を削減し、説話の焦点を漁父の話のみに絞るという可能性を支持したい。

要するに、『今昔物語集』「孔子逍遥、値栄啓期間語第十」では『列子』或いは『孔子家語』における「三楽説」と栄啓期の要素を有し、原拠『莊子』「漁父」篇にある内容と結びついたため、『宇治拾遺物語』第九〇話「帽子叟与孔子問答事」に見られない『莊子』「漁父」篇のもう一種の変容だと見做さない。

(二) 『宇治拾遺物語』第一九六話「後之千金事」の同話『今昔物語集』卷十「莊子、請[□]粟語第十一」

『今昔物語集』卷十「莊子、請[□]粟語第十一」の内容は以下の通りである。

今昔、震旦ノ周ノ代ニ莊子ト云フ人有ケリ。心賢クシテ悟リ広シ。家極テ貧クシテ貯フル物無シ。

而ル間、今日可食キ物絶ヌ。心ニ思ヒ煩フ間ニ、其ノ隣ニ[□]ト云フ人有リ。其ノ人ニ、今日可食キ黄ノ粟ヲ請フニ、[□]云ク、「今五日ヲ経テ、我ガ家ニ千両ノ金ヲ得ムトス。其ノ時ニ在マセ。其ノ金ヲ進ラム。何

⁶ 池上洵一(1983)「震旦説話の変容—説話の莊子—」『新版 今昔物語の世界—中世のあけぼの—』、以文社、p. 193

デカ、然カ止事無ク賢ク在マス人ニ、今日食フ許ノ粟ヲバ進ラム。還テ我ガ為ニ可恥辱シ」ト。

莊子ノ云ク、「我レ一日、道ヲ行キシ間ニ、忽ニ後ニ呼ブ音有リ。見還テ見ルニ、呼ブ人無シ。怪シト思テ吉ク見レバ、車ノ輪ノ跡ノ窪ミタル所ニ大キナル鮒一有リ。見レバ、生キテ動き迷フ。「何ゾノ鮒ニカ有ラム」ト思テ、寄テ吉ク見バ、水少許リ有ル所ニ鮒生キテ動ク。我レ、其ノ鮒ニ問テ云ク、「何ゾノ鮒ノ此ニハ有ルゾ」ト。鮒答テ云ク、「我レハ此レ、河伯神ノ使トシテ、高麗ニ行ク也。我レハ、東ノ海ノ波ノ神也。而ルニ、不意ニ飛ビ誤テ、此ノ窪ミニ落テカクテ有ル也。水少クシテ喉乾テ、我レ既ニ死ナムトス。『我レヲ助ケヨ』ト思テ、君ヲ呼ツル也』ト。

我レ云ク、「今三日ヲ経テ、ト云フ所ニ遊バムガ為ニ、我レ行ムトス。其ノ所ニ汝ヲ将行テ放タム」ト云ヘバ、鮒ノ云ク、「我レ、更ニ三日ヲ不可待ズ。只、今日一滯ノ水ヲ令得テ、先ヅ喉ヲ潤ヘヨ」ト云シカバ、鮒ノ云フニ随テ一滯ノ水ヲ与ヘテナム助ケテシ。然レバ、彼ノ鮒ノ云シガ如ク、我ガ今日ノ命、物不食ズシテハ更ニ不可生ズ。後ノ千金、益不有ジ」ト云ヒケリ。

其ノ時ヨリ、「後ノ千金」ト云フ事ハ如此ク云フ也トナム語り伝ヘタルトヤ。

(『新 日本古典文学大系[34]今昔物語集二』 pp. 317-319)

(下線部は筆者により、『宇治拾遺物語』と食い違う部分を示す)

『今昔物語集』「莊子、請粟語第十一」と『宇治拾遺物語』「後之千金事」を照り合わせて見たら、前述したように、あらずじは大抵一致する

が、表現面では『宇治拾遺物語』が『今昔物語集』より簡潔的な叙述をしたと見られる。それ以外で著しい相違点を取り上げると以下の二点である。



1. 『今昔物語集』での固有名詞が『宇治拾遺物語』と食い違ったところがあり、また、人名のところで欠字で表記される。
2. 『今昔物語集』において、荘子の品格について讃えることばが多いが、『宇治拾遺物語』においてそれほどではない。

『宇治拾遺物語』では荘子が食糧を乞う相手を「監河侯」と記されているが、『今昔物語集』では終始「」で表記され、岩波書店の『新 日本古典文学大系[34]今昔物語集二』の頭注によれば、「「かんあとう」の人名表記を期した欠字」⁷と記され、欠字の原因が特に説明されなかったと見られる。また、荘子が説話で会った鮒の行き先について、『宇治拾遺物語』では「江湖」、『今昔物語集』では「高麗」という相違が見受けられる。

一方、『今昔物語集』では荘子のことを「心賢クシテ悟リ広シ」と称し、食糧を乞う相手も「然カ止事無ク賢ク在マス人ニ」ということばで荘子を讃えるが、『宇治拾遺物語』では荘子の品格についてそれほど称賛してないと見られる。ただ、『宇治拾遺物語』第一九六話でも監河侯の口を借りて、荘子を「いかでかやんごとなき人」と描いた。要するに、『宇治拾遺物語』の中では『今昔物語集』と同じく荘子のことを尊敬されている人物として見做したが、その品格についた描写を省いただけだと見られる。また、『今昔物語集』「荘子、請栗語第十一」の冒頭に書かれている「心賢クシテ悟

⁷ 前掲注3、p. 317

り広シ」という莊子を称える文句について、実は『今昔物語集』における全ての莊子主役の説話は、この一句が付けられると見られ、『今昔物語集』が莊子を言及するたび必ず使う常套句とも言えるだろう。故に『今昔物語集』では、莊子を称える描写が『宇治拾遺物語』より多いと見受けられるが、両説話集が莊子に対する態度はそれほど差がないと判断し、また趣旨が一致する上、「莊子、請[□]栗語第十一」と第一九六話が相違する二点はあくまで表現面の違いとしか見られないと伺える。

(三) 『宇治拾遺物語』第一九七話「盗跖与孔子問答事」の同話『今昔物語集』卷十「孔子、為教盗跖行其家怖返語第十五」

『今昔物語集』卷十「孔子、為教盗跖行其家怖返語第十五」の内容は以下の通りである。

今昔、震旦ノ口代ニ柳下恵ト云フ人有ケリ。世ノ賢キ人トシテ人ニ重ク被用レタリ。

其ノ弟ニ盗跖ト云フ人有リ。一ノ山ノ懐ヲ棲トシテ、諸ノ悪ク武キ人ヲ多ク招キ集メテ、我ガ具足トシテ、他人ノ物ヲバ、善悪ヲ不撰ズ我ガ物トス。遊ビ行ク時ニハ、此ノ悪ク猛キ者共ヲ引キ具セル事、既ニ二三千也。道ヲ亡シ、人ヲ煩シ、諸ノ不吉ヌ事ノ限リヲ好テ業トス。

而ル間、兄ノ柳下恵、道ヲ行ク間ニ、孔子会ヒ給ヌ。孔子、柳下恵ニ語テ云ク、「汝ヂ、何レノ所ヘ行クゾ。自ラ面リ申サムト思フ事ノ有ツルニ、幸ニ会ヒ給ヘリ」ト。柳下恵、「何事ヲ宣ハムト為ルゾ」ト。孔子ノ云ク、「面リ申サムト思フ事ハ、君ガ御弟ノ盗跖、諸ノ悪キ事ノ限リヲ好ムデ、諸ノ猛ク悪キ輩ヲ招キ集テ伴トシテ、多ノ人ヲ令歎メ世ヲ亡ス。何

ゾ君、兄トシテ不教給ザルゾ」ト。柳下惠答ヘテ云ク、「盗跖、弟也ト云ヘドモ、我ガ教ヘニ可随キ者ニ非ズ。然レバ、年来歎キ乍ラ不教ザル也」ト。孔子ノ云ク、「君不教ハ、我レ、彼ノ盗跖ガ所ニ行テ教ヘムト思フ、何ニ」ト。柳下惠答テ云ク、「君、更ニ盗跖ガ所ニ行テ不可教給ズ。君妙ナル御言ヲ尽シテ教ヘ給フト云ヘドモ、更ニ可靡者ニ非ズ。還テ悪キ事出来ナムトス。努々其ノ事不可有ズ」ト。孔子ノ云ク、「悪シト云フトモ、盗跖、人ノ身ヲ受ケタル者ナレバ、自然ラ善キ事ヲ云ハムニ、趣ク事モ有リナム。其レヲ兼ネテ不承引ジト云テ、君、兄トシテ不教ズシテ、不知顔ヲ作テ任セテ見給フハ、極メテ悪キ事也。吉々シ、見給へ。自ラ行テ、教ヘ直シテ見セ進ラム」ト言フ吐テ去リ給ヌ。

其ノ後、孔子、盗跖ガ所ニ御ヌ。馬ヨリ下テ門ニ立テ見レバ、有ル者皆、或ハ甲冑ヲ着テ弓箭ヲ帯セリ。或ハ刀劔ヲ横タヘ兵仗ヲ取レリ。或ハ鹿・鳥等ノ諸ノ獸ヲ殺ス物ノ具共ヲ隙無ク置キ散セリ。如此クノ諸ノ悪キ事ノ限リヲロタリ。孔子、人ヲ招テ、云ヒ入レサセ給フ。「魯ノ孔丘ト云フ人參レリ」ト。使還リ来テ云ク、「音ニ聞キ及ブ人ナハリ。先ヅ、此ニ来レラム事、何ニ依テゾ。我レ聞ク、「行テ人ヲ教フル者ナハリ」。若シ教ヘムガ為ニ来ルカ。然ラバ来テ可教シ。我ガ心ニ叶ハバ用キム、不叶ズハ肝膾ニ作リテムトス」ト云ヒ出タリ。

其ノ時ニ孔子、盗跖ガ前ニ進ミ出デハ、庭ニシテ、先ヅ盗跖ヲ礼シ給フ。其ノ後、昇テ座ニ着ク。盗跖ヲ見レバ、甲冑ヲ着タリ。劔ヲ帯シ銚ヲ取レリ。頭ノ髮ハ三尺許ニ上レリ。乱タル事、蓬ノ如シ。目ハ大ナル鈴ヲ付タルガ如シテ見廻シ、鼻ヲ吹きイラハカシテ、齒ヲ上咋テ鬚ヲイラハカ

シテ居タリ。盜跖ガ云ク、「汝ガ来レル故ハ何ゾ。慥ニ可申シ」ト。其人ノ音、嗔レル音ニシテ、高クシテ、甚ダ怖シキ事無限シ。

孔子、此レヲ聞テ思給ハク、「兼テハ糸カク怖シ気ナル者トハ不思ザリツ。形・有様ヲ見、音ヲ聞クニ、更ニ人ト不思ズ」。然レバ、心・肝碎ケテ振ハル。然レドモ、思ヒ念ジテ、孔子云ヒ出シ給ハク、「人ノ世ニ有ル事ハ、皆道理ヲ身ノ莊トシテ心ノ□ト為ル者也。今日、天ヲ首ニ頂キ、地ヲ足ニ踏ヘ、四方ヲ固メトシ、公ニ敬ヒ奉リ、下ヲ哀ビ、人ニ情ヲ置クヲ以テ事ト為ル者也。而ルニ、君、承ハレバ、心ノ恣ニ悪キ事ヲノミ好ミ給フト。悪キ事ヲバ、当時ハ心ニ叶フ様ナレドモ、終ニハ悪キ事也。然レバ、猶、人ハ善キニ随フヲナム、善キ事ニハ為ル。然レバ、如此ク申スニ随テ御ベキ也。此ノ事ヲ申サムガ為ニ参リ来ツル也」ト。

疵咲テ、雷ノ如クナル音ヲ挙テ云ク、「汝ガ云フ所ノ事共一トシテ不当ズ。其ノ故ハ、昔シ、堯・舜ト申ス二人ノ国王御坐シキ。世ニ貴バレ給フ事無限カリキ。然レドモ、其ノ子孫、世ニ針指ス許ノ所ヲ不知ズ。亦、世ニ賢キ人ハ伯夷・叔齊也。然レドモ、□山ノ山ニ臥セリシカバ、餓エ死ニキ。亦、汝ガ弟子ニ顔回ト云フ者有キ。汝ヂ、賢ク教ヘ立タリキト云ヘドモ、不覺ニシテ、命短クシテ死ニキ。亦、汝ガ弟子ニ子路ト云フ者有リキ。衛□□ノ門ニシテ被殺レニキ。然レバ、賢キ事モ終ニ賢キ事無シ。亦、悪キ事ヲ我レ好ムト云ドモ、災身ニ不來ズ。被讚ル者、四日五日ニ不過ズ。被謗ル者、亦如此シ。然レバ、善キ事モ悪キ事モ永ク被讚レ、永ク被謗ル、事無シ。此レニ依テ、善キ事モ悪キ事モ、只、我ガ好ニ随テ容止ベキ也。汝ヂ、亦、木ヲ刻テ冠トシ、皮ヲ以テ衣トセリ。世ヲ怖レテ公ニ仕

レドモ、再ビ魯ニ追レ、跡ヲ〇〇ニ削ラル。何ゾ不賢ヌ。然レバ、汝ガ云フ所、毎事ニ悚也。汝ヂ、速ニ走り還テ去ネ。一トシテ可用キ事無シ」ト云フ時ニ、孔子、亦可云キ事思エ給ハザリケレバ、座ヲ起テ忽ギ出デ給ヌ。

馬ニ乗り給ニ、吉ク恐レ給ヒニケレバ、轡ヲ二度ビ取り〇〇シ、鐙ヲ頻ニ踏ミ誤チ給フ。

此レヲ世ノ人、「孔子倒レシ給フ」ト云フ也トナム、語り伝ヘタルトヤ。

(『新 日本古典文学大系[34]今昔物語集二』 pp. 323-327)

(下線部は筆者により、『宇治拾遺物語』と食い違う部分を示す)

『今昔物語集』「孔子、為教盜跖行其家怖返語第十五」と『宇治拾遺物語』「盜跖与孔子問答事」を照り合わせて見たら、趣旨が一致し、表現面の違い以外に、特に著しい相違がないと見受けた。

表現面の違いに関して、まず孔子がはじめて盜跖のところに踏み入れた情景から見ると、『今昔物語集』には「有る者、或は甲冑を着て弓箭を帶せり。或は刀劔を横たへ、兵仗を取れり。鹿・鳥等の諸の獸を殺す物の具を隙無く置き散せり。此の如く、諸の悪き事の限りを仕たり」と書かれたが、

『宇治拾遺物語』にはただ「ありとあるもの、獸、鳥を殺し、もろもろの悪しき事を集へたり」という簡略な記述しか見られない。先述した『今昔物語集』の「孔子逍遙、値榮啓期間語第十」でも言及したように、『宇治拾遺物語』では場面の叙述を簡略し、説話の中心となる論述に焦点を当てる手法が

見られる。故に「盗跖与孔子問答事」で盗跖のところを簡略して述べるのも同じ手法を使ったと考える。

また、『今昔物語集』は会話中に更に他人の言葉を引用するところが多いと見られるが、『宇治拾遺物語』には見られない。例えば盗跖の使者が盗跖の言葉を引用して孔子に答える時「使還り来テ云ク、「音ニ聞キ及ブ人ナ、リ。先ヅ、此ニ来レラム事、何ニ依テゾ。我レ聞ク、「行テ人ヲ教フル者ナ、リ」。若シ教ヘムガ為ニ来ルカ。然ラバ来テ可教シ。我ガ心ニ叶ハバ用キム、不叶ズハ肝膾ニ作りテムトス」ト云ヒ出タリ」、また孔子が柳下恵との会話や盗跖と孔子の会話にも見られる。一方、『宇治拾遺物語』ではそういった場面を流暢な会話文に整えて書かれていると見られる。

総じて言うと、「孔子、為教盗跖行其家怖返語第十五」と「盗跖与孔子問答事」について、表現面の相違だけ見受けられ、趣旨や思想では相違がないと伺える。

第二節、『十訓抄』における『莊子』関連説話の同話・類話

本論の第二章で考察した『十訓抄』における『莊子』関連説話は計二話で、<二ノ二>の「材と不材」説話と<六ノ一>の「黄雀螳螂」説話である。本論では、小学館のテキストの付録における「関係説話表」⁸によって、同話と類話・関連話を以下の表を作成して示す。

通し番号・内容の 要約	同話	類話・関連記事

⁸ 前掲注 2、P. 541-545

<p><二ノ二> 「材と不材」説話</p>	<p>『百詠和歌』五「鴈」 『古今著聞集』七二五「莊子 弟子に諭す事并に藤原篤茂が 長句の事」</p>	<p>『莊子』外篇「山木」 『和漢朗詠集諸注』文 詞 『玉函秘抄』下 『明文抄』三「人事」 上、五「文事」 『雑談集』五ノ二 *『今昔物語集』一〇 一一二</p>
<p><六ノ一> 「黄雀螳螂」説話</p>	<p>『百詠和歌』一〇「弾」 『古今著聞集』七二三「孫叔 敖楚の襄王を諫むる事」</p>	<p>『説苑』「正諫」 『韓詩外伝』一〇 『百詠注』一〇「弾」 『五常内義抄』 *『今昔物語集』一〇 一一三</p>

表6 『十訓抄』における『莊子』関連説話の同文話・類話

表6は主に本論で使うテキスト、小学館の『新編 日本古典文学全集[51] 十訓抄』の付録「関係類話一覧」⁹によって作成したが、類話・関連記事の欄に載せた『今昔物語集』の項目は筆者によるものである。実際に『今昔物語集』における『莊子』関連説話が五話のみだと見られ、前節で考察した三話以外に、「莊子行人家、殺雁備肴語第十二」と「莊子、見畜類所行走逃語 第

⁹ 浅見和彦校注・訳(1997)『新編 日本古典文学全集[51]十訓抄』、小学館、P. 512-537

十三」の二話があり、その内容は『十訓抄』における『莊子』関連説話二話と類似性が高いと考えるため表に付け加えた。

『十訓抄』における『莊子』関連説話と同話を持つ説話集が『古今著聞集』のみだと見られるが、『古今著聞集』に収録された二話は『十訓抄』からの抄入話だと永積氏が指摘し¹⁰、故に両者を対照・比較しても意味がないと考え、本節では考察の範疇から除く。一方、類話・関連記事での説話集のほうでは、『雑談集』と『今昔物語集』が見られ、『雑談集』は成立時期が『十訓抄』より遅いため、本節の考察範疇から除く。

故に本節では、『今昔物語集』の「莊子行人家、殺雁備肴語第十二」「莊子、見畜類所行走逃語 第十三」と、『十訓抄』〈二ノ二〉「材と不材」説話・〈六ノ一〉「黄雀螻螂」説話を取り上げ、それぞれ対照・比較していく。


(一) 『十訓抄』〈二ノ二〉「材と不材」説話の類話『今昔物語集』卷十「莊子行人家、殺雁備肴語第十二」

『今昔物語集』卷十「莊子行人家、殺雁備肴語第十二」の内容は以下の通りである。

今昔、震旦ニ莊子ト云フ人有ケリ。心賢クシテ悟リ広シ。

此ノ人、道ヲ行ク間、一杣山ヲ通ル。而ルニ、杣ノ多ノ木ノ中ニ、鉤リ
喙ミタル一ノ木有リ。年久ク成レリ。

¹⁰「卷廿魚虫禽獸篇には、卷末に十訓抄とほぼ同文の五説話があり、それらは、著聞集の跋文・署名の後に追記されている。また五説話中の四つまで外來說話であって、編成の方針にそむいていることからいっても、これらが後人の抄入であることは明らかである」永積安明、島田勇雄(1966)「解説」『日本古典大系 84 古今著聞集』、岩波書店、pp. 34-35



莊子、此ノ木ヲ見テ、杗人ニ問テ云ク、「此ノ木ノ年久ク成ルマデ命ヲ持ツハ何ナル事ゾ」ト。杗人答テ云ク、「杗ニハ吉ク直キ木ヲ撰テ取レバ、此ノ木ハ喙ミ鉤レルニ依テ、不用ノ物ニテ、材木ニモ不取ザレバ、カク年久ク成タル也」ト。莊子、「然也」ト聞テ、過ヌ。

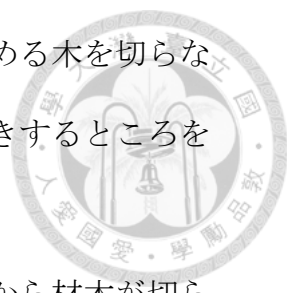
亦ノ日ニ成テ、莊子、人ノ家ニ行タルニ、家ノ主、饗ヲ儲テ令食ム。先ヅ酒ヲ令呑ムルニ、肴ノ無カリケレバ、其ノ家ニ雁ニヲ飼フ。家ノ主、「其ノ雁一ヲ殺シテ御肴ニ備ヘヨ」ト云フニ、其ノ雁ヲ預リテ飼フ人ノ申サク、「吉ク鳴ク雁ヲヤ可殺キ。不鳴ヌ雁ヲヤ可殺キ」ト。主人ノ云ク、「鳴クヲバ生ケテ令鳴メヨ。不鳴ヌヲ殺シテ御肴ニ可備シ」ト。主人ノ云フニ随テ、不鳴ヌ雁ノ頸ヲネヂテ、殺シテ調テ、御肴ニ備ヘタリ。

其ノ時ニ、莊子ノ云ク、「昨日ノ杗山ノ木ハ不用ナルヲ以テ命ヲ持ツ。今日ノ主人ノ雁ハ才ヲ以テ命ヲ生ク。此レヲ以テ心得ルニ、賢キ者モ愚ナル者モ、命ヲ持ツ事ハ其レニハ不依ズ。只、自然ラ令然ムル事也。然レバ、「才有レバ不死ザルゾ。不用ナレバ死ヌルゾ」トモ不可定ズ。不用ノ木モ命長シ。不鳴ヌ雁モ忽ニ死ヌ。此レヲ以テ、諸ノ事ハ可知シ」ト。

此レ、莊子言也トナム語り伝ヘタルトヤ。

(『新 日本古典文学大系[34]今昔物語集二』 pp. 319-320)

『今昔物語集』「莊子行人家、殺雁備肴語第十二」と『十訓抄』<二ノ二>における「材と不材」説話を照り合わせて見ると、明らかに文書の長さが異なっているが、趣旨は一致すると見られる。他に以下の細かい相違点が見られる。

- 
1. 『十訓抄』では、莊子は直ぐなる木が切られて、また歪める木を切らないところを見たが、『今昔物語集』では歪める木が長生きするところを見た。
 2. 『今昔物語集』での莊子は、きこりと主人と会話を経てから材木が切られたことと鳴かない雁が殺されることを知ったが、一方『十訓抄』では、地の文で知ったと見られる。
 3. 『今昔物語集』での説話の最後は莊子の独り言であるが、『十訓抄』では弟子との会話と見られる。

一点目で取り上げたきこりとの会話場面について、『十訓抄』ではただ「木を切るものあり。直なるをば切りて、ゆがめるをば切らず」と書かれ、一方『今昔物語集』では莊子が長生きした大木を見てから、隣のきこりに何故長年も生え続けるのかを聞くと、きこりが「此ノ木ハ喟ミ鉤レルニ依テ、不用ノ物ニテ、材木ニモ不取ザレバ、カク年久ク成タル也」と答えた。また、原拠『莊子』の「山木」篇の「材と不材」説話でも、まず莊子が大木を見て、きこりに理由を聞くという流れの後で、莊子が「此木以_レ不材_レ得_レ終_レ其天年_レ」という結論に導いたため、『今昔物語集』の表現が原拠に近いと考える。そして『十訓抄』における改変は結論を保ったまま、説話の流れを簡略化したと見られる。

二点目について、『十訓抄』では「材と不材」説話前半の場面をほぼ地の文だけで述べることに對して、『今昔物語集』では莊子ときこりの会話、また莊子と主人の会話で『十訓抄』と同じ趣旨を伝えた。前節の『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の対照考察のところでも触れたように、『今昔物語

集』が二重カギ括弧、即ち会話の中で引用をする傾向があると見られ、その前提としたのも、会話文が多く使われることだと考える。

会話文が多く使われている『今昔物語集』であるが、三点目の相違点で言及したように、原拠『莊子』と同じように弟子と莊子の会話を保留した『十訓抄』の内容と違って、莊子の独り言に改変した。この点に関して原因は不明であるが、恐らく『今昔物語集』の編者は弟子が「材と不材」説話にとっても無くてもいい存在だと思い、最後の段落で省いたかもしれない。

総じて見ると、『十訓抄』〈二ノ二〉では、「材と不材」説話以外に他の詩文引用が見られ、また『十訓抄』編者自身の言葉もあったため、「材と不材」説話をより簡潔な形で呈した理由だと考える。一方『今昔物語集』では、「材と不材」説話全体を述べるだけの文書にするため、説話の描写や臨場感のある会話を詳細に書くという方向で呈したと見られる。両者の「材と不材」説話について、趣旨は同じである以上、表現面のみの相違だと言えよう。

(二) 『十訓抄』〈六ノ一〉「黄雀螻螂」説話の類話『今昔物語集』卷十「莊子、見畜類所行走逃語第十三」

『今昔物語集』卷十「莊子、見畜類所行走逃語 第十三」の内容は以下の通りである。

今昔、震旦ニ莊子ト云フ人有ケリ。心賢クシテ悟リ広シ。

此ノ人、道ヲ行ク間、沢ノ中ニ一ノ鷺有テ、者ヲ伺テ立テリ。莊子、此レヲ見テ、窃ニ鷺ヲ打ムト思テ、杖ヲ取テ近ク寄ルニ、鷺不逃ズ。莊子、此レヲ怪ムデ、弥ヨ近ク寄テ見レバ、鷺、一ノ蝦ヲ食ムトシテ立テル也ケ

り。然レバ、「人ノ打ムト為ルヲ不知ザル也ト知ヌ。亦、其ノ鷺ノ食ムト
為ル蝦ヲ見レバ、不逃ズシテ有リ。此レ亦、一ノ小虫ヲ食ムトシテ、鷺ノ
伺フヲ不知ズ。

其ノ時ニ、莊子、杖ヲ棄テ、逃テ、心ノ内ニ思ハク、「鷺・蝦、皆、我
レヲ害セムト為ル事ヲ不知ズシテ、各他ヲ害セム事ヲノミ思フ。我レ亦、
鷺ヲ打ムト為ルニ、我レニ増サル者有テ、我レヲ害セムト為ルヲ不知ジ。
然レバ不知ジ。我レ逃ナム」ト思テ、走り去ヌ。

此レ、賢キ事也。人如此キ可思シ。

亦、莊子、妻ト共ニ水ノ上ヲ見ルニ、水ノ上ニ大キナル一ノ魚浮テ遊
ブ。妻、此レヲ見テ云ク、「此ノ魚、定メテ心ニ喜ブ事可有シ。極テ遊
ブ」ト。莊子、此レヲ聞テ云ク、「汝ハ何デ魚ノ心ヲバ知レルゾ」ト。妻
答テ云ク、「汝ハ何デ我ガ魚ノ心ヲ知り不知ズヲバ知レルゾ」ト。其ノ時
ニ、莊子ノ云ク、「魚ニ非ザレバ、魚ノ心ヲ不知ズ。我レニ非ザレバ、我
ガ心ヲ不知ズ」ト。此レ、賢キ事也。実ニ親シト云ヘドモ、人、他ノ心ヲ
知ル事無シ。

然レバ、莊子ハ、妻モ心賢ク悟リ深カリケリトナム、語り伝ヘタルト
ヤ。

(『新 日本古典文学大系[34]今昔物語集二』 pp. 320-321)

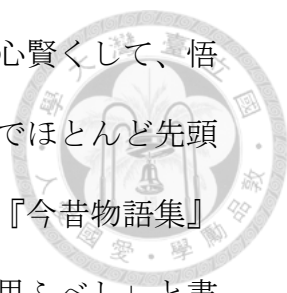
『今昔物語集』「莊子、見畜類所行走逃語 第十三」の内容を考察してみ
ると、実際に前半の部分だけ『十訓抄』〈六ノ一〉における「黄雀螿螂」説話
と類話だと判明し、そして『十訓抄』〈六ノ一〉とかなり違ったように見え
るため、相違点を以下でまとめる。



1. 『十訓抄』における「黄雀螻蛄」説話は杵物語であるが、『今昔物語集』におけるものはそうではない。
2. 『十訓抄』〈六ノ一〉で登場した動物は「黄雀、螻蛄」で、『今昔物語集』では「鷺・蝦」である。また、説話における捕食の連鎖について、『十訓抄』では蝉→螻蛄→黄雀→弓を執る童子、『今昔物語集』では一の小虫→蝦→鷺→杖で打とうとする莊子。

前章で考察したように、『十訓抄』〈六ノ一〉における「黄雀螻蛄」説話は、恐らく『韓詩外伝』からの伝承により、この説話を孫叔敖が楚王に語る杵物語として受容したと見られる。一方『今昔物語集』では原拠『莊子』「山木」篇の設定に沿って、莊子自身の出来事として「黄雀螻蛄」説話の類話である「鷺・蝦」説話を述べる。

しかし、『今昔物語集』の「鷺・蝦」説話もまた『莊子』の「黄雀螻蛄」説話と相違が見られ、登場した動物だけではなく、莊子その場で反省した言葉、『莊子』ではただ「噫物固相累、二類相召也」とあるが、『今昔物語集』は「鷺・蝦、皆、我れを害せむと為る事を知らずして、各、他を害せむ事をのみ思ふ。我れ、亦、鷺を打むと為るに、増さる者有て、我れを害せむと為るを知らじ。然れば、如かじ。我れ、逃なむ」と、長々と述べられている。そして『今昔物語集』では、莊子が誤って他人の私有地に入って、最後に追い出されたという『莊子』にはあつたはずの叙述もないと見られる。莊子が過ちをしたことを『今昔物語集』で見られない理由に関して、恐らく『今昔物語集』で常に強調された莊子の優れた品格と関わっていると考



る。先述したように、「今昔、震旦に莊子と云ふ人有けり。心賢くして、悟り広し」という文言は『今昔物語集』での『莊子』関連説話でほとんど先頭に付け加えられると見られる。ただの決まり文句ではなく、『今昔物語集』は「鷲・蝦」説話の最後に「此れ、賢き事也。人、此の如き思ふべし」と書かれ、また「鷲・蝦」説話の後にもう一つ説話を付け加え、そこで「莊子は妻も心賢く、悟り深かりけりとなむ、語り伝へたるとや」と莊子の妻も含めて称える。要するに、『今昔物語集』における「鷲・蝦」説話では、莊子のイメージを損なわないために、莊子が誤って私有地の楡園に入り込んだことを削除したという改変を施したと見られる。

総じていうと、そもそも本論の第二章で論じたように、『十訓抄』における「黄雀蟻螂」説話が恐らく『韓詩外伝』からの伝承であり、『今昔物語集』巻十「莊子、見畜類所行走逃語 第十三」はそれ以前、或いはそれと異なったテキストから「鷲・蝦」説話を受け容れた可能性があるのではないかと考える。

まとめ

本章の第一節では、まず『宇治拾遺物語』における『莊子』関連説話の第九〇話・第一九六話・第一九七話の同文話、即ち『今昔物語集』の「孔子逍遥、値栄啓期間語第十」、「莊子、請[□]栗語第十一」、「孔子、為教盜跖行其家怖返語第十五」を取り上げて対照・比較した。

『今昔物語集』の「孔子逍遥、値栄啓期間語第十」と『宇治拾遺物語』「帽子叟与孔子問答事」の違いが主に孔子と会話する「翁」にまつわり、『今昔物語集』では翁を「栄啓期」という人物として見做し、更に『莊子』

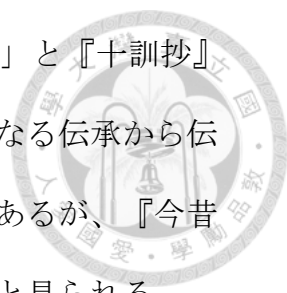
「漁父」篇を原拠とする本説話に、『列子』や『孔子家語』にある「三楽説」の要素を付け加えたと見られる。一方、同じ原拠を持つ『宇治拾遺物語』は叙述を簡潔化し、孔子と翁・漁父のやりとりに焦点を当てたという異なる方向への『莊子』変容が見られる。

そして『今昔物語集』「莊子、請[□]栗語第十一」と『宇治拾遺物語』「後之千金事」について、趣旨は大差がなく、表現面での違いのみ見受けられる。『今昔物語集』での『莊子』関連説話は全て、先頭で「心賢クシテ悟リ広シ」という莊子を称える文句が付け加えられると見られ、一方『宇治拾遺物語』には莊子に対する尊敬な態度を取ることが伺えるが、明らかな称賛文句は使われていないと見られる。

『今昔物語集』「孔子、為教盜跖行其家怖返語第十五」と『宇治拾遺物語』「盜跖与孔子問答事」でも表現面の相違しか見受けられず、中には『宇治拾遺物語』が『莊子』関連説話を簡略して述べるのが著しい特徴だと考える。

第二節では、『十訓抄』<二ノ二>「材と不材」説話・<六ノ一>「黄雀螳螂」説話の同文話、即ち『今昔物語集』の「莊子行人家、殺雁備肴語第十二」・「莊子、見畜類所行走逃語 第十三」を取り上げて、『十訓抄』との対照・比較をした。

『今昔物語集』「莊子行人家、殺雁備肴語第十二」と『十訓抄』の「材と不材」説話について、趣旨は一致しているが、文書の長さの相違が著しいと見られる。両者の文書の長さが相違することについて、『十訓抄』は「材と不材」説話を簡約で呈したく、一方『今昔物語集』では会話文を多用する傾向があり、両者の書き方によって文書の長さがかけ離れたと考える。



最後に『今昔物語集』「莊子、見畜類所行走逃語 第十三」と『十訓抄』の〈六ノ一〉「黄雀螻螂」説話について、そもそも両者は異なる伝承から伝わってきたので、『韓詩外伝』からの『十訓抄』は杵物語であるが、『今昔物語集』は『莊子』「山木」篇と同じく杵物語ではなかったと見られる。

総じていうと、『今昔物語集』に収録された『莊子』関連説話の同話と比べると、『宇治拾遺物語』は簡潔な叙述とはっきりとした論述を好み、そのため饒舌な部分を簡約して述べて、焦点を論述に当てる傾向がある。そして『今昔物語集』に収録された『莊子』関連説話の類話と比べると、『十訓抄』は『莊子』関連説話の内容より、『十訓抄』の編者が本来伝えたい教訓を優先し、或いは説話を教訓の例証として使う傾向が伺える。

結論



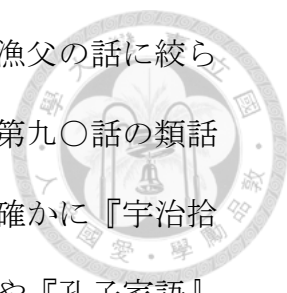
本論では、『宇治拾遺物語』『十訓抄』における『莊子』関連内容及び、『今昔物語集』における『宇治拾遺物語』と『十訓抄』の『莊子』関連説話の同話・類話を、以上の三章にかけて詳細な考察と分析を行い、中世説話集における『莊子』関連内容の受容と変容について検討してきた。以下は、『宇治拾遺物語』における『莊子』の受容と変容、『十訓抄』における『莊子』の受容と変容、『宇治拾遺物語』と『十訓抄』における『莊子』関連内容の採録意識、中世説話集における『莊子』の受容と変容などの四方面から結論をまとめてみる。

一、『宇治拾遺物語』における『莊子』の受容と変容について

本論の第一章では、『宇治拾遺物語』第九〇話「帽子の叟、孔子と問答の事」・第一九六話「後の千金の事」・第一九七話「盗跖と孔子と問答の事」を取り上げ、『宇治拾遺物語』における『莊子』関連説話を考察し、原拠『莊子』の内容とを対照・比較した。程度は異なるが、それら三つの説話とも文面上の改変が見受けられる。考察の結果を以下にまとめてみる。

まず第一節で『宇治拾遺物語』編者の編纂目的を考察し、編者は所収話に対して自身の意思による影響を最小限にしたが、説話に施された改変からある程度影響が見られることが判明した。

第二節で考察した『宇治拾遺物語』第九〇話「帽子の叟、孔子と問答の事」は、原拠『莊子』「漁父」篇の趣旨と大差は見られないが、孔子の漁夫への態度を前後不一致にすることや、子路と孔子のやりとりが削減されることなどで改変が見られる。それらの改変によって、第九〇話は「漁父」篇の



内容がストーリー性のある説話に作り直され、説話の焦点も漁父の話に絞られたと見られる。『今昔物語集』における『宇治拾遺物語』第九〇話の類話「孔子逍遙、値榮啓期間語第十」と比較した結果によると、確かに『宇治拾遺物語』第九〇話は叙述を簡潔化する傾向があり、『列子』や『孔子家語』の要素も付け加えた『今昔物語集』が行う改変に比べて、『宇治拾遺物語』は孔子と漁父のやりとりに焦点を当てることだけに専念したと考える。

第三節で考察した『宇治拾遺物語』第一九六話「後の千金の事」と、原拠『莊子』「外物」篇は文面上の僅かな相違しかないと判明し、また「外物」篇における強い風刺性も保留したと見られる。一方『宇治拾遺物語』第一九六話で見られる莊子に対する尊敬な態度を取ることにについて、『今昔物語集』「莊子、請^栗栗語第十一」で『宇治拾遺物語』より明らかな敬意表示が見られるため、特徴的な変更点とは言えないと考える。

第四節で『宇治拾遺物語』第一九七話「盗跖と孔子と問答の事」と『莊子』「盗跖」篇を対照・比較したら、とりわけ孔子と盗跖の論説で相違することが判明した。第一九七話では原拠「盗跖」篇における盗跖の論述順序を変え、また論証として挙げる例を取り替えるなど、説話の焦点となる部分に与える影響が著しい改変が多いと見られる。この点に関して『今昔物語集』「孔子、為教盗跖行其家怖返語第十五」にも見られ、内容において『宇治拾遺物語』第一九七話と大差がないと見做す。

『宇治拾遺物語』における第九〇話、第一九六話、第一九七話に行われた改変は、全体の説話内容を簡潔かつ流暢的に見せ、またそれぞれの説話における主な論述部分に焦点を当てるなどの役割を果たすという、説話を読みや

すいように改変したと考える。なお、第一九六話のみが、全体の説話内容に多大な改変が見られないため、変容として言い難いとする。

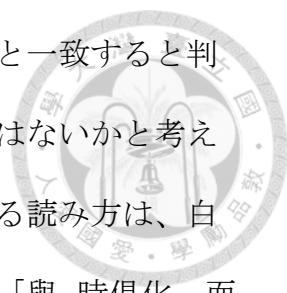


二、『十訓抄』における『莊子』の受容と変容について

本論の第二章で『十訓抄』<二ノ二>「木と雁の運命」・<六ノ一>「蟻螂をねらう黄雀」を取り上げ、『十訓抄』における『莊子』関連説話を考察し、原拠『莊子』の内容と対照・比較をした。また、<三ノ十二><六ノ三十一><十ノ五十四><十ノ六十七>などの四篇は、説話そのものではないものの、『莊子』説話の関連内容を他の典籍を介在して言及したため、引用元の典籍と原拠『莊子』の内容とも対照・比較をした。考察の結果を以下にまとめてみる。

まず第一節で『十訓抄』編者の編纂目的を考察した。『十訓抄』の編者は若い奉公人に正しい処世術を教えるという明確な意志を以て『十訓抄』を編纂したと見られる。その分『十訓抄』の説話を採録する基準を、若い奉公人が身に付けるべき教養に関する内容に設定し、身近な類書や典籍から採録したと考えられる。

第二節で考察した『十訓抄』<二ノ二>「材と不材」説話は、原拠『莊子』「山木」篇における「材と不材」説話の趣旨と大差はないが、原拠にあった莊子の論説部分が収録されなかったと見られる。更に<二ノ二>で「材と不材」説話に対して、人は僥慢しすぎず、卑下もしすぎず、身を慎みながら生きていくべきという教訓を伝えるための読み方は、『莊子』「山木」篇における「材と不材」説話の解釈と異なっていると判明した。<二ノ二>で引用された他の詩文を考察したら、<二ノ二>の「材と不材」説話に対する



読み方は白居易の詩文「木鴈一篇須記取 致身材与不材間」と一致すると判明し、恐らく『十訓抄』の編者が白詩から影響を受けたのではないかと考える。要するに、『十訓抄』の編者の「材と不材」説話に対する読み方は、白詩の「致身材与不材間」に影響されたため、原拠『莊子』の「與_レ時俱化、而無_レ肯專為_レ」という趣旨との相違が生じ、「材と不材」説話を変容して受容した結果になったと考える。また、『十訓抄』〈二ノ二〉の類話『今昔物語集』「莊子行人家、殺雁備肴語第十二」と比較した結果、『今昔物語集』は会話文を多用するため、『十訓抄』の文書の長さとは著しく相違すると見られる。それ以外特に大差がなく、両者の趣旨も近いことが判明した。

第三節で考察した『十訓抄』〈六ノ一〉「黄雀螻螂」説話は、原拠『莊子』「山木」篇における「黄雀螻螂」説話とかなり相違していると考えられ、枠物語の構造になり、話の中心も孫叔敖の話になったと考える。〈六ノ一〉「黄雀螻螂」説話の出典について考察すると、『韓詩外伝』に収録された「黄雀螻螂」説話とより似ていると判明し、恐らく〈六ノ一〉での「黄雀螻螂」説話は『韓詩外伝』に影響を受けたのではないかと考える。しかし影響された部分は「黄雀螻螂」説話の外枠のみ、つまり孫叔敖の話の部分のみだと見られ、肝心な内枠の「黄雀螻螂」説話内容は『莊子』「山木」篇での「黄雀螻螂」説話と変わらずにあったと考える。『今昔物語集』との類話である「莊子、見畜類所行走逃語 第十三」とも比較したが、そもそも『十訓抄』〈六ノ一〉の「黄雀螻螂」説話は孫叔敖の話として伝えられてきたと見られるため、同一視することが難しいと判明した。

第四節では『十訓抄』における四箇所『莊子』関連内容を取り上げてそれぞれの出典と原拠『莊子』と対照・比較した。〈三ノ十二〉の「黄帝の牧

童の言葉を信じ」は、『明文抄』や『ささめごと』といった類書からの出典だと推測され、原拠は『莊子』「徐無鬼」篇にあった黄帝と牧馬童子の話だと判明した。類書を介した引用であるが、〈三ノ十二〉での黄帝と牧馬童子の話は原拠『莊子』「徐無鬼」篇での趣旨と一致したため、原拠の精神を受容したと見なす。

〈六ノ三十一〉は前中書王の「菟裘賦」における「喪_レ馬之老、委_レ倚伏於秋草_一 夢_レ蝶之公、任_レ是非於春叢_一」という『莊子』「齊物論」篇からの内容を引用したと見られる。〈六ノ三十一〉の前半が「塞翁が馬」の話である点から見ると、「菟裘賦」の詩句を引用する目的は前句「喪_レ馬之老、委_レ倚伏於秋草_一」にあると考えるが、その対句とした後句の「夢_レ蝶之公、任_レ是非於春叢_一」も併せて引用され、〈六ノ三十一〉を老莊思想が満ちた章段に成り立たせたと見られる。

〈十ノ五十四〉は清原滋藤の詩文「為_レ我邯鄲歩漸窮」という『莊子』「秋水」篇からの内容を引用したと見られる。〈十ノ五十四〉では清原滋藤の文武両道を称えるため、敢えて清原滋藤の詩文を引用したと見られる。原拠『莊子』「秋水」篇にある「邯鄲の歩」はむやみに人の真似事をするなという趣旨だが、『十訓抄』は清原滋藤の謙遜文句として引用し、原拠の精神を踏まえてからの受容だと見なす。

〈十ノ六十七〉は則天皇后作の文句「帝軒張_レ洞庭之樂_一」を引用したと記されたが、実際出典不詳な文句だと見られ、ただ『莊子』「天運」篇にあった「帝張_レ咸池之樂於洞庭之野_一」と関連があった文句として見做される。また、〈十ノ六十七〉が管絃の徳を称えるため引用した「帝軒張_レ洞庭之樂_一」は、『莊子』「天運」篇の「帝張_レ咸池之樂於洞庭之野_一」と同じ場面を描写

しているように見えるが、両者全体の文脈がかなり相違していると判明し、『莊子』とは無関係な引用だと考える。

総じて見ると、『十訓抄』では、『十訓抄』本来の教訓内容を主体とし、『莊子』関連内容をあくまで例証や名言として扱う傾向が見られる。他の典籍を介在して引用する機会が多いにもかかわらず、『十訓抄』は要約化された説話と名言を通して、原拠『莊子』の精神を変容して受け容れたと考える。

三、『宇治拾遺物語』と『十訓抄』における『莊子』関連内容の採録意識について

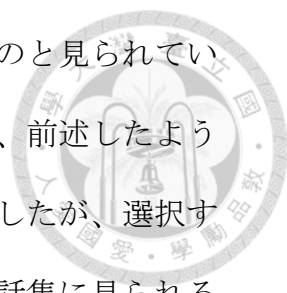
繰り返しになるが、『宇治拾遺物語』に見られる『莊子』関連説話は、第九〇話「帽子の叟、孔子と問答の事」・第一九六話「後の千金の事」・第一九七話「盗跖と孔子と問答の事」の三話である。一方、『十訓抄』に収録された『莊子』関連説話は、<二ノ二>「木と雁の運命」・<六ノ一>「蠶螂をねらう黄雀」の二話、また『莊子』関連内容は<三ノ十二>の「黄帝の牧童の言葉を信じ」・<六ノ三十一>の「夢_レ蝶之公、任_レ是非於春叢_一」・<十ノ五十四>の「為_レ我邯鄲歩漸窮」・<十ノ六十七>の「帝軒張_レ洞庭之楽_一」の四箇所である。両説話集に収録される『莊子』関連説話や内容が一つも重複しないことが明らかであるが、その理由について考えてみたい。『宇治拾遺物語』が『莊子』関連説話に施した改変点から見ると、個々の説話のストーリー性を重視し、一つの論述に説話の焦点を当てる傾向があり、また『宇治拾遺物語』編者自身が説話に対する評価があまり見られない。それに比べて『十訓抄』の場合は、編者があらかじめ決めた教訓に基づいて、例証

や関連話題として相応しい『莊子』関連説話及び内容を取り上げ、原拠の中心である論述も含めて改変を施したと見られる。

『宇治拾遺物語』と『十訓抄』は同じく鎌倉期に成立した説話集であるが、凡そ30年ほどの年代差があり、時代背景の原因も考えられないわけではないが、両説話集における採録話に相違が生じたのは、主に説話集編者が説話に対する採録意識が相違するからだと考える。本論の第一章で考察したように、『宇治拾遺物語』の編者は読者本位の方針で説話集を編纂し、『莊子』関連説話に改変を施した時にも、編者による評価や感想などほとんど付け加えなかったと見られる。また、ストーリー性を重視する点から、ストーリー性の豊かな『莊子』関連説話を優先して採録する傾向があるのではないかと考える。一方、『十訓抄』の編者は十箇条の教訓に基づいて、あらゆる説話や名言などを素材として各章段に編み込んだと見られ、『莊子』関連内容を採録する際にも本来の内容より、『十訓抄』における教訓の例証として相応しくないかどうかというのが、『十訓抄』編者の採録基準だと考える。

四、中世説話集における『莊子』の受容と変容について

『宇治拾遺物語』に見られる『莊子』関連説話の原拠は、それぞれ「漁父」篇・「外物」篇・「盜跖」篇であり、全て『莊子』雑篇に属されるものである。また『十訓抄』に見られる『莊子』関連内容の原拠は、「山木」篇・「徐無鬼」篇・「齊物論」篇・「秋水」篇・「天道」篇であり、その中に「齊物論」篇が内篇、「徐無鬼」篇が雑篇、他は全て外篇に属されると見られる。周知のように、『莊子』の外・雑篇は莊子ではない人物の手によるものだと思われ、また内篇は『莊子』思想を集約して説く部分として見做さ



れ、外・雑篇の内容は『莊子』思想を多様な形態で論じるものと見られている。同じ中世説話集である『宇治拾遺物語』と『十訓抄』は、前述したように両者が異なる採録意識を以て『莊子』関連内容を取捨選択したが、選択する範疇は殆ど外・雑篇に集中している。このことから中世説話集に見られる『莊子』そのものへの関心を垣間見ることができたのではないかと考える。

本論では、『宇治拾遺物語』と『十訓抄』における『莊子』関連内容の考察と分析を通して、日本中世前期説話集における『莊子』受容の一側面を明らかにしたと考える。しかし『宇治拾遺物語』と『十訓抄』だけでは、全ての中世説話集の代表とは言い難く、他にもまだ個性豊かな中世説話集が多くあり、その中でも『莊子』関連内容を記した説話があると考え。また、『莊子』関連内容は中世後期、更に近世になってから説話集を通してどのように言及されたのかなど、考察すべき点がまだ沢山あるが今後の課題にしたいと考える。

参考文献

(年代順)




一、テキスト

1. 阿部吉雄、市川安司、山本敏夫、遠藤哲夫校注・訳(1966)『新釈漢文大系第7巻 老子 莊子上』市川安司、遠藤哲夫校注・訳(1967)『新釈漢文大系第8巻 莊子下』、明治書院
2. 小林保治・増古和子校注・訳(1996)『新編 日本古典文学全集[50]宇治拾遺物語』、小学館
3. 浅見和彦校注・訳(1997)『新編 日本古典文学全集[51]十訓抄』、小学館
4. 小峯和明校注(1999)『新 日本古典文学大系[34]今昔物語集二』、小学館

二、書籍


1. 小長谷恵吉(1956)『日本国見在書目録解説稿』、小宮山出版
2. 益田勝実(1960)『説話文学と絵巻』、三一書房
3. 久松潜一、西尾實校注(1961)「正徹物語」『日本古典文学大系 65 歌論集 能楽論集』、岩波書店
4. 内田泉之助、網祐次(1963)『新釈漢文大系 14 文選(詩篇)上』贈答三、明治書院
5. 福永光司(1966)『莊子 内篇』、朝日新聞社
6. 永積安明(1966)『日本古典文学大系 84 古今著聞集』、岩波書店


7. 前野直彬(1967)『講座東洋思想 第3巻 中国思想 II』、東京大学出版会
8. 小林信明(1967)「天瑞第一」『新釈漢文大系第22巻 列子』、明治書院
9. 志村有弘(1974)『中世説話文学研究序説』、桜楓社
10. 武内義雄(1978)『武内義雄全集第六巻諸子篇一』、角川書店
11. 国東文麿(1978)『今昔物語集成立考』、早稲田大学出版部
12. 志村有弘(1982)『説話文学の構想と伝承』、明治書院
13. 池上洵一(1983)『新版 今昔物語の世界—中世のあけぼの—』、以文社
14. 今成元昭(1984)『研究資料日本古典文学③説話文学』、明治書院
15. 藤井貞和氏(1987)『物語文学成立史—フルコト・カタリ・モノガタリ』、東京大学出版会
16. 国東文麿(1985)『今昔物語集作者考』、武蔵野書院
17. 出雲路修(1988)『説話集の世界』、岩波書店
18. 三木紀人・浅見和彦校注(1990)『新 日本古典文学大系[42]宇治拾遺物語 古本説話集』、岩波書店
19. 服部武(1990)「荘子の説話と語録」『荘子—大知と逍遙の世界—』、富山房
20. 大曾根章介、金原理、後藤昭雄校注(1992)『新日本古典文学大系 27 本朝文粹』、岩波書店
21. 小林保治(1992)『説話集の方法』、笠間書院
22. 佐藤晃(1993)『説話集の世界 II—中世—』、勉誠社
23. 池上洵一(1993)『説話の講座第五巻 説話集の世界 II—中世—』、勉誠社

- 
24. 小沢正夫・松田成穂(1994)「仮名序」『新編 日本古典文学全集[11]古今和歌集』、小学館
 25. 永積安明校注・訳(1995)『新編日本古典文学全集[44] 方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』、小学館
 26. 阿部秋生、秋山 虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳(1998)『新編日本古典文学全集[25] 源氏物語 3』、小学館
 27. 小峯和明(1999)『宇治拾遺物語の表現時空』、若草書房
 28. 王迪(2001)『日本における老荘思想の受容』、国書刊行会
 29. 涂光社(2003)『庄子范畴心解』、中国社会科学出版社
 30. 劉榮賢(2004)「外雜篇中由「心」向「物」的思維發展」『莊子外雜篇研究』、聯經出版
 31. 宇野精一(2008)「六本 第十五」『新积漢文大系第 53 卷 孔子家語』、明治書院
 32. 山内洋一郎(2012)『本邦類書玉函秘抄. 明文抄. 管蠡抄の研究』、汲古書院
 33. 岡村繁(2015)『新积漢文大系 107 白氏文集 十一』卷六十六、明治書院
 34. 宋衛平、徐海榮主編(2015)「韓詩外傳」卷十『文瀾閣欽定四庫全書 經部 82』、杭州出版社

三、 論文

1. 益田勝実(1966)「中世的諷刺家のおもかげ--「宇治拾遺物語」の作者」『文学』34(12)、岩波書店、pp. 17-24
2. 鶴見充展(1981)「宇治拾遺物語における漢籍について--莊子関連説話を中心に--」『中世近世文学研究』14、中世近世文学研究会、pp. 24-35

- 
3. 宮田尚(1982)「『莊子』系孔子譚の選択—『今昔物語集』卷十への臆説—」『日本文学研究』18、梅光女学院大学日本文学会、pp. 73-81
 4. 中川徳之助(1985)「日本人の“莊子”受容」に関する覚え書」『日本文学研究』1、日本研究研究会、pp. 13-23
 5. 荒木浩(1986)「十訓抄と古今抄」『国語国文』55(7)、中央図書出版社、pp. 38-53
 6. 竹村信治(1986)「連想と展開—十訓抄の表現(1)—」『説話・物語論集』14、金沢大学古典文学研究会、pp. 21-31
 7. 竹村信治(1987)「連想と読み替え—十訓抄の表現(2)—」『金沢美術工芸大学学报』31、金沢美術工芸大学、pp. 1-7
 8. 竹村信治(1991)「宇治拾遺物語論—表現性とその位相—」『文芸と思想』55、福岡女子大学文学部、pp. 1-30
 9. 泉基博(1993)「『十訓抄』—新時代を意識した編纂」『国文学解釈と鑑賞』58(12)、至文堂、pp. 114-119
 10. 柳瀬喜代志(1993)「『十訓抄』「十段ノ篇」の序と童蒙教訓の書・要文抄」『国文学研究』(109)、早稲田大学国文学会、pp. 73-81
 11. 小峯和明(1997)「説話と物語文学はどう違うのか」『國文学』42(2)、學燈社、pp. 20-26
 12. 西田禎元(1997)「『十訓抄』の中国故事：帝王にまつわる説話をめぐって(上)」『創大アジア研究』、創価大学アジア研究所
 13. 小峯和明(2000)「説話の輪郭——説話学の階梯・その揺籃期をめぐる」『文学』1(4)、岩波書店、pp. 11-20

- 
14. 廣田收(2000)「『宇治拾遺物語』の思想：末尾話と冒頭話をめぐって」
『同志社国文学』53、同志社大学国文学会、pp. 1-13
 15. 廣田收(2001)「『宇治拾遺物語』の編纂と物語の表現」『人文学』
170、同志社大学人文学会、pp. 111-154
 16. 廣田收(2002)「『宇治拾遺物語』における同話と類話：説話分析の方法」
『同志社国文学』56、同志社大学国文学会、pp. 14-27
 17. 内田滯子(2012)「『十訓抄』序文再読」『日本文学』61(7)、日本文学
協会
 18. 野本東生(2013)「十訓抄における叙述方法：類比的装い」『国語と国
文学』90(4)、東京大学国語国文学会、pp. 41-56
 19. 葛綿正一(2020)「宇治拾遺物語のパラドクス：場所と移動」『沖縄国
際大学日本語日本文学研究』24(1)、沖縄国際大学日本語日本文学会、
pp. 21-56

四、 データーベース

1. JapanKnowledge ジャパンナレッジ Lib
<https://japanknowledge.com/library/>